

臼杵城下町跡

—都市計画道路祇園洲柳原線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020

大分県立埋蔵文化財センター

白杵城下町跡

－都市計画道路祇園洲柳原線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部臼杵土木事務所の依頼を受けて実施した、都市計画道路祇園洲柳原線街路改良事業に伴う臼杵城下町跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する臼杵市は大分県東部にあたり、瀬戸内海に面する地理的条件を生かして畿内や四国などからの様々な情報や物資の集積した地であり、古代から続く海上交通の拠点の一つであったといえます。

臼杵城下町の形成は、戦国時代に大友義鎮（宗麟）が丹生嶋城（臼杵城）を築城したことに始まります。大友氏の豊後除国後、丹生嶋城は近世城郭へと変貌を遂げますが、それは文禄3年（1594）に入封した福原直高と、慶長2年（1597）に入封した太田一吉によって進められたとされる臼杵城と城下の整備が契機となっています。そして慶長5年（1600）の稲葉貞通の入封後、城下町の拡大を伴う本格的な城の再整備が行われますが、これによって大友氏時代の城下町の景観は大きく変化し、今日に続く都市の原型が形作られました。

今回の調査範囲は臼杵城の南側に位置し、江戸時代に武家屋敷が形成された地域にあたります。調査の結果、戦国時代の土坑や近世の建物区画などの遺構を確認することができました。また、遺構に伴って多くの陶磁器・土器類、銅製水滴などが出土しました。これらの資料は当時の生活を知るうえで貴重なものといえます。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助となれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和2年3月31日

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 江 田 豊

例 言

1. 本書は平成27～30年度に実施した、大分県臼杵市大字臼杵に所在する臼杵城下町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画道路祇園洲柳原線街路改良事業に伴い、大分県土木建築部臼杵土木事務所の依頼を受けて、大分県教育庁埋蔵文化財センター及び教育庁埋蔵文化財センターから組織改正した大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 臼杵城下町跡の発掘調査期間及び調査担当者は下記のとおりである。

・第1次調査 平成27年12月8日～平成28年2月1日	調査担当：小林昭彦
・第2次調査 平成28年11月9日～平成29年1月11日	調査担当：宮内克己
・第3次調査 平成30年4月16日～平成30年5月8日	調査担当：宮内克己
・確認・立会調査及び月桂寺山門跡調査区（平成27～30年度）	調査担当：横澤 慈
4. 発掘調査の実施にあたり、発掘作業及び記録作成、現場管理等を支援業務として民間調査組織に委託した。発掘調査における実測図の作成及び写真撮影は上記調査員の指示のもと下記の支援業務受託者が行った。下記以外の調査に係る実測図作成及び写真撮影は横澤が行った。

・第1次調査 株式会社九州文化財総合研究所（調査技師 松浦 智・調査助手 河野真幸）
・第2次調査 株式会社九州文化財総合研究所（調査技師 芹川利幸・調査助手 河野真幸）
・第3次調査 株式会社九州文化財総合研究所（調査技師 井上索裕・調査助手 平野和行）
5. 出土品の洗浄、注記、接合、実測、遺物写真撮影、トレース等の整理作業は平成28・29年度及び令和元年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。遺構・遺物図版の作成は小林及び横澤が行った。
6. 出土遺物及び調査記録は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。
7. 本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。ただし第3章第5節は磁北を使用する。
8. 本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SK（土坑）、SD（溝）、SE（井戸）、SP（柱穴）、SX（遺物集中ブロック及び性格不明遺構）
9. 出土土器・陶磁器については大分県立歴史博物館企画普及課長吉田寛氏の御教示を得た。
10. 出土銅製品の成分分析は大分県立歴史博物館学芸員石川優生氏に依頼し、その結果を第4章に掲載した。
11. 本書の執筆は第1・2章、第3章5を横澤、第3章1～4、第5章を小林が行った。編集は横澤・小林が行った。

目 次

例言

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 整理作業・報告書作成の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 1次調査	7
第3節 2次調査	21
第4節 3次調査	39
第5節 月桂寺山門跡調査区及び確認・立会調査	47
第4章 自然科学分析	64
第5章 総括	66

挿 図 目 次

第1図 臼杵城下町跡発掘調査地点図	2	第22図 2次調査区出土遺物実測図(3)	32
第2図 臼杵城下町跡と周辺の遺跡	5	第23図 2次調査区出土遺物実測図(4)	33
第3図 1次調査区全体図	8	第24図 2次調査区出土遺物実測図(5)	34
第4図 1次調査区域1遺構分布図	8	第25図 2次調査区出土遺物実測図(6)	35
第5図 1次調査区域1土層断面図及び遺構実測図	9	第26図 2次調査区出土遺物実測図(7)	36
第6図 1次調査区域2遺構分布図	10	第27図 2次調査区出土遺物実測図(8)	37
第7図 1次調査区域2土層断面図及び遺構実測図(1)	11	第28図 2次調査区出土遺物実測図(9)	38
第8図 1次調査区域2遺構実測図(2)	12	第29図 3次調査区全体図	40
第9図 1次調査区域3遺構分布図	12	第30図 3次調査区域1遺構分布図	41
第10図 1次調査区域4遺構分布図及び土層断面図	13	第31図 3次調査区域1土層断面図及び遺構実測図	41
第11図 1次調査区域4遺構実測図	14	第32図 第3次調査区域2遺構分布図及び遺構実測図	42
第12図 1次調査区出土遺物実測図(1)	17	第33図 3次調査区域2土層断面図	42
第13図 1次調査区出土遺物実測図(2)	18	第34図 3次調査区出土遺物実測図(1)	44
第14図 1次調査区出土遺物実測図(3)	19	第35図 3次調査区出土遺物実測図(2)	45
第15図 1次調査区出土遺物実測図(4)	20	第36図 3次調査区出土遺物実測図(3)	46
第16図 2次調査区全体図	23	第37図 月桂寺山門跡調査区平面図・遺構実測図	49
第17図 2次調査区域1遺構分布図及び土層断面図	24	第38図 月桂寺山門跡調査区出土遺物実測図	50
第18図 2次調査区域2遺構分布図及び土層断面図	25	第39図 平成27年度確認調査出土遺物実測図	51
第19図 2次調査区域3遺構分布図及び土層断面図	26	第40図 平成28年度確認調査出土遺物実測図①	52
第20図 2次調査区出土遺物実測図(1)	30	第41図 平成28年度確認調査出土遺物実測図②	53
第21図 2次調査区出土遺物実測図(2)	31	第42図 平成29年度確認・立会調査出土遺物実測図	54

表 目 次

表1 陶磁器・土器類観察表	55	表4 石製品観察表	62
表2 瓦類観察表	62	表5 銅銭・金属製品観察表	63
表3 土製品観察表	62		

自然科学分析表・写真目次

Tab.1 蛍光X線分析結果	64
Phot.1 水滴のX線透過写真	65

写真図版目次

写真図版一 調査区全景(1~3次)	写真図版十二 出土遺物 22~47
写真図版二 1次区域1	写真図版十三 出土遺物 48~67
写真図版三 1次区域2	写真図版十四 出土遺物 68~97
写真図版四 1次区域3・4	写真図版十五 出土遺物 98~121
写真図版五 2次区域(1-1・1-2・2-1)	写真図版十六 出土遺物 122~146
写真図版六 2次区域(2-2・3-1・3-2)	写真図版十七 出土遺物 147~171
写真図版七 3次区域1	写真図版十八 出土遺物 172~194
写真図版八 3次区域2	写真図版十九 出土遺物 195~216
写真図版九 月桂寺山門跡(全景・1区)	写真図版二十 出土遺物 217~240
写真図版十 月桂寺山門跡2・3区	写真図版二十一 出土遺物 241~258
写真図版十一 出土遺物1~21	写真図版二十二 出土遺物 259~294

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

都市計画道路祇園洲柳原線は臼杵市祇園洲を起点とし、臼杵市の中心市街地である本丁地区を経て臼杵市柳原で国道217号に接続する幹線道路である。この祇園洲柳原線の改良事業は、当初は既存市道の改良として計画されていたが、平成11年から着手した都市計画事業では改良後に県道に移管される前提で事業が進められることとなり、大分県土木建築部臼杵土木事務所が事業者となって第1期工事の祇園洲から大字臼杵本丁の辻ロータリー間約0.2kmの改良事業が行われ、当該区間については平成24年3月に供用を開始した。

第2期工事は辻ロータリーから国道217号に接続する柳原間約1.2kmである。辻ロータリーから柳原方面へ約0.35kmの間は市街地で、その先は原山丘陵を登る山道となる。市街地区間は幹線道路として交通量が多いうえ、通学路でありながら歩道の整備が十分になされていないなど、歩行者の安全な通行や歴史的町並みの回遊性が損なわれた状態となっていた。そのため、誰もが安全で快適に移動できる交通空間を確保し都市内交通の円滑化を図るとともに、災害時の啓開路線として電線共同溝工事による無電柱化を進めることとなった。第2期工事は平成24年度から用地取得等に着手したが、市街地の路線区間は周知の埋蔵文化財包蔵地である「臼杵城下町跡」に該当することから、平成27年度以降、用地条件が整った箇所から順次埋蔵文化財の遺存状況を把握するための確認調査を実施した。その結果、各地で中世末～近世以降の遺構や遺物が確認されたことから、関係機関とその取扱いについて協議した結果、都市計画決定に係る工期が限られること、路線計画の変更が困難であることから平成27年度に第1次調査として264.6㎡、平成28年度に第2次調査として324㎡、平成30年度に第3次調査として378.5㎡の本発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の経過

臼杵城下町跡の発掘調査は、大分県土木建築部臼杵土木事務所からの依頼を受けて、大分県教育庁埋蔵文化財センター及び大分県立埋蔵文化財センター（平成29年4月の県教育委員会の規則改正により大分県教育庁埋蔵文化財センターから組織改正）が調査機関となって発掘調査を実施した。

各調査では重機での表土除去、人力掘削（包含層掘削・遺構検出・遺構発掘）、記録写真撮影、遺構実測、空中写真撮影、実測原図のデジタルトレース図作成、現場管理及び労務管理等は支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や層序確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら受託業者に作業指示を与え、調査員が常駐して全体を指揮監督する体制をとった。支援業務委託における作業班は1班につき調査技師・調査助手各1名、作業員10名を基本とした。

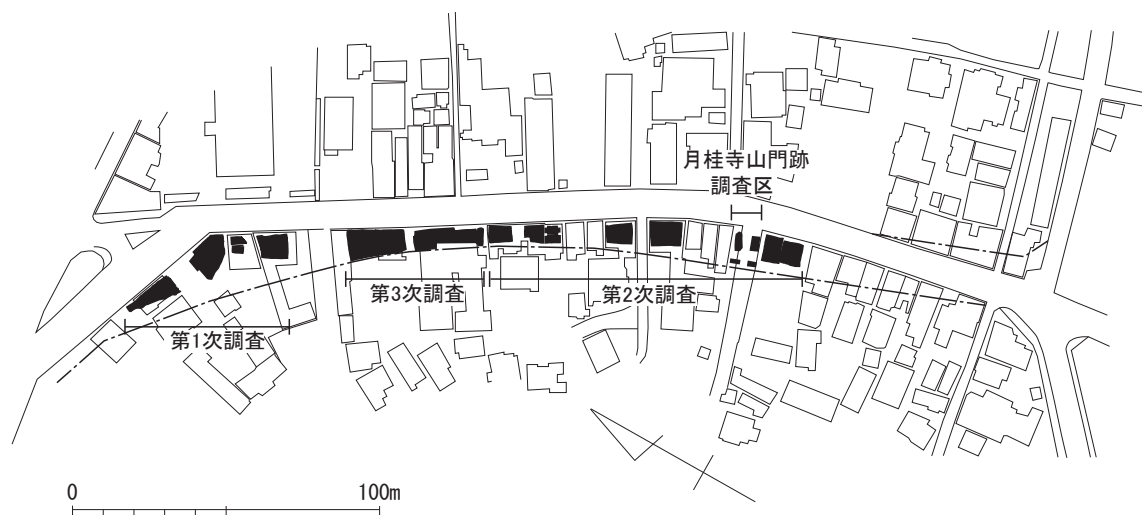
なお、第2次調査地に隣接する月桂寺山門跡の参道部分については多数の地中埋設物が存在することから工事立会とし、平成29・30年度に立会調査を実施し、その中で確認された遺構の記録作成と出土遺物の回収を行った。また、現道部における地中埋設物の付け替え工事等に際しても平成30年度に随時工事立会を実施し、埋蔵文化財の状況の確認と出土遺物の回収に努めた。

第3節 整理作業・報告書作成の経過

平成27年度から実施した発掘調査の出土品や調査記録類の整理作業は、大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて平成28年度から着手した。発掘調査同様、平成29年4月以降は県立埋蔵文化財センターにおいて、引き続き整理作業・報告書作成を実施した。

整理作業は年度ごとに臼杵城下町跡を含む当該年度整理実施事業を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原図のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の区分

第1章 発掘調査に至る経緯と調査の経過



第1図 白杵城下町跡発掘調査地点図

けや収納等諸作業である。作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。

報告書作成にかかる遺構・遺物実測図版作成作業や原稿執筆、編集作業は調査担当者が整理作業と並行して行い、令和2年1月に原稿を入稿し、3度の校正を経て本書を刊行した。令和2年3月末には本書を刊行し、これを以て本事業を完了した。

調査組織の構成（平成27年度～令和元年度）

調査主体 大分県教育委員会

調査機関 大分県教育庁埋蔵文化財センター（平成27・28年度）

大分県立埋蔵文化財センター（平成29～令和元年度）

平成27年度 本調査（第1次調査）

調査責任者 後藤一重（大分県教育庁埋蔵文化財センター所長）

調査総括 小柳和宏（同 次長兼受託事業班参事（総括）兼県事業班参事（総括））

調査事務 安藤正廣（同 管理予算班主幹（総括））

椎原由美（同 同 副主幹）

田上 剛（同 同 主査）

調査担当 松本康弘（同 県事業班主幹）

横澤 慈（同 同 主査）

小林昭彦（同 受託事業班専門員・調査担当）

平成28年度 本調査（第2次調査）及び整理作業

調査責任者 後藤一重（大分県教育庁埋蔵文化財センター所長）

調査総括 小柳和宏（同 次長兼県事業班参事（総括））

調査事務 安藤正廣（同 管理予算班主幹（総括））

田上 剛（同 同 主査）

志賀恵子（同 同 主査）

調査担当 松本康弘（同 県事業班主幹）

横澤 慈 (同 同 主査)
 宮内克己 (同 同 嘱託・調査担当)
 小林昭彦 (同 受託事業班専門員・整理作業担当)
 整理作業事務 江田 豊 (同 資料管理班参事 (総括)・整理作業総括)
 綿貫俊一 (同 資料管理班課長補佐・整理作業委託監理)

平成 29 年度 整理作業

調査責任者 阿部辰也 (大分県立埋蔵文化財センター所長)
 調査総括 江田 豊 (同 副所長兼調査第一課長)
 調査事務 神田 繁 (同 総務課長)
 石丸一輝 (同 総務課副主幹)
 堺井裕史 (同 同 主事)
 調査担当 横澤 慈 (同 調査第一課主査)
 土谷崇夫 (同 同 主任)
 宮内克己 (同 同 嘱託・整理作業担当)
 整理作業事務 松本康弘 (同 企画普及課長・整理作業総括)
 小林昭彦 (同 企画普及課専門員・整理作業委託監理)

平成 30 年度 本調査 (第3次調査)

調査責任者 江田 豊 (大分県立埋蔵文化財センター所長)
 調査総括 友岡信彦 (同 参事兼調査第一課長)
 調査事務 森次正浩 (同 副所長兼総務課長)
 石丸一輝 (同 総務課副主幹) ※9月30日まで
 岡本佳子 (同 同 主査) ※10月1日から、教育庁教育改革・企画課併任
 堺井裕史 (同 同 主事)
 調査担当 横澤 慈 (同 調査第一課主査)
 土谷崇夫 (同 同 主任)
 宮内克己 (同 同 嘱託・調査担当)

令和元年度 整理作業・報告書作成

調査責任者 江田 豊 (大分県立埋蔵文化財センター所長)
 調査総括 友岡信彦 (同 参事兼調査第一課長)
 調査事務 松本昌浩 (同 副所長兼総務課長) ※4月26日から
 岡本佳子 (同 総務課主査) ※4月25日まで
 工藤慶弘 (同 同 専門員)
 堺井裕史 (同 同 主事) ※11月29日まで
 池見佳輔 (同 同 主事) ※12月2日から
 調査担当 横澤 慈 (同 調査第一課主査・整理作業、報告書作成担当)
 小林昭彦 (同 調査第二課嘱託・整理作業、報告書作成担当)
 整理作業事務 吉田 寛 (同 調査第二課長・整理作業総括) ※4月25日まで
 後藤晃一 (同 同 ・整理作業総括) ※4月26日から
 服部真和 (同 調査第二課主任・整理作業委託監理)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

臼杵城下町跡の所在する臼杵市は、大分県の東部に位置し、東は豊後水道に面し、残る三方は縦木山や九六位山、冠岳、碁盤ヶ岳、姫岳、鎮南山等の標高400～700m級の丘陵が取り囲み、北は大分市、西は豊後大野市、南は津久見市、佐伯市と市境をなしている。臼杵市の面積は291.08 km²である。

地形的には大分県中部を東西にはしる臼杵－八代構造線に位置する。地質は後期白亜紀に形成された礫層である大野川層群を基盤とし、その上に約9万年前の阿蘇山噴火によって形成された火砕流堆積層である溶結凝灰岩が堆積する。市内の各所でこの阿蘇溶結凝灰岩の切り立った崖面が認められる。平地は少なく、臼杵湾に注ぎ込む臼杵川や末広川、熊崎川の流域に谷底平野が広がり、下流域に沖積平野を形成している。気候は瀬戸内気候区と南海気候区の遷移域に属し、温暖である。

産業としては農業・漁業といった第一次産業に加え、造船業や醸造業も盛んである。また、国宝・特別史跡の臼杵磨崖仏や臼杵城とその城下を核とした観光業も行われている。交通はJR日豊本線や東九州自動車道に加え、大分から臼杵を経て津久見へ抜ける国道217号、臼杵から野津を経て竹田方面へ抜ける国道502号、臼杵市と大分市東部の坂ノ市を結ぶ県道臼杵坂ノ市線（大分県道第205号）等が主要幹線となっている。また、臼杵から豊後水道を渡って愛媛県八幡浜市との間を結ぶフェリー航路も重要な足となっている。

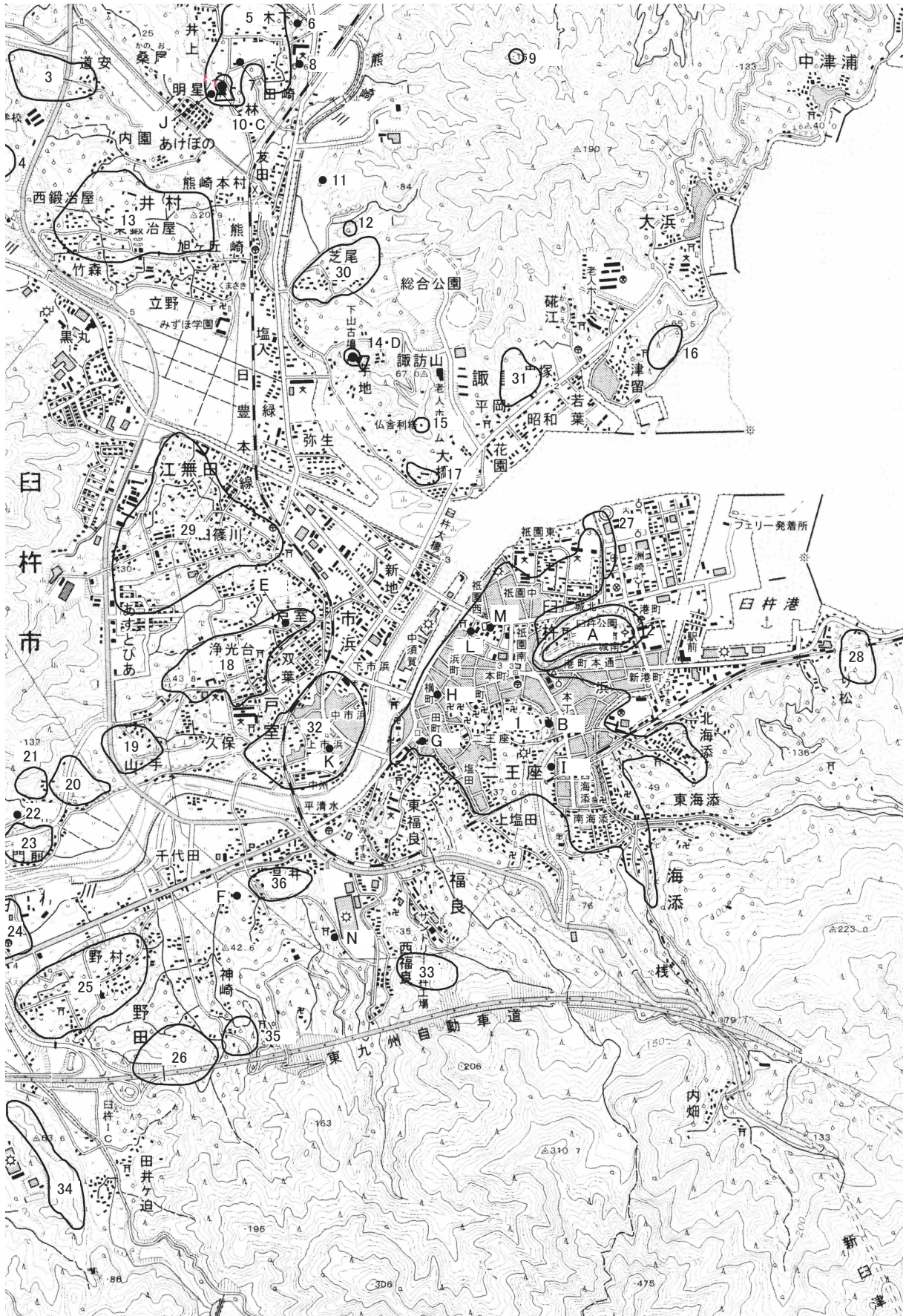
臼杵城下町跡は丹生島の対岸、二王座台地を取り巻くように形成された中世末～近世の都市遺跡である。この遺跡の形成は弘治2年（1556）に大友義鎮（のちの宗麟）によって丹生島に城が築かれたことに始まるが、この丹生島は臼杵湾の最奥部に浮かぶ島で、干潮時にはわずかに陸地とつながる陸繋島を利用した城郭であった。城下町は臼杵川の沖積作用と、臼杵湾海水流によって形成された海岸段丘に展開し、以後入江や湿田を埋め立てながら拡大していったものである。

第2節 歴史的環境

臼杵城周辺で確認される考古資料で最も古いものは縄文時代早期である。臼杵城跡の発掘調査で数点の押型文土器や無文土器が出土している。弥生時代の遺跡は臼杵川を少しさかのぼった所に位置する野村台遺跡で、竪穴建物や貯蔵穴、環溝が調査されている。古墳時代では臼杵川河口部の北岸にあたる諏訪山丘陵で、前方後円墳の下山古墳が築かれる。下山古墳と、そのさらに北方にある白塚古墳はいずれも石甲を伴うことで知られ、白塚古墳の石甲は国の重要文化財に指定されている。臼杵城周辺において古代の遺跡はあまり知られていない。この時期は臼杵川をさかのぼった深田・中尾地区において、臼杵磨崖仏が形成され、その周囲に遺跡が展開する。臼杵磨崖仏の造頭は平安時代末頃とされ、山王石仏横の丘陵上には嘉応2年（1170）と承安2年（1172）の紀年銘をもつ一石彫成の五輪塔がある。この2基の五輪塔は紀年銘を持つ石造五輪塔としては岩手県平泉町の中尊寺釈尊院にある仁安4年（1169）銘の五輪塔に次いで古いものである。

臼杵城の歴史は、弘治2年（1556）に大友義鎮（のちの宗麟）が丹生島に築城し、府内から臼杵へ拠点に移したことに始まる。16世紀後半の臼杵は南蛮貿易の拠点のひとつとなり、大友義鎮の援助でカトリック教会も建設されている。しかし、天正14年（1586）に島津氏の侵攻により、大友宗麟の籠った丹生島城は落城こそ免れたものの、城下は壊滅的な被害を受けた。天正15年に大友宗麟が没し、文禄2年（1593）に宗麟の嫡子大友吉統は朝鮮出兵での失態を咎められ、豊後を除国されてしまう。替わって臼杵には豊臣系の大名が入ることになり、まず福原直高が、次いで慶長2年（1597）には太田一吉が入封する。この福原・太田氏の段階で丹生島城は近世城郭へ変貌を遂げたとみられ、城の西に広がる祇園洲を埋め立てて新たに三ノ丸を造成したのは太田氏段階とされている。

慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦後、臼杵には稲葉貞通が5万石で入封し、以来明治4年（1871）の廃藩置県まで、稲葉氏が臼杵を統治する。稲葉氏時代も城郭及び城下の整備が続けられ、元禄年間頃には本丸・二の丸の畷線が総石垣化する。宝暦13年（1764）には二ノ丸・三ノ丸の全焼する大火に見舞われるなど、数度の災害被害も受



第2図 白杵城下町跡と周辺の遺跡 (1/25,000 大分県教育委員会発行「大分県遺跡地図」に加筆、一部修正)

第2章 遺跡の位置と環境

けている。また、二王座台地には稲葉家の菩提寺として慶長13年（1608）に月桂寺が建立され、今日でも本堂、経蔵、中門等が近世以来の建物として現存する。

明治4年（1871）の廃藩置県後、明治6年には城郭存廃決定により臼杵城は廃城となり、内務省管轄の公園として一般に開放されることとなったが、臼杵城の建物は朽ちるに任せた状態であつたらしい。明治10年（1877）に勃発した西南戦争では臼杵城も戦場となり、旧臼杵土族が結成した臼杵隊は政府軍につき臼杵城に籠城したものの、薩軍奇兵隊の攻撃により臼杵城は陥落している（後、6月9日に官軍が奪還）。その後、臼杵城は天守をはじめとした建物が取り壊され、また明治時代末～大正初年頃には天守台や本丸墨線・櫓台の石材の一部が土木材料として抜き取られるなどしたが、昭和41年（1966）に大分県指定史跡に指定されその保護が図られた。また、都市公園としての整備が行われ、現存する畳櫓、卯寅口門脇櫓に加え、二の丸大門櫓が復元され、天守台石垣等も整備されるなど、その保存活用が図られている。また、臼杵城下町跡についても周知の埋蔵文化財包蔵地として登録され、開発事業に対して発掘調査が行われ、その形成過程が明らかにされつつある。

第2図の遺跡番号

1 臼杵城下町跡	10 臼塚古墳	19 本田館跡	28 琵琶ヶ鼻台場跡
2 臼杵城跡	11 神下山古墳	20 小中尾遺跡	29 田篠台遺跡
3 道安遺跡	12 仲山遺跡	21 海蔵寺跡	30 芝尾台遺跡
4 坊主山遺跡	13 井村遺跡	22 門前地下式横穴	31 平岡台遺跡
5 三重野遺跡	14 下山古墳	23 円福寺跡	32 市浜遺跡
6 鏡塚古墳	15 諏訪山遺跡	24 持田遺跡	33 高見寺墓地
7 丸山古墳	16 的場山台場跡	25 野村台遺跡	34 御狩場遺跡
8 田崎古墳	17 諏訪横穴	26 野田遺跡	35 神崎遺跡
9 竜王山遺跡	18 戸室台遺跡	27 将棋頭台場跡	36 温井クルスバ

※指定文化財

A 臼杵城跡（県史跡）	F 塩石の石風呂（県有形民俗）	K 旧板井家住宅（市有形）
B 月桂寺境内（県史跡）	G 三重塔（県有形）	L 八坂神社本殿（県有形）
C 臼塚古墳（県史跡）	H 石敢当の塔（市有形民俗）	M 旧平井家住宅（県有形）
D 下山古墳（国史跡）	I 旧丸毛家住宅（市有形）	N 稲川清記の墓地（市史跡）
E 戸室一石五輪塔（市有形）	J 石甲（国重要文化財）	

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

今回の発掘調査は、967.1㎡を対象として3次の本調査及び立会調査等を実施したものである。調査地区は白杵城の南西部に展開していた武家屋敷に該当する。調査の対象となった地区は、都市計画道路祇園洲柳原線の起点寄りにあたる。当該地の状況は、確認調査の調査所見のとおり近代以降の造成や建物基礎によって近世の生活面が大きく損なわれていることがわかった。このため、近世武家屋敷の内容を明確にすることは困難な状態であった。調査の概要は次のとおりである。また、調査は埋設物や安全確保などを必要などから、限られた範囲となった。

- 1 次 調 査：平成 28 年度実施。調査対象地のうち最も北側にあたり、辻の交差点南に位置する。土坑、ピット、石組遺構、井戸などを確認。調査面積 264.6㎡であった。
 - 2 次 調 査：平成 29 年度実施。調査対象地の中央部に位置する。土坑、溝などを確認。調査面積 324㎡。
 - 3 次 調 査：平成 30 年度実施。調査対象地の南部に位置する。土坑、ピットなどを確認。調査面積 378.5㎡。
- 立会調査等：平成 30 年度実施。

第2節 1次調査

区域1（第4・5図）

本調査区では、近世の整地面は残っておらず、地山の砂層上面近現代の遺構として井戸や土坑、石組遺構などを検出した。調査面積 73.2㎡であった。

基本層序は調査区北壁（A - A'）と西壁（B - B'）の2箇所を観察した。現代のアスファルト面から近現代、近世の堆積を経て地山の砂層面まで約 0.7m ～ 1m の深さがあった。堆積していた土層は 15 層あった。西辺部南北方向の土層では、地表下 0.7m ～ 1.3m まで近現代の造成（1層～11層）であり、上層（1層～4層）は現在の造成・建物基礎に伴う掘削や構造物の残滓が顕著にみられた。基礎は砂層の深い位置まで及ぶものと想定された。

このように、近代から現在に至る間の度重なる造成などで近世の生活面がほとんど掘削されていることを示していた。したがって、近世の武家屋敷を構成した建物や施設など痕跡はほとんど確認できず、わずかに地山に達する深さで掘られた土坑、溝、一部の整地層などが調査の対象となった。

遺構は土坑 4 基（S 1・3・4・5）、ピット 2 個（S 2・6）、石組遺構 1 基（S 8）、井戸 1 基（S 9）、落込み 1 基（S 10）であった。

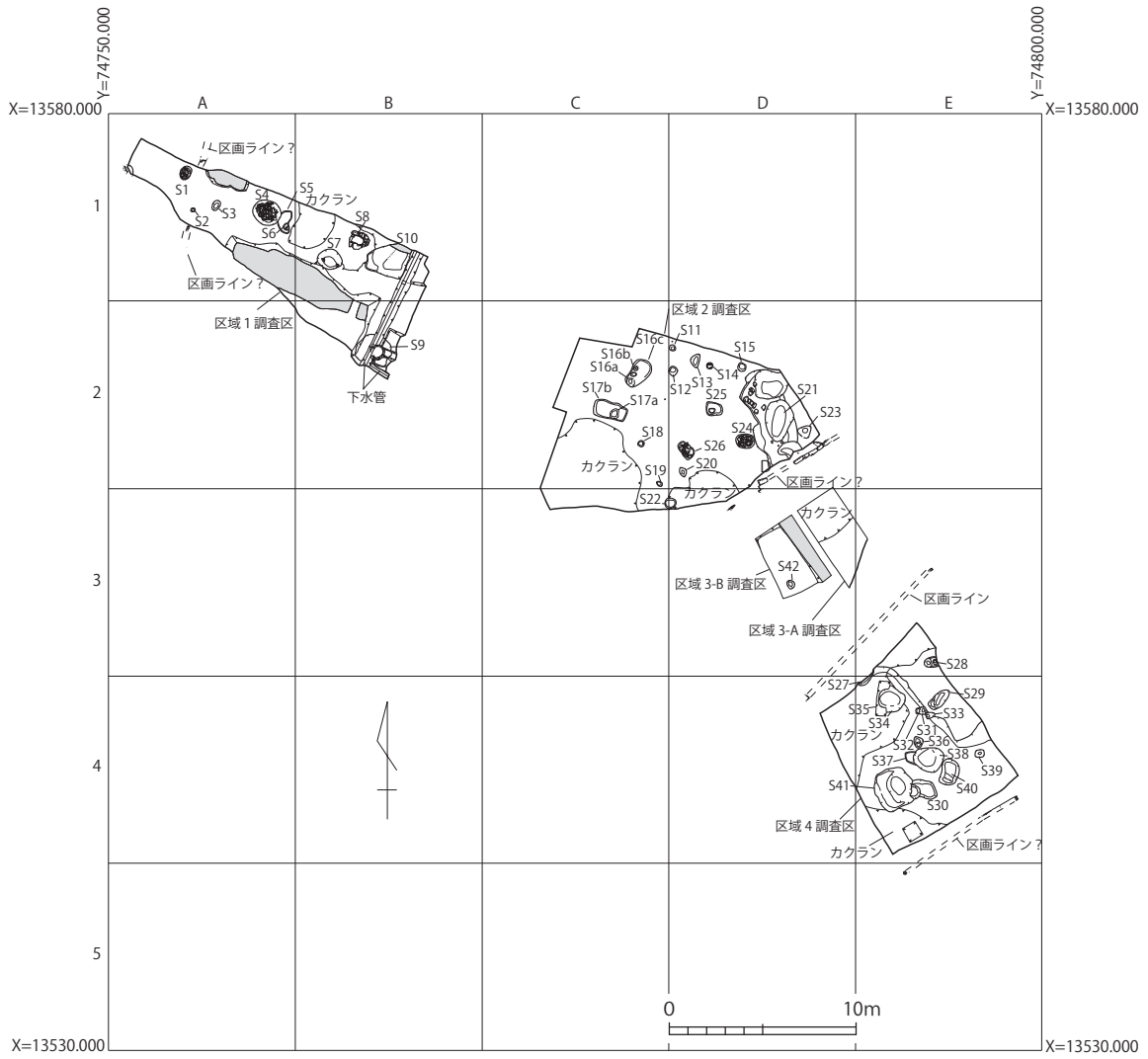
土坑（S 1・3・4・5）は長楕円形をなし、規模は 0.6m ～ 1.5m × 0.4m ～ 1.3m、深さ 0.2m ～ 0.5m であった。このうち、S 1・4 は礫が充填していた。S 4 は S 5 を切断して構築されており、長径 1.5m × 短径 1.3m、深さ 0.4m の規模であった。堆積土は上層が黒褐色土、下層は砂質であった。堆積土には礫や瓦片などが多く混じっていた。遺物では銅製水滴の完形品が土坑の北壁に接して出土した。共伴した京都系土師器の型式から 16 世紀後半に比定できる。S 7 は京都系土師器が廃棄された状態で出土した。ピット（S 2・6）は浅く調査区内で掘立柱建物を示す配置は確認できなかった。時期は 16 世紀代。

石組遺構（S 8）は 1.08m × 1m の不整形の掘形をもち、南北の長辺と東の短辺の3ヵ所に円礫、割石を各 2 個配置し内側を直線的に整え長方形の平面形となしていた。西側の短辺には配石がみられなかった。深さは 0.2cm ほどであり、上端部は礫を重ねさらに高くしていた可能性があった。削平され確認できなかった。基底面の砂層に変色がみられ、便所の可能性が考えられた。

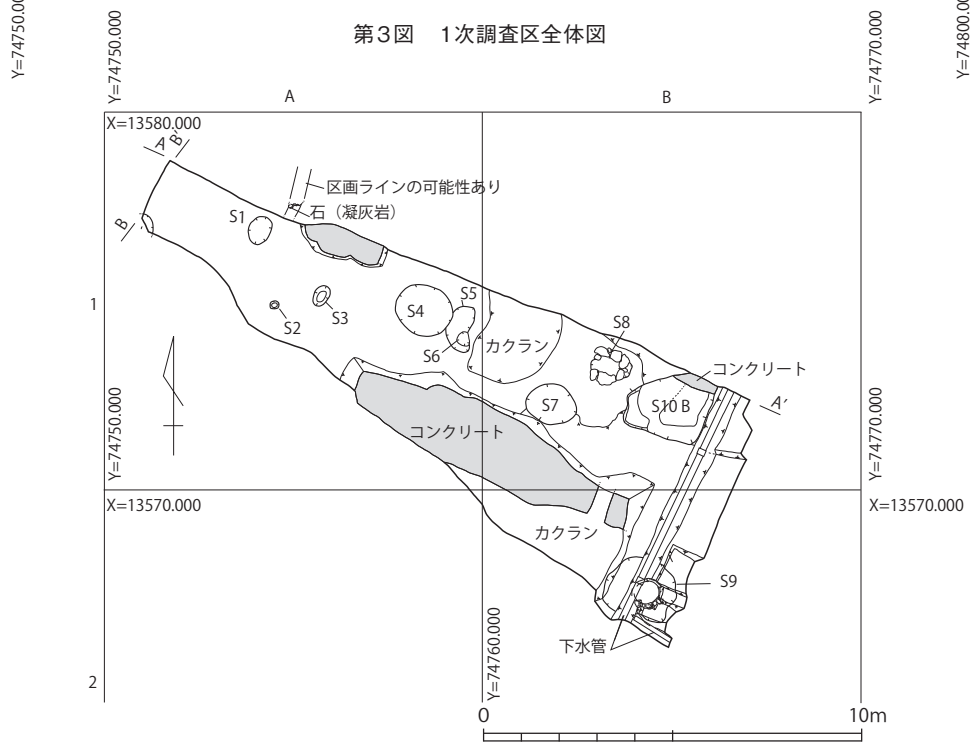
井戸（S 9）は径 0.4m の円形の掘形に凝灰岩の井戸枠を設けていた。井戸の上面には棧瓦等の瓦類が井戸枠の一部に用いられていた。深さは 0.5m までを確認したが基底面に達していなかった。

落込み（S 10）は調査区北隅に位置し、1m × 1m の不整形を呈する。深さ 0.4m ほどであった。

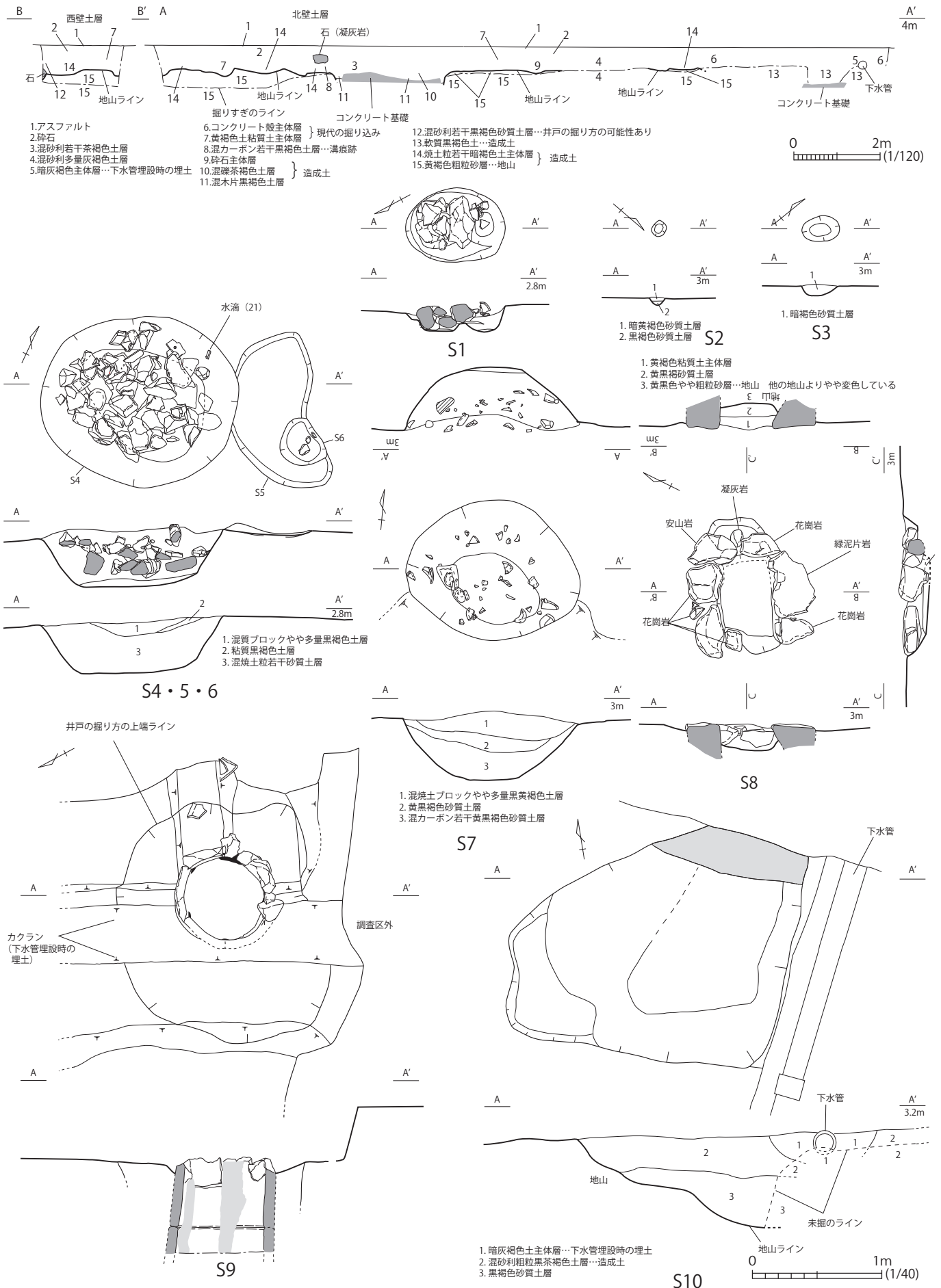
第3章 調査の成果



第3図 1次調査区全体図



第4図 1次調査区域1遺構分布図



第5図 1次調査区域1土層断面図及び遺構実測図

第3章 調査の成果

区域2 (第6～8図)

本調査区は、区域1と同様に近世の整地面は残っておらず、地山の砂層(31層)上面まで近現代の造成がおよんでいた。地山の砂層上面に土坑やピットなどを検出した。調査面積100.8㎡であった。

基本層序は調査区北壁(A-A')と東壁(B-B')の2箇所を観察した。北壁では現在の地表アスファルト面から近現代、近世の堆積を経て地山の砂層面まで約0.5～0.9mの深さであった。層序は上層(1層～11層)が現在の造成に伴う掘削、土盛りや構造物であった。12層～30層は近世、中世に堆積と想定されるが、焼土や炭化物を多く含み明確な造成面を確認することはできなかった。

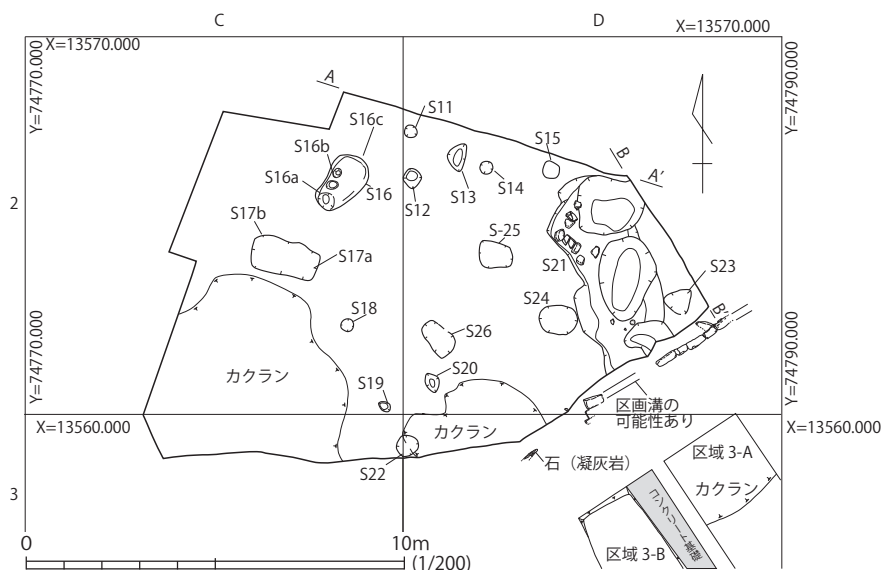
東壁では北側1/3が現代の造成で大きく掘削されていた。一方南側は比較的層序が残っていた。南端では北東から南西に伸びる石組溝の北片側を確認した。これは凝灰岩を用いて凹状の構造をもつ溝と考えられた。溝の掘削形が近世・近代の堆積土を切っていることから。設置時期を近現代と想定した。石組溝は区画を示すと考えられ、この区画位置は近世から継承されていた可能性が高い。

遺構は土坑5基(S15・16・17・24・26)、ピット10(S11～14、S18～20、S22・23・25)、溝状落込み1(S21)、であった。土坑はS15が径0.9mの円形、S16・24は各々の短径0.8m、1m、長径1m、1.7mの楕円形、S17・26は各々0.6m×1m、1m×1.7mの方形であった。土坑の深さは0.2m～0.35mが残っていた。また、S24・26は土坑内に礫が充填されていた。S26は土坑内から18世紀～19世紀の陶器が出土しており、近世城下町の時期に機能した可能性がある。

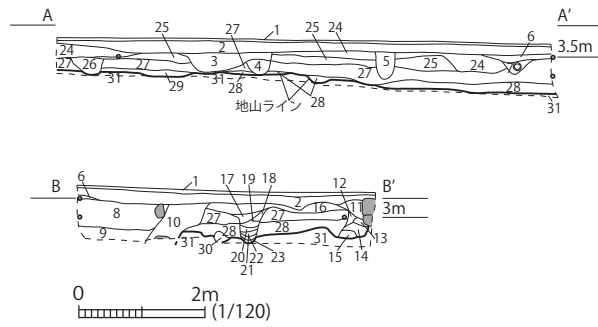
ピットは径0.3m～0.7m、深さ0.1m～0.7mの規模をもつ円形が主体であるが、S13・23は三角形、S25は方形であった。ピットは掘立柱建物の柱穴となる配置ではなかった。S21は確認長5m、幅1m、深さ0.5mの南方向から延びる溝状の遺構である。堆積土に炭化物や焼土が若干含まれている。また、3基の土坑に東辺を切られている。

区域3 (第9図)

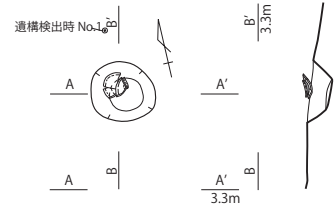
本調査区は、区域2と区域4の間に挟まれた範囲である。この範囲内には現在の建物基礎が残っており、全域に工事掘削が及んでいることが想定できた。しかし、区域2の南側と区域4の北部に北東から南西に伸びる石組列2条を確認できたため、石組列に区画された範囲のうち、調査可能な21.2㎡について近世遺構の存否・内容を確認することとなった。調査の結果、当初予想したような近世の整地面は残っておらず、地山の砂層上面まで近現代の掘削がみられた。遺構として土坑(S42)を確認した。時期は不明であるが覆土の状態などから近世～近代と想定された。



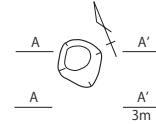
第6図 1次調査区域2遺構分布図



- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1. アスファルト | 16. 暗茶褐色土主体層…造成土 |
| 2. 砂利 | 17. 混カーボン・焼土粒やや多量 黒褐色土層 |
| 3. 黄褐色土・焼土ブロック主体層 | 18. 混カーボン・焼土粒若干 暗黄褐色土層 |
| 4. 黄褐色土小ブロック主体層 | 19. 混カーボン・焼土粒微量 黄褐色砂質土層 |
| 5. 灰褐色土主体層…現代の掘り込み | 20. 混カーボン・焼土粒やや多量 軟質粘性暗灰褐色土層 |
| 6. 茶褐色土主体層…造成土 | 21. 混カーボン・焼土粒微量 暗灰色粘質土層 |
| 7. 暗灰褐色土主体層…下水管理設時の埋土 | 22. 19層と同じ |
| 8. 焼土・カーボン主体層 | 23. 21層と同じ |
| 9. 暗褐色土主体層 | 24. 焼土主体層 |
| 10. 焼土粒若干 灰褐色土層 | 25. 黄褐色土ブロック主体層 |
| 11. 黒褐色粘質土層 | 26. 混焼土ブロック若干 暗褐色土層 |
| 12. 混焼土ブロック若干黒黄褐色粘質土 | 27. 混焼土ブロック・黄褐色土ブロック・茶黒褐色土層 |
| 13. 混カーボン粒・黄色小ブロック黒灰褐色粘質土層 | 28. 混カーボン・焼土ブロック主体層…近世焼土層 |
| 14. 混カーボン粒若干暗灰色粘質土層(溝の堆積と思われる) | 29. 黄褐色土主体層 |
| 14層は近世の溝覆土の可能性 | 30. 暗黄褐色砂質土層 |
| 15. 混カーボン粒・黄褐色土小ブロック焼土主体層(中世?) | 31. 黄褐色粗粒砂層…地山 |

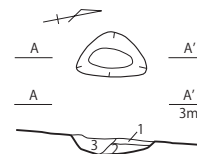


暗黄褐色砂質土層(単層)
S11



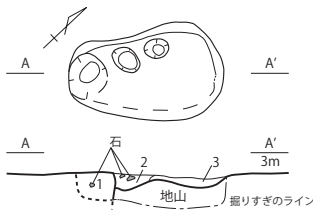
1. 混カーボン若干 黄黒褐色土層
2. 砂質黒黄褐色土層

S12



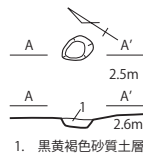
1. 黒黄褐色砂質土層
2. 茶褐色粘質土ブロック層
3. 混黄褐色土ブロック 黄褐色砂質土層

S13



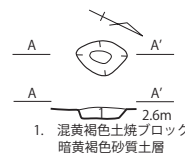
1. 黒褐色土層
2. 混黄褐色粘質土ブロック 礫主体層
3. 混カーボン若干 茶黒褐色土層

S16



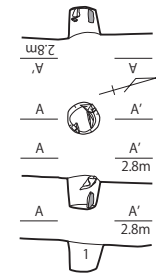
1. 黒黄褐色砂質土層

S19



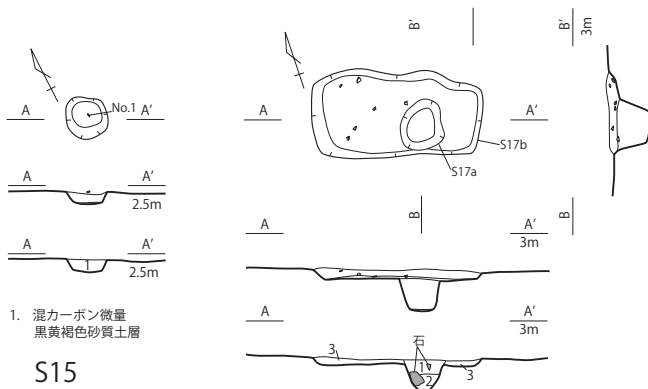
1. 混黄褐色土焼ブロック 暗黄褐色砂質土層

S20



1. 混黄褐色粘質土ブロック若干 黒黄褐色砂質土層

S14

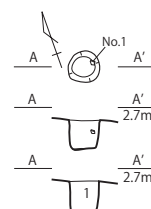


1. 混カーボン微量 黒黄褐色砂質土層

S15

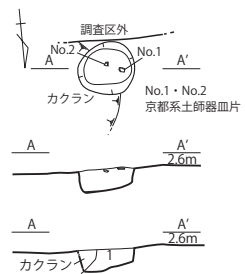
1. 混カーボン微量 暗灰褐色砂質土層
2. 黄褐色砂質土層
3. 暗黄褐色砂質土層

S17



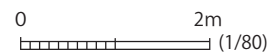
1. 灰褐色砂質土層

S18



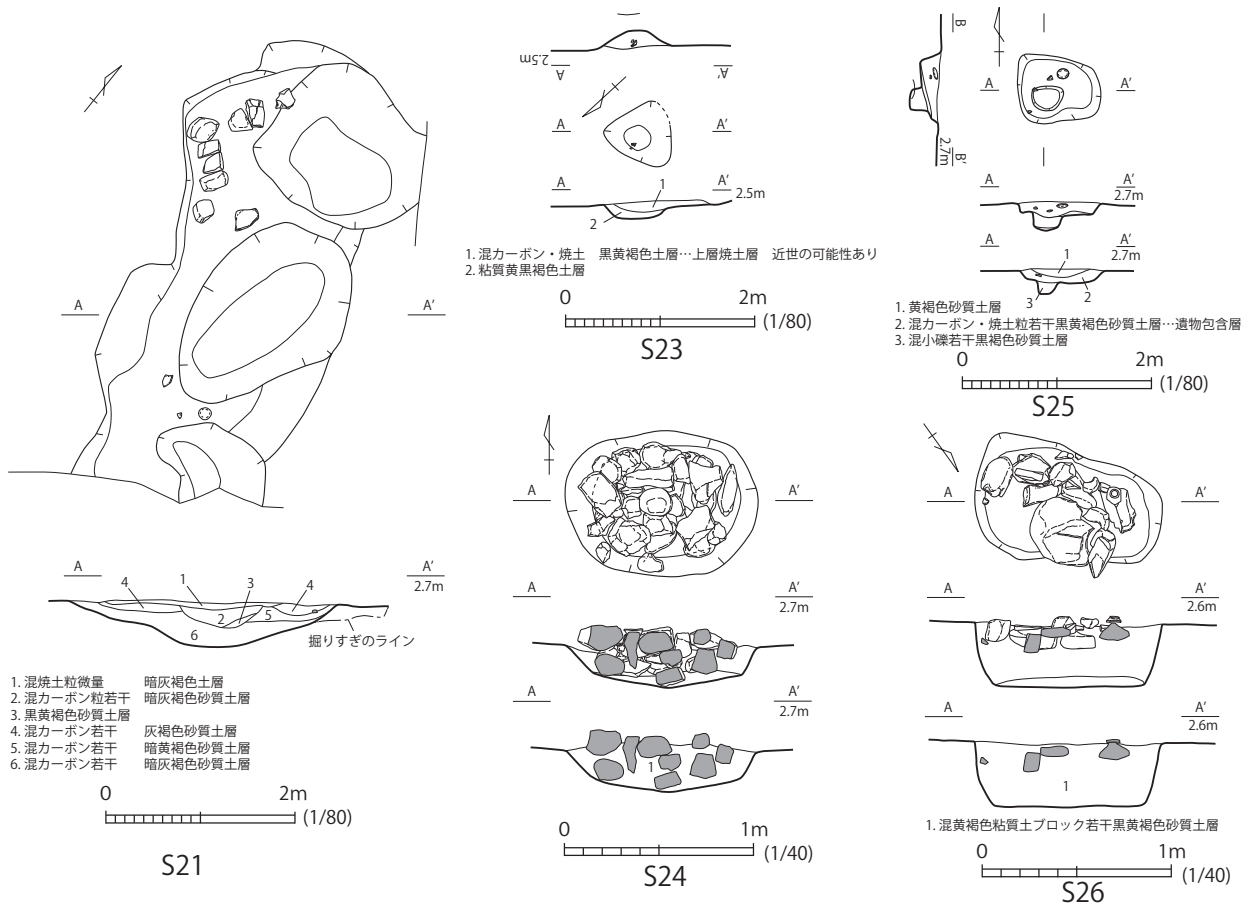
1. 混カーボン・焼土粒若干 黄黒褐色土層

S22

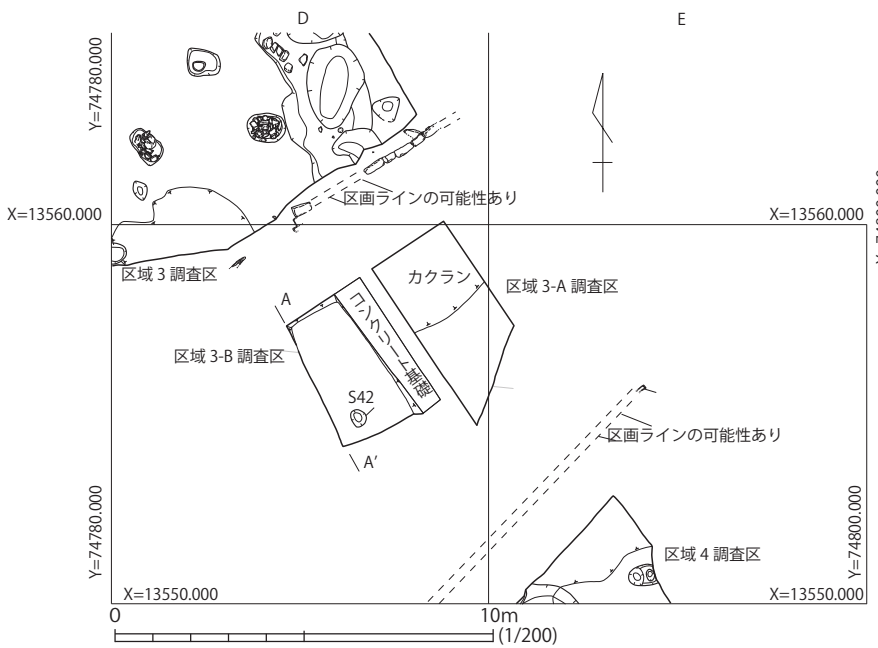


第7図 1次調査区域2土層断面図及び遺構実測図(1)

第3章 調査の成果



第8図 1次調査区域2遺構実測図(2)



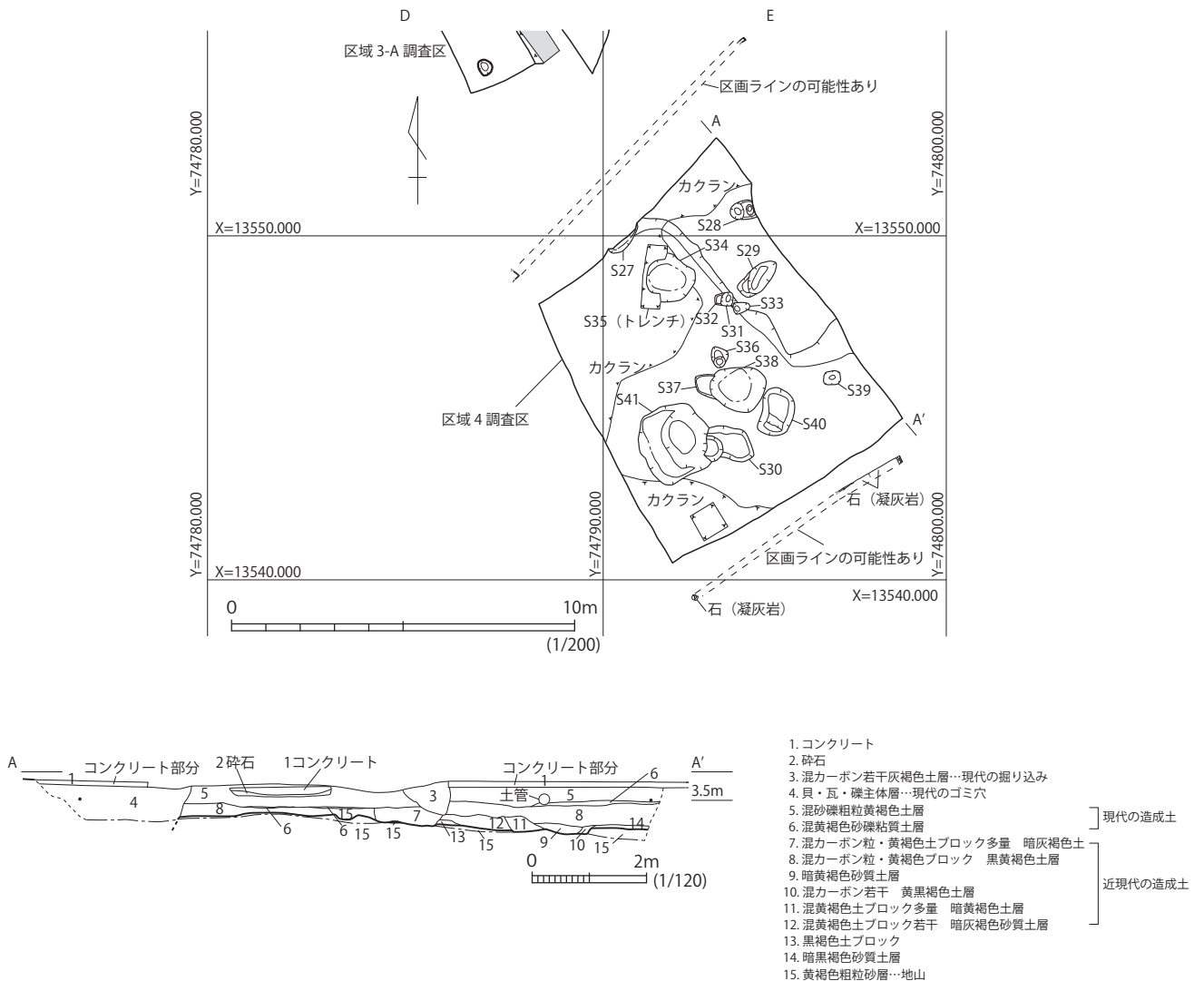
第9図 1次調査区域3遺構分布図

区域4 (第10・11図)

本調査区は今回の調査では最も南側に位置する 264.6㎡であった。先述の区域北側で確認した石組とさらに南部の石組列が区域4の区画と考えられる。基本層序は調査区東で観察した。現代のアスファルト面から近現代の堆積を経て地山の砂層面まで約0.6m～1mの深さがあった。堆積していた土層は15層あった。このうち6層までは現代の造成、基礎であり、7層～9層は近現代の造成土であった。15層の砂層上面は高低差があり、地山が大きく削られていることが想定された。他の区域と同様に近代から現在に至る間の度重なる造成などで近世の生活面がほとんど掘削されていた。したがって、近世の武家屋敷を構成した建物や施設などの痕跡はほとんど確認できず、わずかに地山に達する深さで掘られた土坑、ピット、落込み、井戸と思われる遺構などが調査の対象となった。

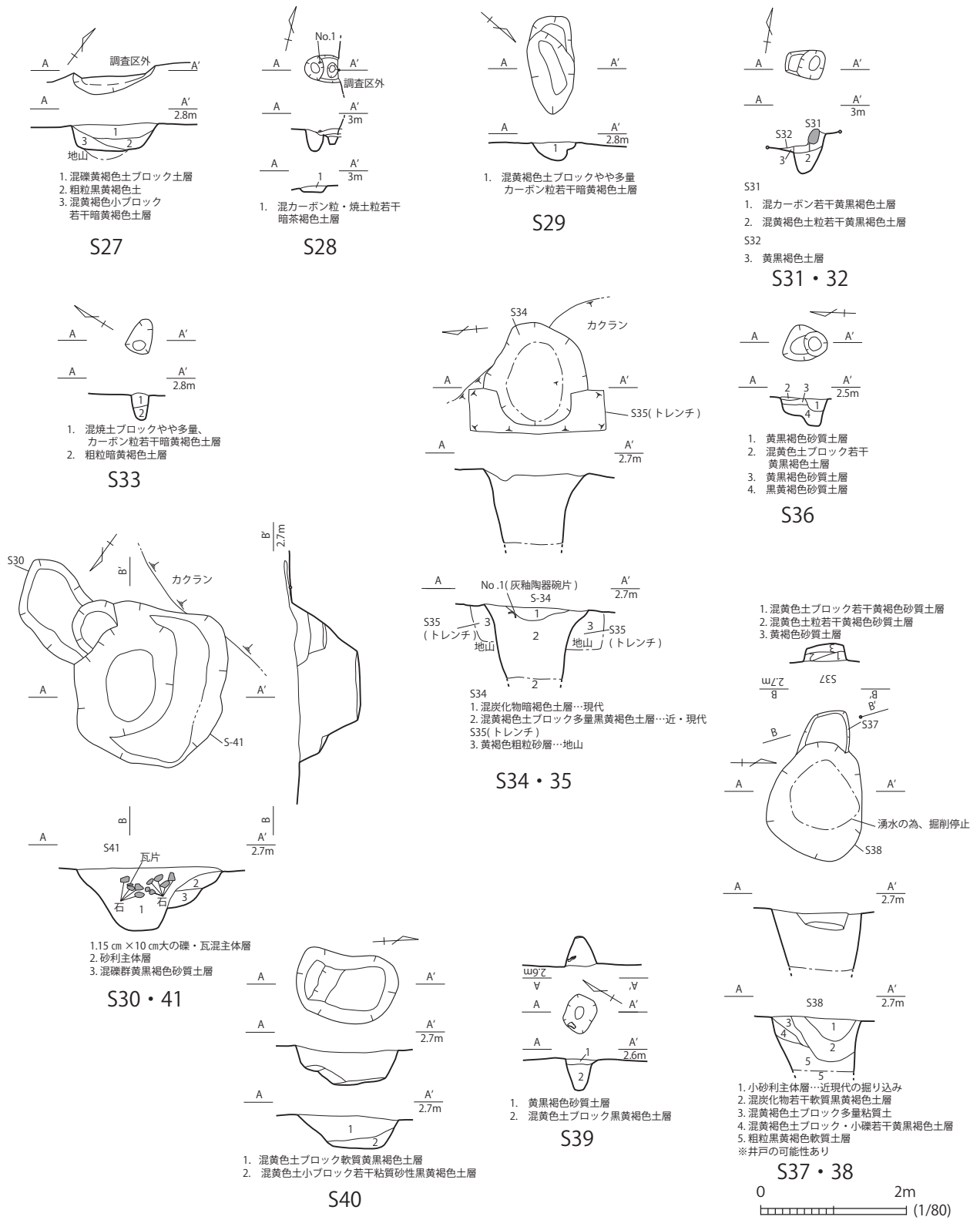
遺構は、土坑6基 (S 27・29・30・33・37・40)、ピット5 (S 28・31～33・36・39)、落込み1基 (S 35)、井戸状遺構2基 (S 34・38) であった。

土坑はS 27・29・30が長楕円形をなし、規模は0.6m～1.5m×0.4m～1.6m、深さ0.2m～0.5mであった。落込み・S 35は径1m、深さ0.8mの不整形円形を呈する。S 34・38は径1.4m前後の規模をもち、筒状に立ち上がることから井戸の可能性を考えた。底面は遺構確認面から1mで湧水点に達するため確認できなかった。S 28・31～33・36・39は径0.3m～0.5m、深さ0.2m～0.6mのピットであった。



第10図 1次調査区域4遺構分布図及び土層断面図

第3章 調査の成果



第11図 1次調査区域4遺構実測図

出土遺物（第12図～第15図）

図示した遺物は1～21が区域1、22～42は区域2、43～67は区域4から出土したものである。

区域1

遺物が出土した遺構は、S4（第12図1・2・17、第13図21）、S7（第12図3～10・12）、S9（第12図18・19）、S10（第12図11）である。また、第12図13～16・20は表土中から採取した。

S4（1・2・17、21）1肥前磁器の染付碗の破片である。混入品と想定した。2は京都系土師器皿の破片であるが、器壁が厚い特徴をもつ。16世紀後半～末頃。17は埴瓦の破片である。21は長方形の銅製水滴で長さ6.5cm、幅3.3cm、高さ1.3cmの大きさをもつ。注口部は上面の一角に付く。細く短い筒状の突起である。水入口は上部中央部にもつ。長さ1cm、幅0.8cmの長方形を呈し、高さ0.5cmである。

S7（3～9・11・12）京都系土師器である。大きさは口径からみると、3～6は10cm台、7・11は12cm～13cm、12は15cm台と3区分できる。器高は1.6cm～2.4cmの範囲に収まる。器壁が厚い特徴をもつ。時期は16世紀後半～末。

S9（18・19）18は棧瓦の破片である。19は丸瓦の破片であるが、狭端面の一部が残る。

S10（10）京都系土師器の破片である。復元口径は12.8cm、深さ2.3cmの大きさをもつ。時期は16世紀後半。

表土中（13～16・20）13は瀬戸美濃系陶器の植木鉢である。口縁部破片。19世紀と想定される。14は土師の完形品である。全長4.4cm、幅1.5cm、重さ14gの大きさをもつ。15・16は軒平瓦の破片であるが、唐草文の一部を確認できる。20は鞆の羽口の破片である。被熱黒変部分を確認できる。

区域2

遺物が出土した遺構は、S11（第13図34）、S15（第13図39）、S21（第13図33）、S25（第13図31）、S26（第13図27）である。また、第13図22～26・28～30・32・35～38・40～42は表土中から採取した。

S11（34）京都系土師器の完形品である。口径は12.1cm、深さ2.7cmの大きさをもち、器壁は厚い。時期は16世紀後半。

S21（33）京都系土師器の完形品である。若干焼き歪を生じており口径は12.1cm～12.5cm、深さ2.5cmの大きさをもつ。時期は16世紀後半。

S25（31）京都系土師器の完形品である。口径10.6cm、深さ2.2cmとやや小型である。内面に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。時期は16世紀後半。

S26（27）陶器碗の底部である。内外面に施釉がみられる。産地は不明。時期は18～19世紀。

表土中（22～26・28～30・32・35～38・40～42）22・23は景德鎮窯青花皿の口縁部破片である。口縁部～底部が残る23は口径11.3cm、器高2.4cm、底径6cmの大きさである。時期はともに16世紀後半。24は肥前染付広東碗である。1/3が残る。製作年代は1780年～1810年。25は磁器小坏の完形品である。大正時代。26は龍泉窯青磁大皿の底部付近である。15世紀。28は肥前陶器瓶の底部である。時期は17世紀頃と考えられる。29は肥前陶器皿である。1/2個体が残る。口径12cm、器高3.5cm、底径3.9cmの大きさをもつ。見込みに胎土目がある。製作年代は1590年～1600年。

30・32・35は京都系土師器である。30は1/2個体が残る。口径9.8cm、深さ2.1cmと小型である。内面に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。32は1/4個体が残る。復元口径11.8cm、器高2.5cmとやや小型品である。35は口縁部の一部と底部が残る。ともに時期は16世紀後半。36は土師器皿の完形品である。底部に回転糸切痕が残る。口径10.5cm、器高1.9cm、底径7.9cmの大きさをもつ。体部は底部から外反して立ち上がるが浅い。内面に煤が付着している。37・38は備前の陶器である。37は浅鉢の破片で復元口径20.4cmの大きさをもつ。時期は16世紀。38はすり鉢の破片である。復元口径30cmの大きさをもつ。39は土垂の完形品である。40・41は遺構検出時に採取した銅銭である。40は寛永通寶である。古寛永1期にあたり、1636年～1659年の

第3章 調査の成果

鑄造である。41は北宋の天禧通寶である。初鑄年は1017年である。42は角閃光石安山岩製の砥石である。本来の短辺を残していないが、破面となった短辺にも使用痕が残る。

区域3から遺物は出土していない。

区域4

遺物が出土した遺構は、S 30（第14・15図45・51・57・67）、S 34（第14・15図43・55・59・62）、S 35（第15図63）、S 39（第15図60）、S 40（第15図61）、S 41（第14・15図46～50、52～54・58・64・66）である。また、第14・15図44・56・65は表土中から採取した。

S 30(45・51・57・67)45は肥前磁器染付の端反碗である。体部の一部と底部が残る。時期は1820年～1860年代。51は肥前磁器白磁皿である。3/5が残る。口径12.9cm、器高3.7cm、底径6.8cmの大きさをもつ。時期は18世紀末～19世紀。57は珉平焼の緑釉鉢である。1/3個が残る。復元口径13.6cm、器高4.8cmの大きさをもつ。時期は19世紀前半。67は平瓦である。2/3が残る。長さ26.5cm。

S 34(43・55・59・62)43は景德鎮窯の磁器碗の破片である。時期は16世紀。55は肥前陶器碗である。2/3が残る。復元口径9.8cm、器高8cm、底径5.2cmの大きさをもつ。時期は16世紀末～17世紀前半。59は備前陶器の挿鉢の体部破片である。時期は16世紀。62は京都系土師器の破片である。復元口径は12.5cmである。時期は16世紀後半。

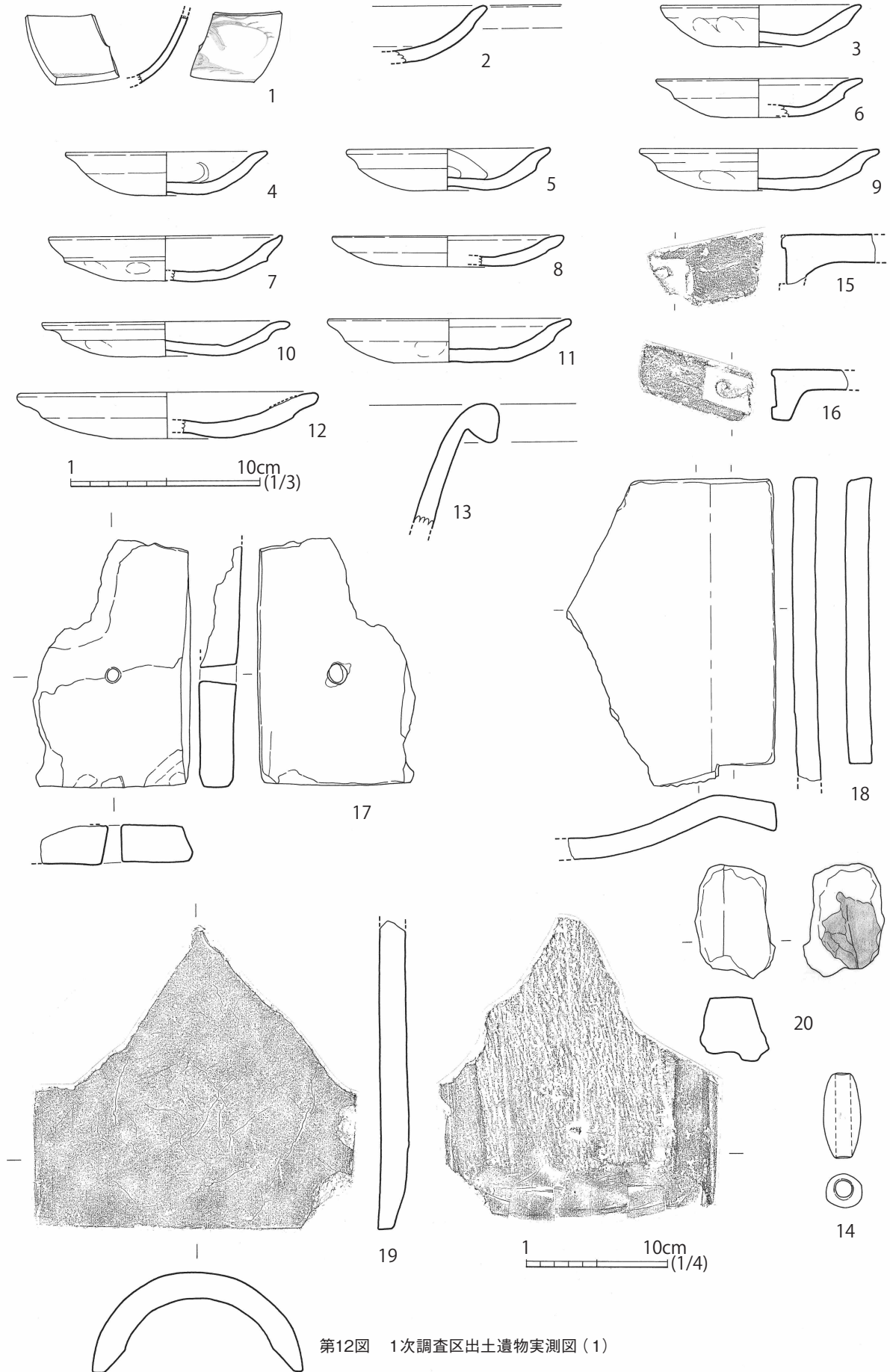
S 35 (63) 63は土師器皿の口縁部～底部の破片である。底部に回転糸切痕が残る。復元口径11cm、器高2.2cm、底径7.5cmの大きさをもつ。体部は底部から外反して立ち上るが浅い。

S 39 (60) 備前陶器挿鉢の口縁部破片である。

S 40 (61) 京都系土師器の口縁部～底部破片である。復元口径11.4cm、深さ2.5cmである。内面に煤が付着、灯明皿として使用されていたと考えられる。

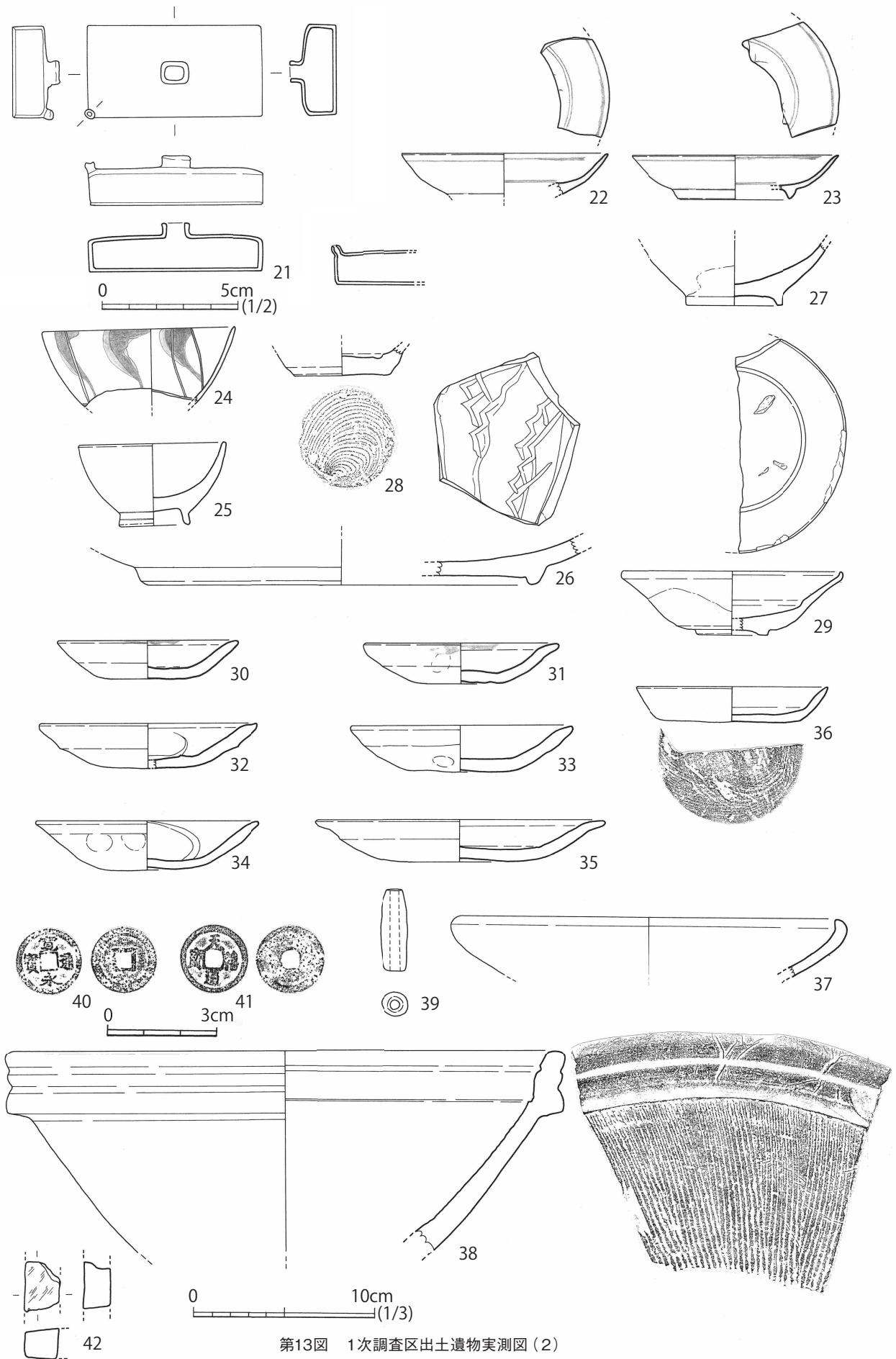
S 41 (46～50・52・53・54、第15図58・64・66) 46～50・52・53は肥前磁器である。46・47は染付である。46は体部3/4と底部が残る。口径7.5cm、3.5cm、2.7cmの大きさをもつ。時期は18世紀後半。47は1/2個体が残る。口径10cm、器高3.5cm、器高2.7cmの大きさをもつ。時期は18世紀後半～19世紀。48は猪口の破片である。口径7.4cm、器高5.3cm、底径5cmの大きさをもつ。時期は18世紀。49は皿である。体部1/6、底部1/2が残る。復元口径13.8cm、器高4.2cm、底径7.2cmの大きさをもつ。50は肥前青磁の蓋1/2個体である。口径10.3cm、器高3.7cm、底径4.2cmの大きさをもつ。時期は18世紀末。51～53は肥前磁器白磁である。51は皿で3/5が残る。口径12.9cm、器高3.7cm、底径6.8cmの大きさをもつ。時期は18世紀末～19世紀。52は鉢で体部1/6、底部1/3が残る。復元口径16.8cm、器高7cm、底径8.8cmの大きさをもつ。内面に菊花文が施されている。時期は17世紀末～18世紀前半。53は小皿である。1/3個体が残る。復元口径6.4cm、器高2.1cm、底径3cmの大きさをもつ。54は肥前陶器皿の底部付近の破片である。時期は1590年～1610年。58は堺産の陶器挿鉢の体部～口縁部破片である。64・66は軒丸瓦である。64は瓦当面の周縁1/4を欠く。珠文が14個配されている。巴文は左回りである。66は軒丸瓦の破片である。

表土中(44・56・65)44は景德鎮の青花皿の破片である。時期は16世紀後半。56は肥前陶器皿1/2個体である。復元口径13cm、器高3.5cm、底径4cmの大きさをもつ。時期は1600年代～1630年代。65は瓦当面がほぼ残っていた。珠文が16個配されている。巴文は左回りである。

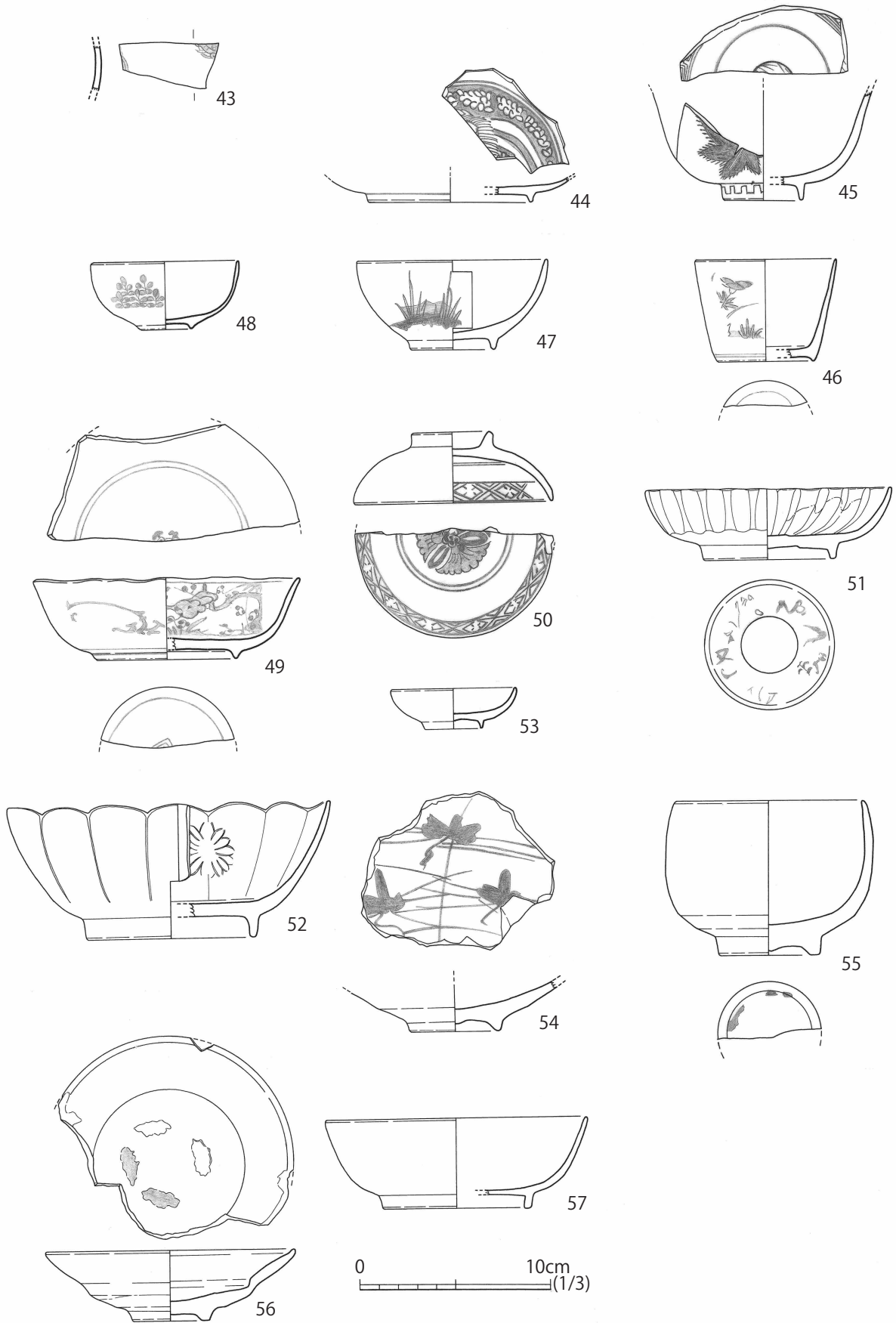


第12図 1次調査区出土遺物実測図(1)

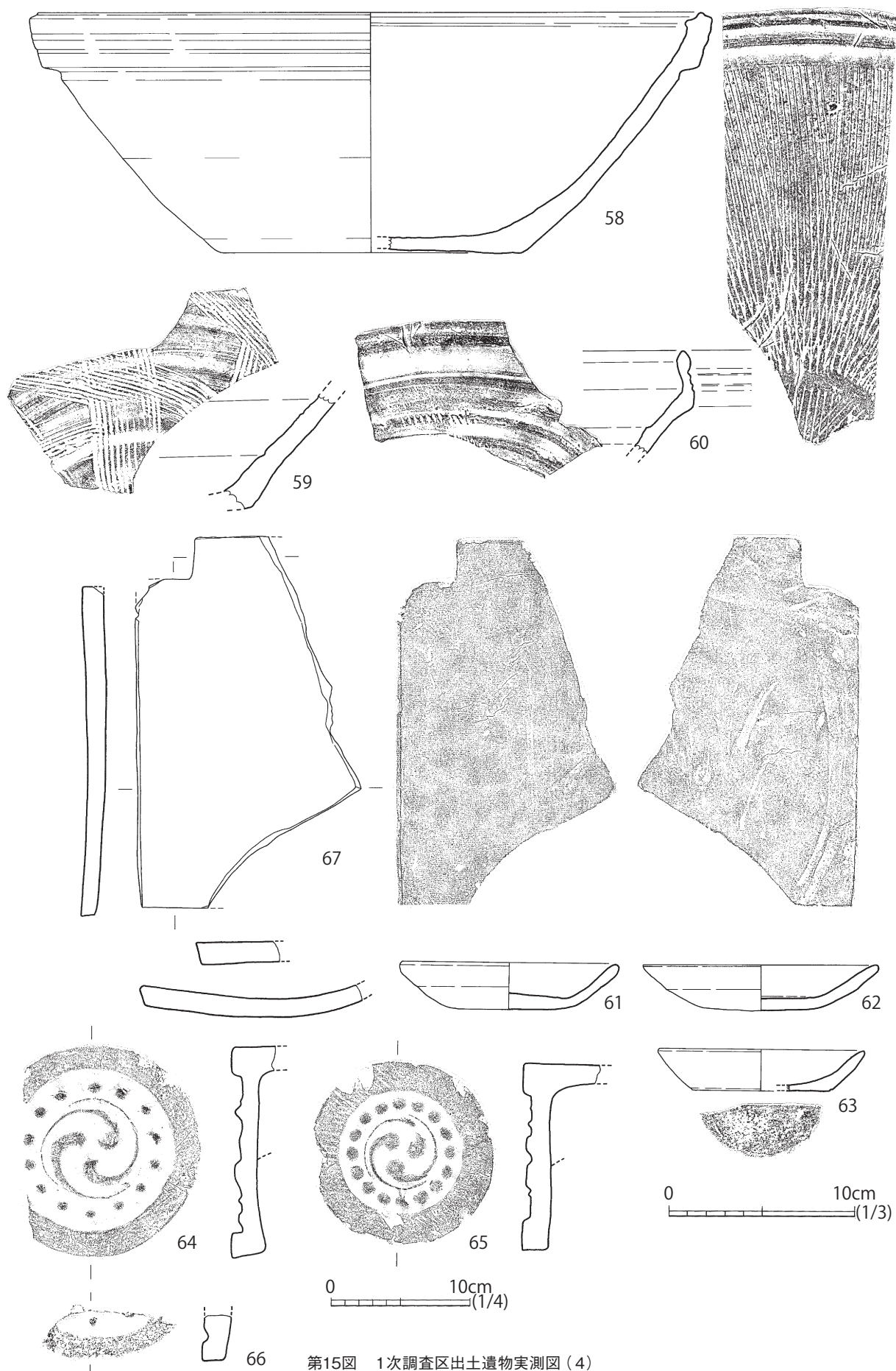
第3章 調査の成果



第13図 1次調査区出土遺物実測図(2)



第14図 1次調査区出土遺物実測図(3)



第15図 1次調査区出土遺物実測図(4)

第3節 2次調査

本調査区は区域1～3に区分し、さらに各区分をともに1、2と小区分した。全体面積は324㎡（区域1：103㎡、区域2：131㎡、区域3：90㎡）である。

区域1（第16・17図）

本調査区は区域1-1、2の2地区で調査を実施した。

区域1-1

本調査区の中では最も北に位置する。近世の整地面は残っておらず、地山・砂層面に土坑、溝、ピットなどを確認した。

基本層序は調査区西壁の2箇所を観察した。土層1（区域1南西壁A-A'）では現代の面から近現代、近世の堆積を経て地山の砂層面（5層）まで0.8m～1.1mの深さがあった。堆積していた土層は50層であった。土層2（区域1北西壁B-B'）では、地表下0.9mまで近現代の造成土の堆積が顕著であった。

このように、近代から現在に至る間の度重なる造成などで近世の生活面がほとんど掘削されていることを示していた。したがって、近世の武家屋敷を構成した建物や施設など痕跡はほとんど確認できず、わずかに地山に達する深さで掘られた土坑、溝、一部の整地層などが調査の対象となった。

遺構は土坑20基（S1～8・10・12～20）、溝2条（S9・11）であった。

土坑（S1～8・10・12～20）は円形をなし、規模は概ね0.6m～1.6m×0.4m～2.5m、深さ0.4m～0.5mであった。S5・6は径0.5mの円形を呈する小型の土坑であった。このうち、S4から京都系土師器皿3点、土師質皿1点が出土している。S7から京都系土師器皿3点、瓦質風炉が出土した。時期は16世紀後半～17世紀初頭であった。

溝（S9・11）S9は西壁際に向かってへ1mほど延びる幅0.4mほどの溝である。S11は南壁方向へ延びる幅約1mの溝であった。

区域1-2

この調査区は区域1-1の北側に位置する。現代の造成によって近世の整地面は残っておらず、地山に土坑、ピットなどを確認した程度であった。

基本層序は調査区西壁と南壁の2箇所を観察した。土層4（西壁D-D'）・5（南壁E-E'）ともに約1mの地山面まで掘下げを行なったが、現代の造成が著しく、近世の生活面を確認することは困難であった。

遺構は土坑5基（S1～3・6・7）、ピット2（S4・5）であった。

土坑（S1～3・6）は他の遺構と重複しており正確な規模を確認できないが、径1.4m程度の円形をなし、深さ0.5m前後の規模をもつ。ピット（S4・5）は径0.3m～0.4m、深さ0.45mであった。S7は攪乱と思われる。このうち、S2から1590年～1600年代に特定できる志野焼の碗が出土している。S4からは16世紀後半～17世紀初頭の糸切り土師器小皿（灯明皿）が出土した。

区域2（第18図）

本調査区では区域2-1、2の2地区で調査を実施したが、遺構は希薄であった。遺構は主に区域2-2に所在した。

区域2-1

この調査区は現代の造成が著しく、土層8・9（調査区東西壁D-D'、E-E'）で土層堆積を確認したが、約0.8mの地山面まで掘下げを行なったが遺構の存在を確認することはできなかった。

第3章 調査の成果

区域2-2

この調査区では基本層序は調査区東・西壁の2箇所を観察した。土層6・7（調査区東西壁）では地山の砂層面（7層）まで1mの深さがあつた。現代の造成によって著しく改変されていた。このように、近代から現在に至る間の度重なる造成などで近世の生活面がほとんど掘削されていることを示していた。遺構は土坑4基（S1～3）、ピット2（S4～6）とわずかであつた。

土坑（S1～3）は3基確認した。S1は一辺0.6mの方形をなし、深さ0.4m前後の規模をもつ。S2は1.5m×1.2m、深さ0.3m、S3は1.2m×1.1m、深さ0.6mの規模をもち、ともに不整形を呈す。ピット（S4・5）は径0.3m～0.6mの楕円形を呈し、深さ約0.3mの規模をもつ。

区域3（第19図）

2次調査の範囲内では最も南に位置する。調査区では区域3-1、2の2地区に分け調査を実施した。

区域3-1

この調査区の基本層序は土層10・11・13で確認した。土層10（西壁G-G'）では、1層：表土、2層：黄褐色土層（盛土）、3層：黄褐色土・焼土等（盛土）、4層：混炭・焼土暗褐色土層、5層：混砂・礫暗茶褐色土層、6層：淡茶褐色砂層の層序であつた。1・2層は現代、3・4・5層は近現代の造成と思われる。6層は地山で、表土下1.1mの深さである。

土層11・13（F-F'、I-I'）でもほぼ同様の土層堆積状態であつた。

遺構は土坑11基（S1～10・13）、ピット4（11・12・14・15）であつた。

S1は1.1m×0.9mの不整形を呈し、深さは0.1m程度である。S9の南辺を切っていた。S2・6・7・8は相互に切り合っており、土層の観察からみた構築順序は、S8→S7→S6であつた。土坑は径1m～1.5mの円形を基調とし、深さ約0.5mの規模であつた。

S8は1.8m×1.5m、深さ1.1mのやや大型の円形土坑であつた。土坑内から志野焼沓茶碗、唐津陶器碗、中国産壺などが出土した。遺構の時期は16世紀末～17世紀初頭に限定できる可能性がある。

S3はS7を切っており、長径0.8m、短径0.55mの長方形で、深さ0.3mの規模であつた。

S4は径1.3m～1.4mの不整形円形をなし、深さ0.3mの規模であつた。S5は南壁際に位置し、径1.5m程度の円形プランを呈し、深さ0.5mほどの規模であつた。S9はS1に南辺を切られているが、長径約1.2m、短径1mの円形を呈し、深さ0.2mで規模であつた。S10は径1.7mの円形を呈し、深さ0.2mの規模であつた。S13は北壁際に位置する。径1mの円形で深さ0.6mの規模であつた。安全面を考慮し、土坑の南半分を調査対象とした。

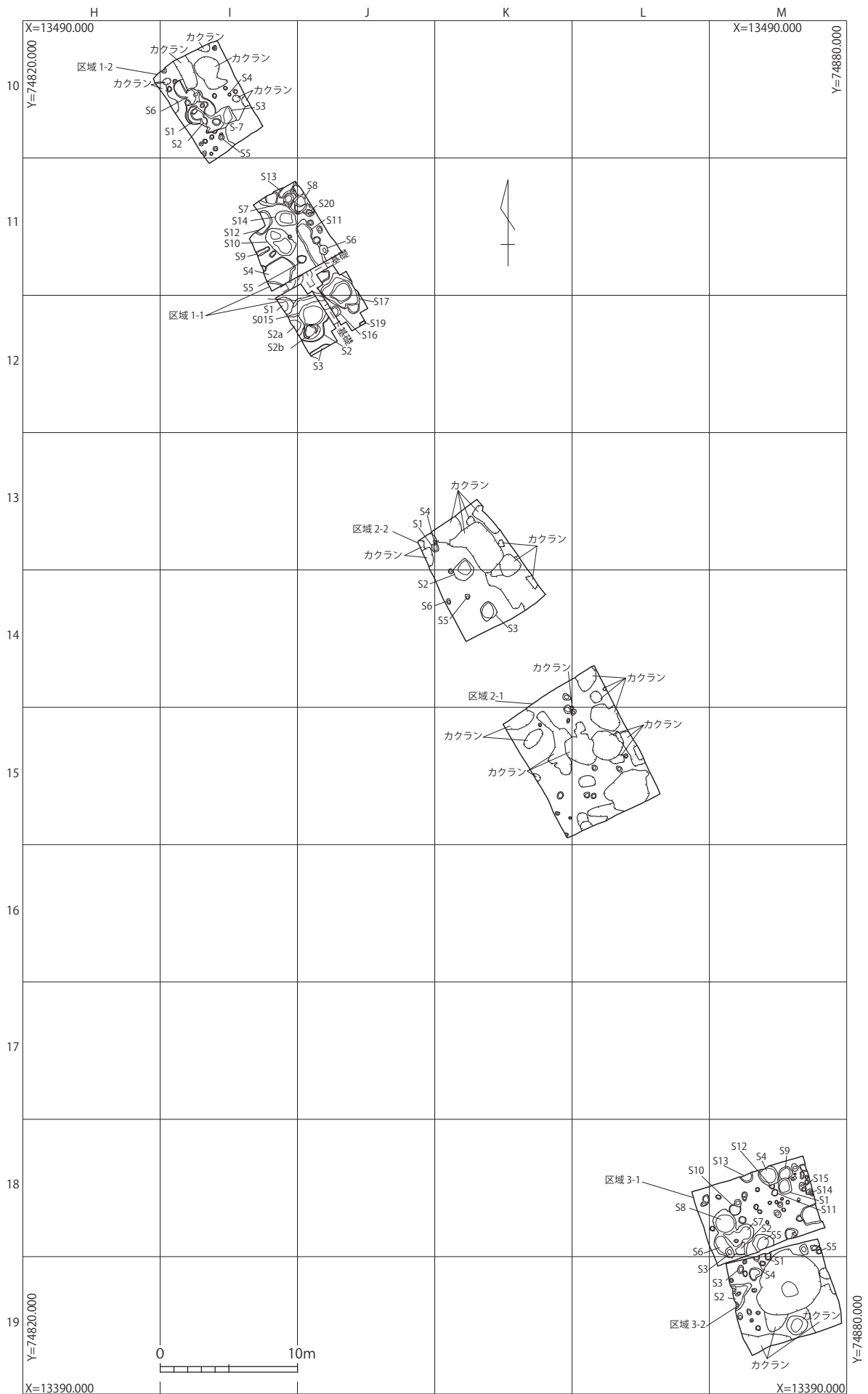
ピットはS11が径0.4m～0.5mの楕円形を呈し、深さ0.3mの規模であつた。S12はS4に北辺を切られているが短径0.4mの楕円形を呈すると思われた。深さ0.4mであつた。S14は複数のピットが重なった形状を呈していた。深さは0.3m程度であつた。S15は径0.35mの円形を呈し、深さ0.4mの規模をもつ。ピットは建物の柱穴となるような有意な配置は確認できなかった。

区域3-2

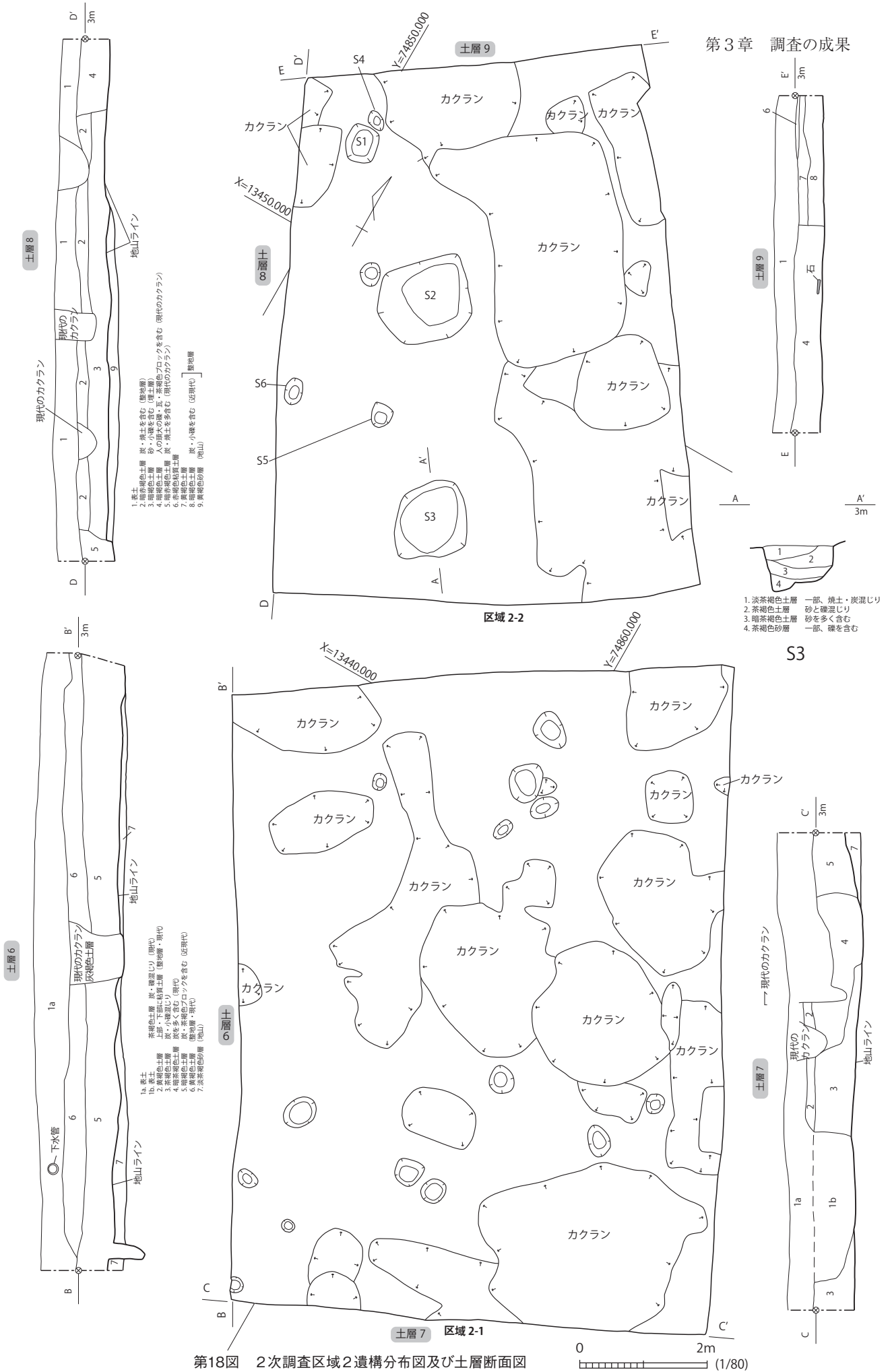
この調査区の基本層序は土層12（西壁H-H'）でみると、地表下0.8mに至るまで現在の攪乱が及んでいた。また、中央部に近現代の井戸掘形が径4.5mで掘られており、東南隅3m×2mの範囲に攪乱がみられるなど、調査区内の遺構の残存状態はよくないことが想定された。

遺構は土坑1基（S2）、ピット4（S1・3・4・5）であつた。

S2は西壁際に1.85m×1.4mの不整形を呈して残っていた。深さは0.1m程度であつた。ピットは径0.3m～0.6mの楕円形を呈する。深さは0.1m～0.5mであつた。



第16図 2次調査区全体図



第18図 2次調査区域2遺構分布図及び土層断面図

出土遺物（第20図～第27図）

図示した遺物は、68～150が区域1、151～170は区域2、171～216は区域3から出土したものである。

区域1-1

遺物が出土した遺構は、S1（第20図68）、S2（第20図69～72）、S3（第20図73）、S4（第20図74～79）、S5（第20図80・81）、S7（第20・21図82～90）、S9（第21図91・92）、S10（第21図93・94）、S12（第21図95）、S15（第21図96～103）、S16（第21図104・105）、S17（第21・22図106～112）である。また、第22・23図113～134は遺構検出などの作業中に表土中から採取した。

S1（68）唐津系陶器の鉢である。口縁部を欠く。内面に胎土目が6カ所に残る。18世紀前半。

S2（69～72）69は伊万里磁器の染付皿である。口縁部1/2が残る。17世紀後半。70・71は共に唐津系陶器で体部中位の破片である。17世紀後半～18世紀前半。72は京都系土師器皿である。体部から口縁部の器壁は厚い。16世紀後半～17世紀初頭。

S3（73）備前播鉢の底部付近破片である。

S4（74～79）74は唐津陶器鉢の口縁部付近の破片である。口縁部は外へ強く屈曲する。75は中国産陶器の底部破片であるが、器種は不詳。76～78は京都系土師器皿である。共に体部～口縁部の破片である。器壁は厚い。79は土師質土器の皿である。器壁は薄い。

S5（80・81）80は有溝土錘である。81はほぼ完形の鉄釘で断面方形を示す。

S7（82・83、第21図90）出土陶磁器・土器類はほぼ同時期である。82は景德鎮青花碗（饅頭心E群）の破片である。16世紀後半。83は唐津系陶器皿である。1590年～1610年。84は朝鮮王朝産の舟徳利である。16世紀後半。85～88は京都系土師器皿である。88は糸切り土師器皿である。89は瓦質の風炉である。ともに16世紀後半～17世紀初頭。90は丸瓦の破片である。

S9（91・92）91は京都系土師器皿である。16世紀後半。92は糸切り土師器である。時期は不明。

S10（93・94）93・94は景德鎮窯である。93は青花皿（E群青花皿）、94は染付碗（饅頭心）である。16世紀後半。

S12（95）は中国産の青磁碗の破片である。

S15（96～103）すべては土師質土器である。96は鉢、97は糸切り底の皿、98は煤が付着、灯明皿と思われる。99は焼き塩壺の蓋である。いずれも時期は不明。

100は土垂の1/2個体である。101～103は釘である。101は銅製、他は鉄製である。

S16（104～105）ともに瓦質土器である。104は壺の可能性があり、105は風炉である。

S17（106～110、第22図111）ともに瓦質土器である。104は壺の可能性があり、105は風炉である。106は景德鎮染付碗、107は中国産と考えられる白磁碗である。108は京都系土師器皿である。16世紀後半～17世紀初頭。109は土師器皿である。110・111は陶器播鉢である。110は備前産で16世紀後半～17世紀初頭。112は鉄釘で、全長5.1cmである。

表土中（113～140、144～146）113～129は京都系土師器皿である。口径で見ると、122・124が10.5cm～11.5cm、123は12cm～13cmの2区分できる。122・124は内面、128は内外面に煤が付着している。ともに16世紀後半～17世紀初頭。130・131は糸切り土師器皿である。132は土師質焼き塩壺蓋でない画面に煤が付着。17世紀。133・135・136・138・146は陶器播鉢である。133・136・146は備前、135・138は肥前系である。138は18世紀～19世紀、他は17世紀～18世紀。139・140は瓦質土器のコンロである。19世紀。134は銅銭で「洪武通寶」の銘をもつ。

区域1-2

S2（第23図141・142）は志野焼の碗である。1590年～1600年。

S3（第23図150）断面が方形の鉄釘である。

S4（第23図143）糸切り土師器皿（灯明皿）である。16世紀後半～17世紀初頭。

第3章 調査の成果

表土中（第23図144・145・147・148）144は朝鮮王朝産の陶器舟徳利である。16世紀後半。146・147は備前陶器の挿鉢である。16世紀末（近世1期）。148は唐津焼の陶器皿である。胎土目が4カ所確認できる。1590年～1610年。149は鉄釘である。

区域2-1

出土遺物（第24図151～154）は遺構検出時に採取したものである。151は陶器壺である。17世紀末～18世紀。152は唐津系陶器の小杯である。1590年～1610年。153は糸切り土師器皿である。154は備前陶器挿鉢の口縁部破片である。交叉摺目をもつ。16世紀末（近世1期）。

区域2-2

遺物が出土した遺構は、S3（第24図155）、S4（第24図156・157）、S6（第24図158）である。また、159～170は遺構検出などの作業中に表土中から採取した。

S3（第24図155）白磁皿であるが、産地は肥前と想定される。内外面に砂目、ウルシ継痕を確認できる。1600年～1630年代。

S4（156・157）中国白磁の皿である。16世紀。157は咸平元寶である。北宋銭で、初鑄年は998年。

S6（158）土師質の土錘であるが一端を欠く。

表土中（159～166、第35図167～170）159は青磁鉢である。産地・時期は明確でない。160肥前陶胎染付碗の口縁部～体部の破片である。18世紀前半。161は織部焼の香合である。破片ではあるが、時期も明確な希少な例として重要な資料と言える。1610年～1620年。162は肥前磁器の水滴の破片である。18世紀～19世紀。163は備前陶器瓶の下半部である。17世紀～18世紀。164～167は肥前陶器である。164は鉢の底部破片である。167は口縁部～体部上位が残る。ともに17世紀末～18世紀前半。165は鉢の体部中位の破片である。17世紀後半～18世紀。166は挿鉢口縁部～体部下端の破片である。口縁部は端部で外に反る。18世紀～19世紀。168は瓦質土器の火鉢である。豊後産と考えられる。16世紀後半。169は京都系土師器皿である。器壁は全体に厚い。内外面に煤が付着している。16世紀後半～17世紀初頭。170は寛永通宝である。

区域3-1

遺物が出土した遺構は、S1（第26図172）、S2（第26図173・174）、S3（第26図175）、S5（第26図176・177）、S6（第26図178・179）、S7（第26図180～183）、S8（第26・27図184～193）、S9（第27図195）、S10（第27図196・197）、S12（第27図198）S13（第27図194）である。また、199～202は遺構検出などの作業中に表土中から採取した。

S1（172）糸切り土師器皿である。在地産であるが時期は不明。

S2（173・174）173は青磁皿の口縁部付近の破片である。15世紀。174は京都系土師器皿である。16世紀後半～17世紀初頭。

S3（175）京都系土師器皿である。16世紀後半～17世紀初頭。

S5（176・177）176は唐津焼沓茶碗で、鉄絵を施す。1590年～1610年代。177は志野焼の鉢の体部破片である。1590年～1600年代。

S6（178・179）178は織部焼鉢の1/3個体である。1610年代。179は唐津系陶器皿である。1590年～1610年代。

S7（180～183）180は景德鎮窯の青花皿（青花皿B）の口縁部付近破片である。15世紀後半～16世紀前半。181・182はともに朝鮮王朝産陶器碗で口縁部～体部と底部付近の破片であり同一個体の可能性も考えられる。16世紀後半～17世紀初頭。183は鉄釘で横断面は方形を呈す。

S8（184～186、第27図187）184は志野焼沓茶碗の優品である。1590年～1610年代。185～189は唐津焼である。185は陶器碗で鉄絵をもつ。186・188は天目形である。時期は184・187・189が1590年～1610年代、

188は17世紀。190は中国産の陶器壺である。17世紀。191は糸切り土師器皿である。192は赤間石の砥石である。一部欠失する。193は大型の鉄釘である。

S 9 (195) とりべの1/3個体である。

S 10 (196・197) 196は瓦質土器の火鉢の破片である。197は燭台である。

S 12 (198) 土師質土器の皿の破片である。

S 13 (194) 鉄釘である。

表土中(171、第27図199～202) 171は唐津系陶器皿の底部破片である。S 1・2の至近地で出土した。1590年～1610年代。199は龍泉窯青磁である。13世紀。200は土師質の土垂で、一端を欠く。201肥前系染付筒形碗である。18世紀末～19世紀前半。202は肥前系磁器碗である。

区域3-2(第27図)

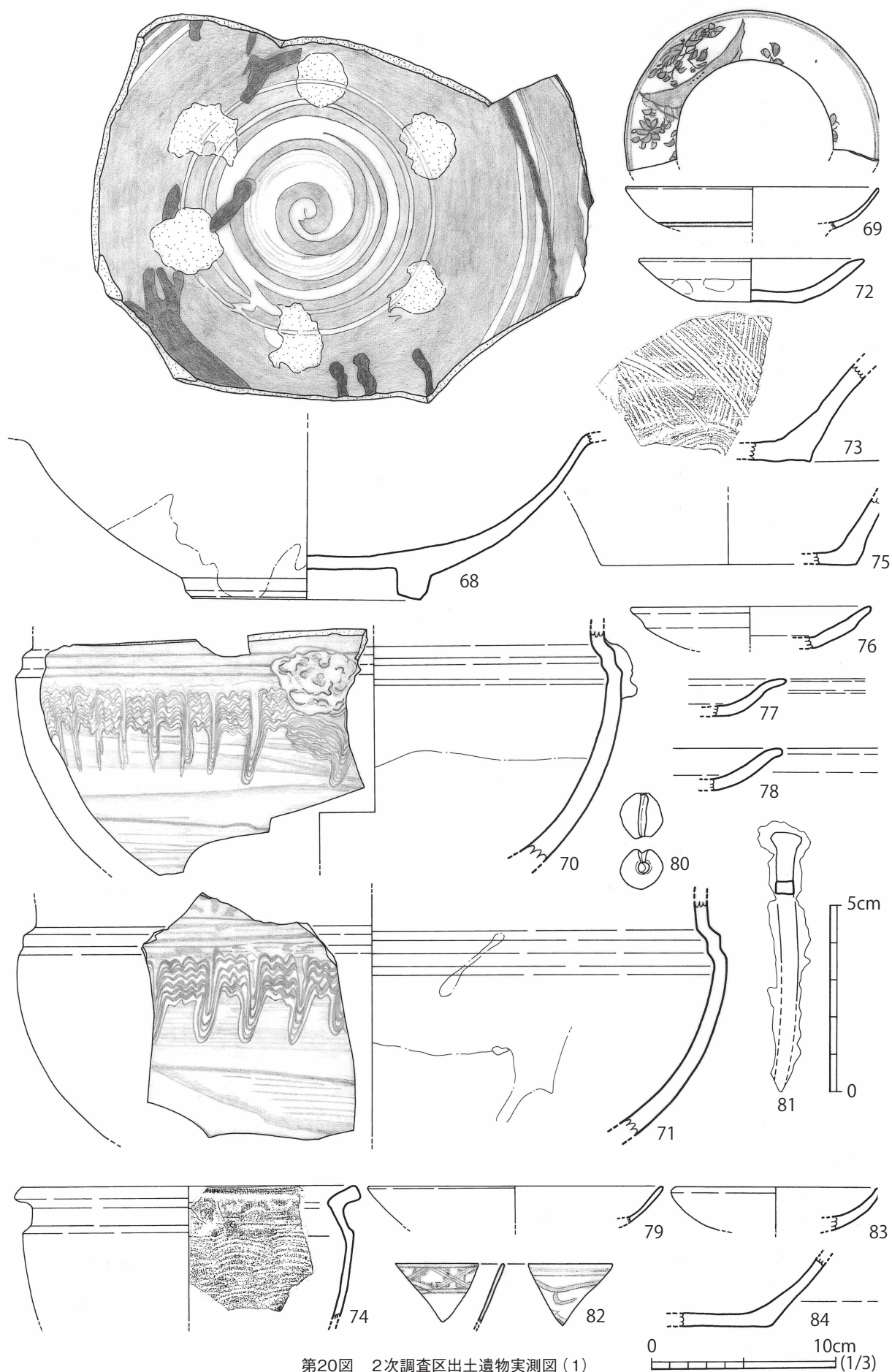
遺物が出土した遺構は、S 1 (203)、S 3 (204)、S 4 (205)である。また、206～215は遺構検出などの作業中に表土中から採取した。

S 1 (203) 糸切り土師器小皿の底部破片である。

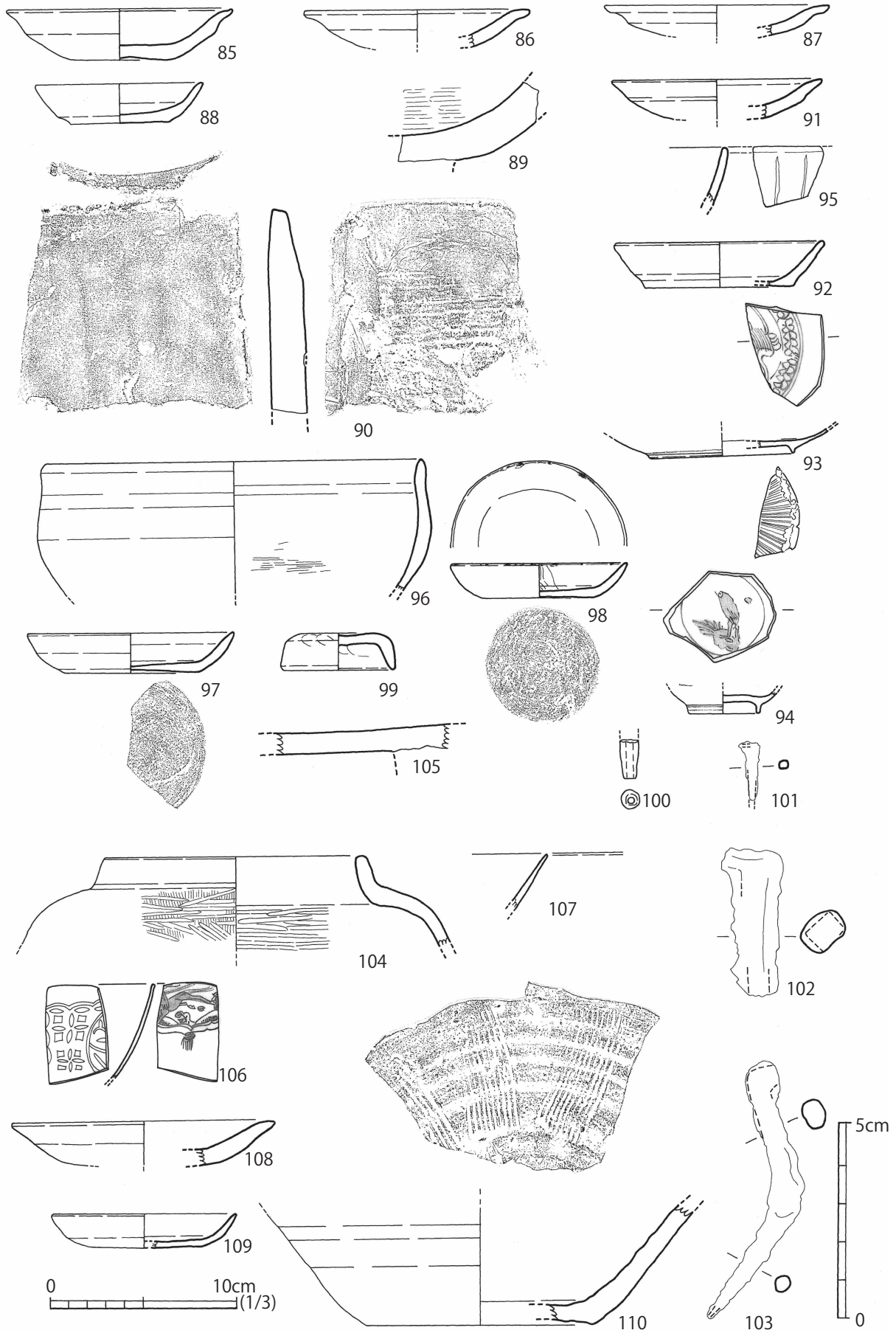
S 3 (204) 中国産青花碗の口縁部～体部破片である。

S 4 (205) 中国産青花碗の口縁部～体部破片である。

表土中(206～210、第28図211～215) 206は中国産青花碗である。207は肥前青磁香炉である。18世紀。208・209は京都系土師器皿である。器壁が厚い。ともに16世紀後半～17世紀初頭。210は白磁皿である。211は関西系陶器の土瓶蓋である。18世紀後半～19世紀。212・213は関西系陶器の土鍋である。212は蓋である。ともに18世紀～19世紀。214はコンロの破片である。215は丸山焼(白杵産)で瓦質のコンロである。19世紀。

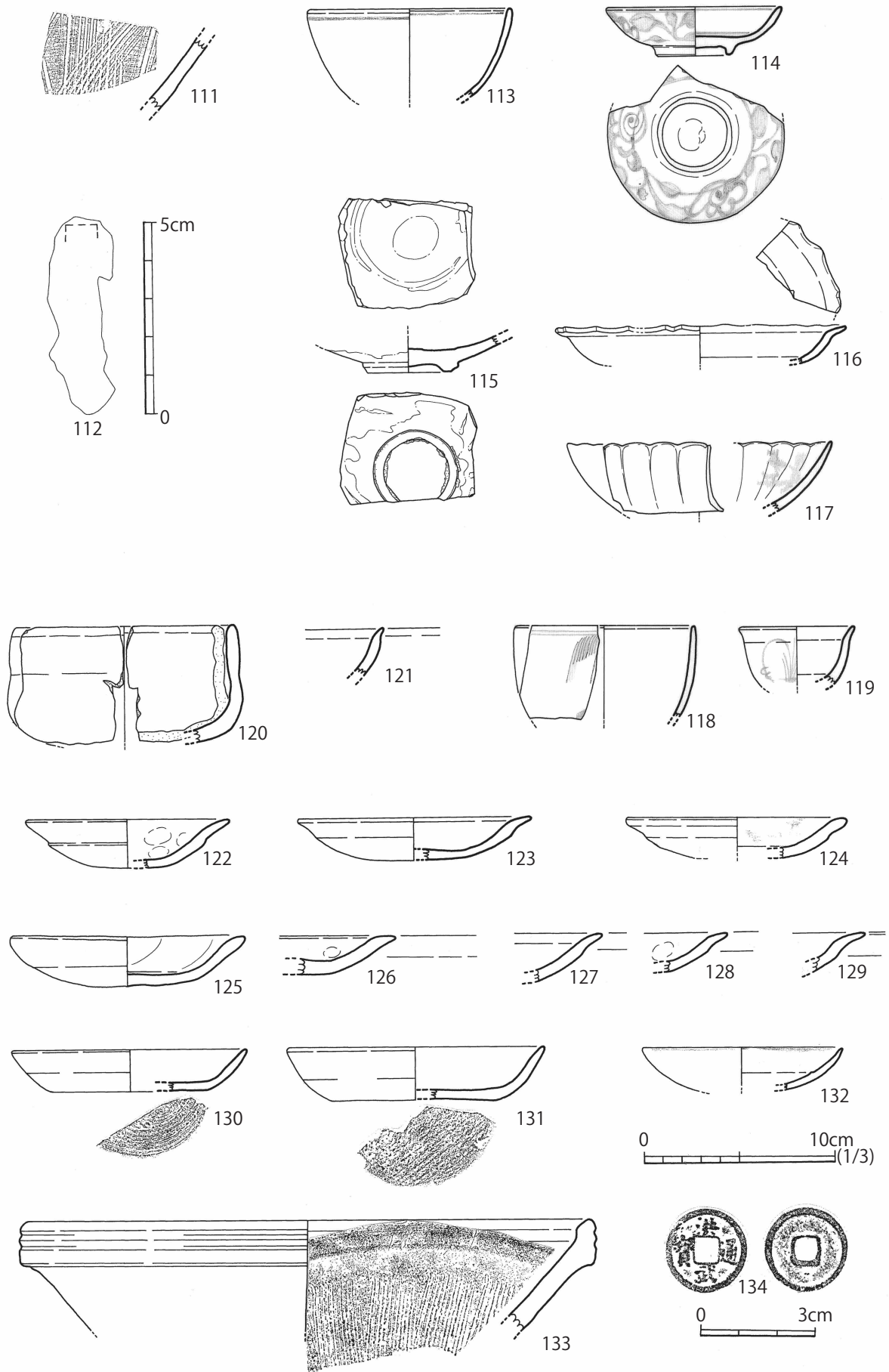


第20図 2次調査区出土遺物実測図(1)

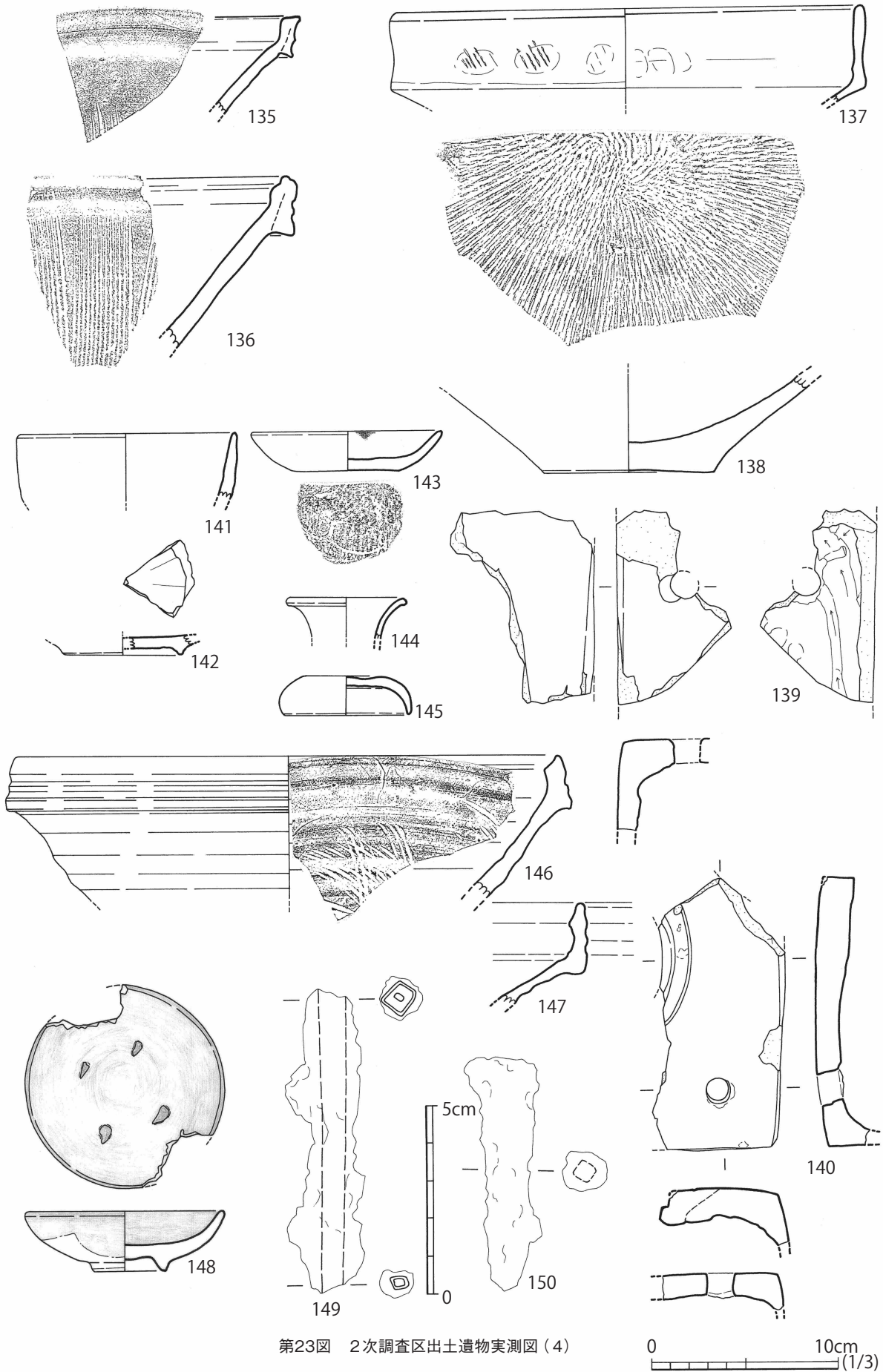


第21図 2次調査区出土遺物実測図(2)

第3章 調査の成果

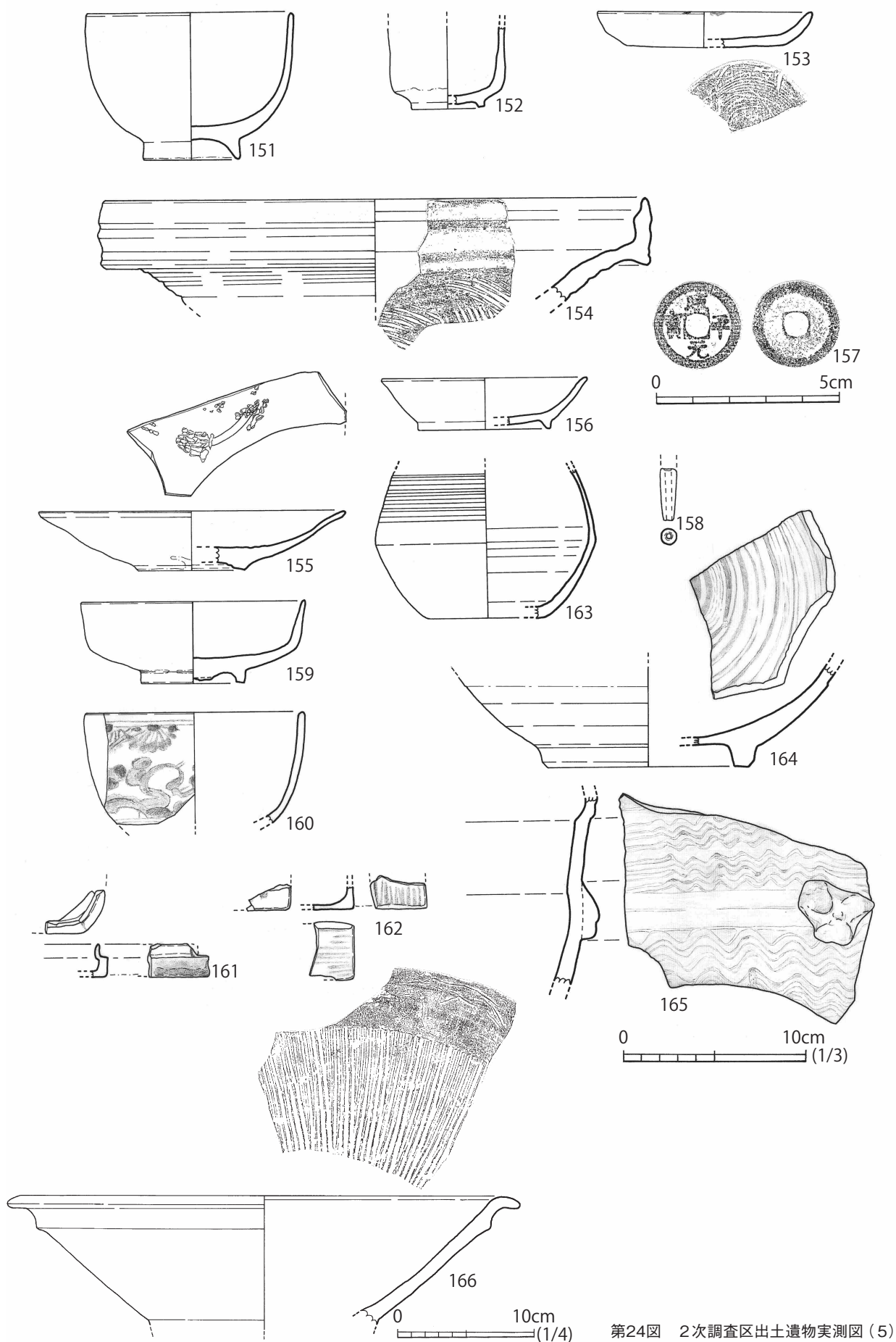


第22図 2次調査区出土遺物実測図(3)

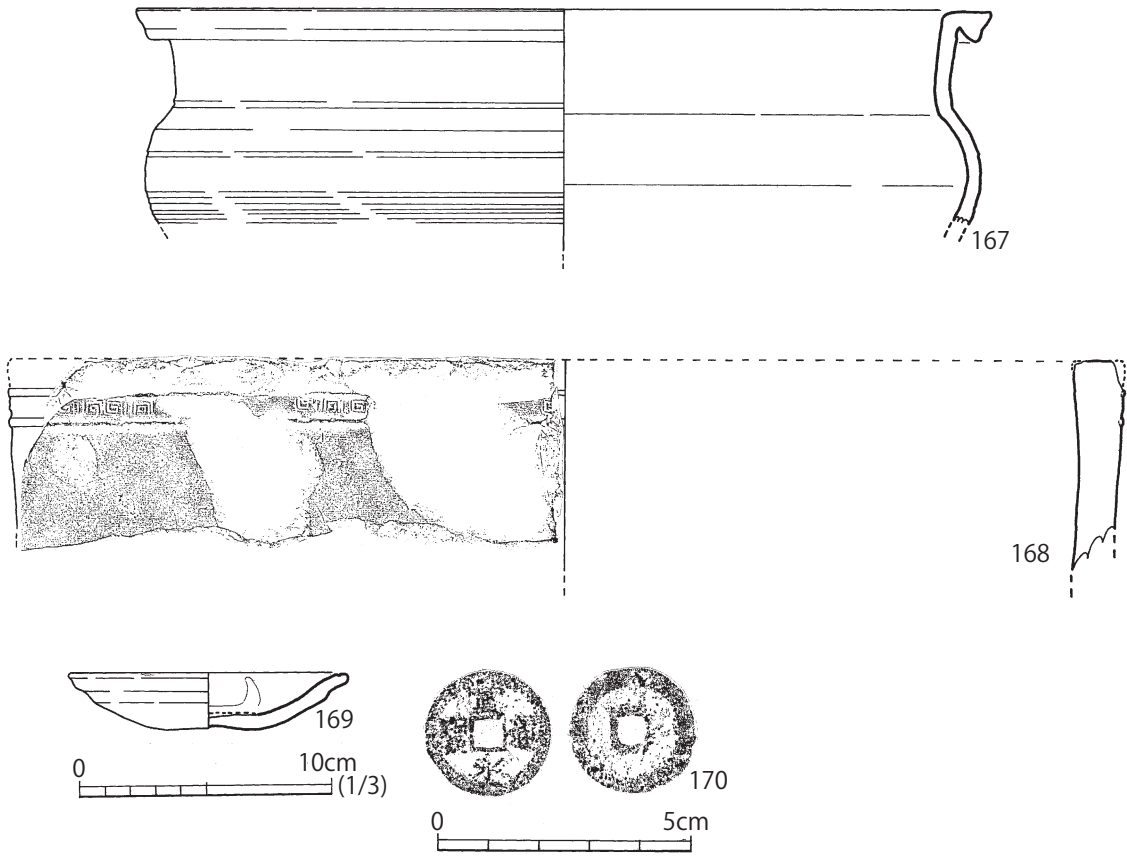


第23図 2次調査区出土遺物実測図(4)

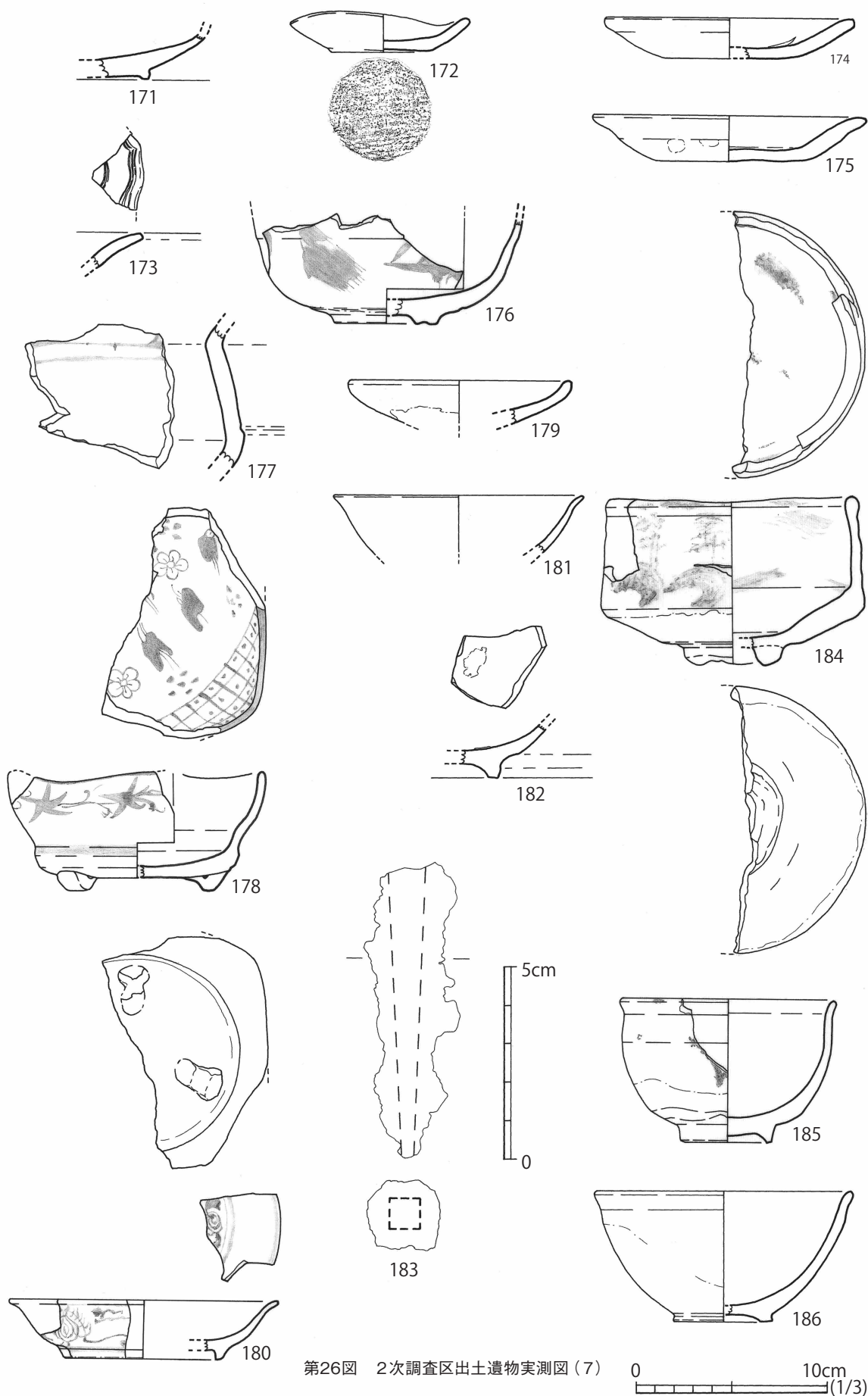
0 10cm (1/3)



第24図 2次調査区出土遺物実測図(5)

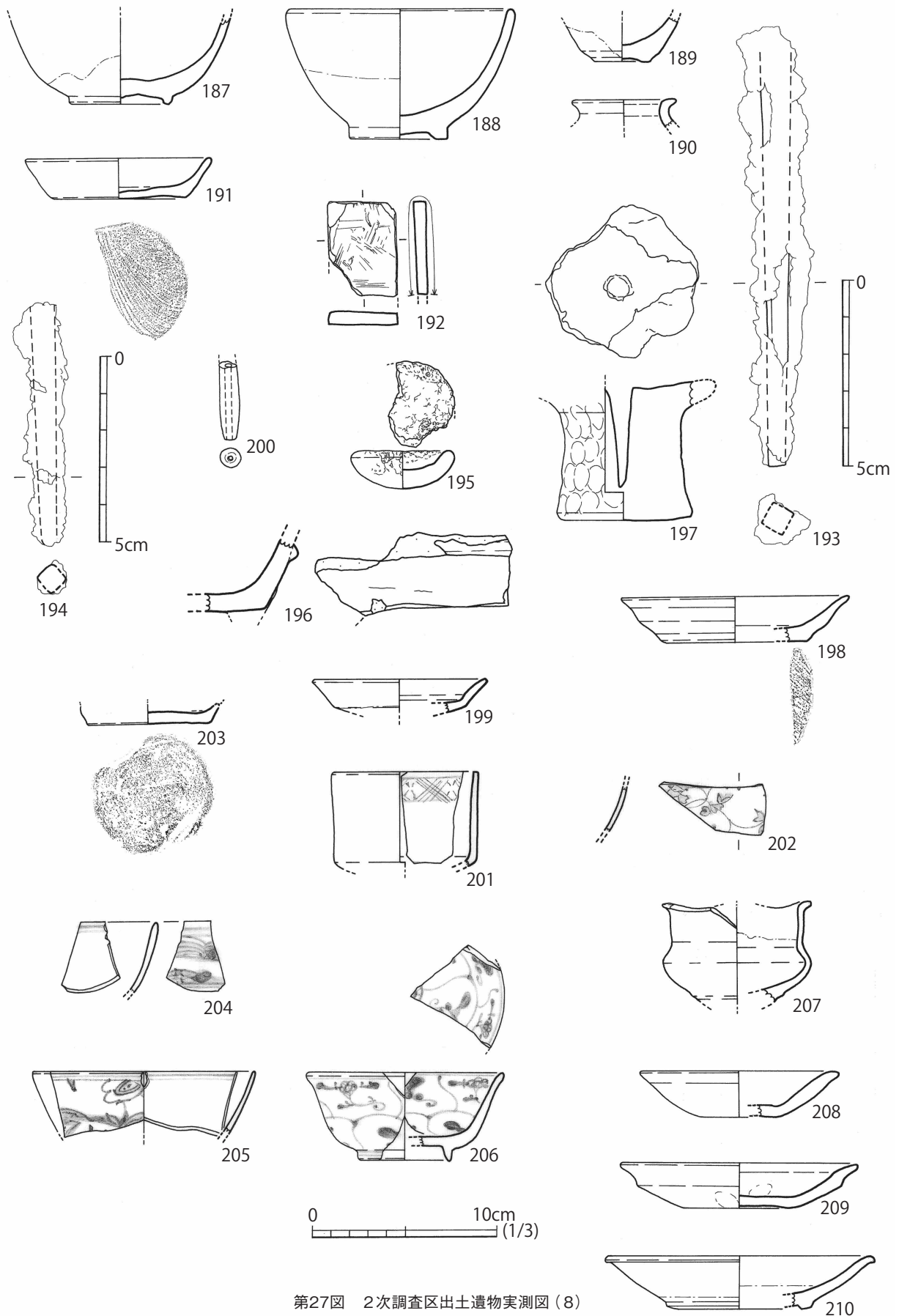


第25図 2次調査区出土遺物実測図(6)

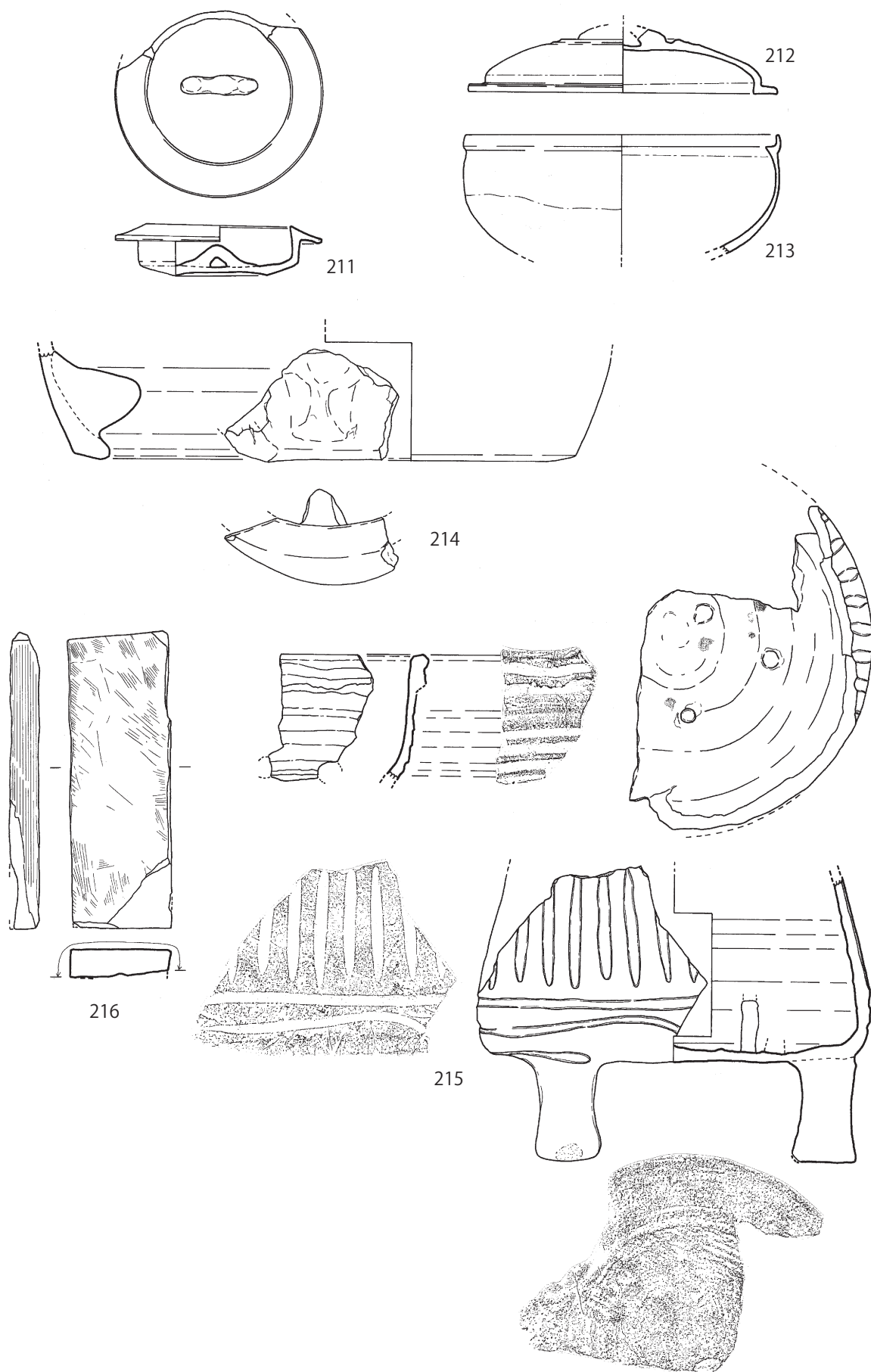


第26図 2次調査区出土遺物実測図(7)

0 10cm (1/3)



第27図 2次調査区出土遺物実測図(8)



第28図 2次調査区出土遺物実測図(9)

0 10cm (1/3)

第4節 3次調査

本調査区は区域1・2の2区分した。全体面積は226.8㎡（区域1：155.1㎡、区域2：111.7㎡）である。

区域1（第29～31図）

本調査区は近世の整地面は残っておらず、地山に達する攪乱が多くみられた。遺構は地山面に土坑、ピットなどを確認した。

基本層序は調査区北・東壁の2箇所を観察した。土層1（北壁D-D'）では現代の面から地山の砂層面まで1.1m～1.5mの深さがあった。しかし、地山まで近現代の造成・掘削を受けていた。土層2（東壁C-C'）では0.6mで地山に達する箇所もあったが、近現代の掘削と埋土が顕著であり、南半部はコンクリート基礎などが広い範囲で残っていた。このように、近代から現在に至る間の度重なる造成などで近世の生活面がほとんど掘削されていることを示していた。したがって、近世の武家屋敷を構成した建物や施設など痕跡はほとんど確認できず、わずかに地山に達する深さで掘られたために遺存した土坑、ピットなどが調査の対象となった。

遺構は土坑10基（S1・2・4～11）、ピット1（S3）であった。

土坑（S1・2・4～11）S1は調査区の北壁東端に所在する円形土坑の一部であった。形状は東西方向に長い楕円形を呈し、北壁は調査区外に位置した。規模は長さ2.1m、推定幅1.6m以上、深さ0.24mであった。覆土中から京都系土師器皿、備前焼播鉢、瓦質土器が出土した。S2は楕円形を呈す。0.75m×0.5m、深さ0.25mの規模をもっていた。覆土中から白磁や京都系土師器皿が出土した。S4は長楕円形で、1m×0.45m、深さ0.25m程度であった。S5は隅丸方形で0.85m×0.7m、深さ0.1mである。唐津焼鉄絵鉢の破片が出土した。S6は2基の円形土坑が連結した形状を呈し、長さ1.3m、幅0.5m～0.7m、深さ0.1m程度であった。S7は調査区西辺に位置し西側は調査区外であった。長さ1.3m、幅1m以上、深さ0.25mであった。関西系土師器灯明皿、景德鎮合子・青花皿の破片が出土した。S8は楕円形を呈し、長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.3mである。S9は北辺東部に位置した。長楕円形を呈し、長さ1.7m程度、幅0.65m、深さ0.1mであった。S10は不整形円形を呈し、径長さ0.65m、深さ0.1mであった。S11は方形を呈し、長さ0.7m～0.75m、深さ0.1mであった。

ピット（S3）は径0.27mの円形で、深さ0.15m程度であった。

区域2（第32・33図）

区域2はさらに南北の2区に区分した（1・2）。

本調査区は区域1と同様に近世の整地面は残っておらず、地山に達する攪乱が多くみられた。遺構は地山面に土坑、ピットなどを確認した。

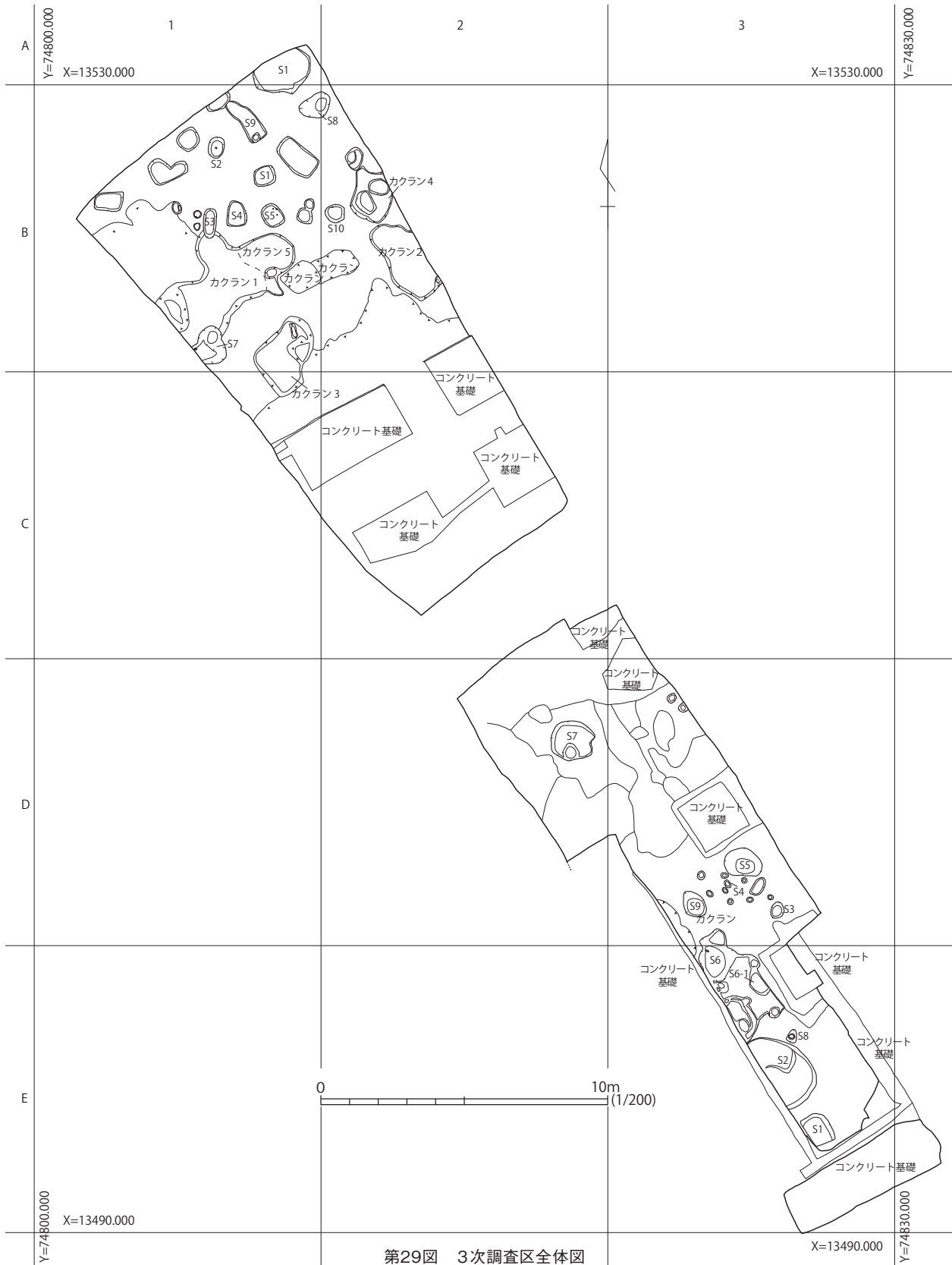
基本層序は調査区東壁（土層3E-E'）で観察した。現代の面から1mの深さまで掘下げと精査を行なった。一部近世と想定される砂層（10層）を確認したが、大半が近現代の造成・掘削を受けていた。またコンクリート基礎などが広い範囲に残っていた。このように、近代から現在に至る間の度重なる造成などで近世の生活面がほとんど掘削されていることを示していた。したがって、近世の武家屋敷を構成した建物や施設など痕跡はほとんど確認できず、わずかに地山に達する深さで掘られたために遺存した土坑、ピットなどが調査の対象となった。遺構は土坑5基（S1・2・6・7・9）、ピット4（S3～5・8）であった。

土坑5基（S1・2・6・7・9）S1は調査区の南西隅に確認した。したがって南・西壁は調査区外となったため、土坑の北東付近の調査となった。確認した規模は南北方向1.1m、東西方向0.8m、深さ0.2mであった。土坑南西部の底面付近から男瓦の完形品2点が礫とともに出土した。S2は西壁際に確認した。土坑の西半部は調査区外となった。土坑は南北2基が重複しており、南の土坑が新しい。確認した規模は南北方向2.75m、東西方向1.45m、深さは南の土坑が0.15m、北の土坑が0.4mであった。南の土坑底面から唐津焼の皿が出土した。製作年代は1590年～1610年と考えられた。S6は複数の土坑が連結した形状を示していた。長さ1.8m程度、幅1.2m、深さ0.4mであった。覆土から京都系土師器皿、土師器耳皿、燭台、瓦質風炉などが出土した。16世

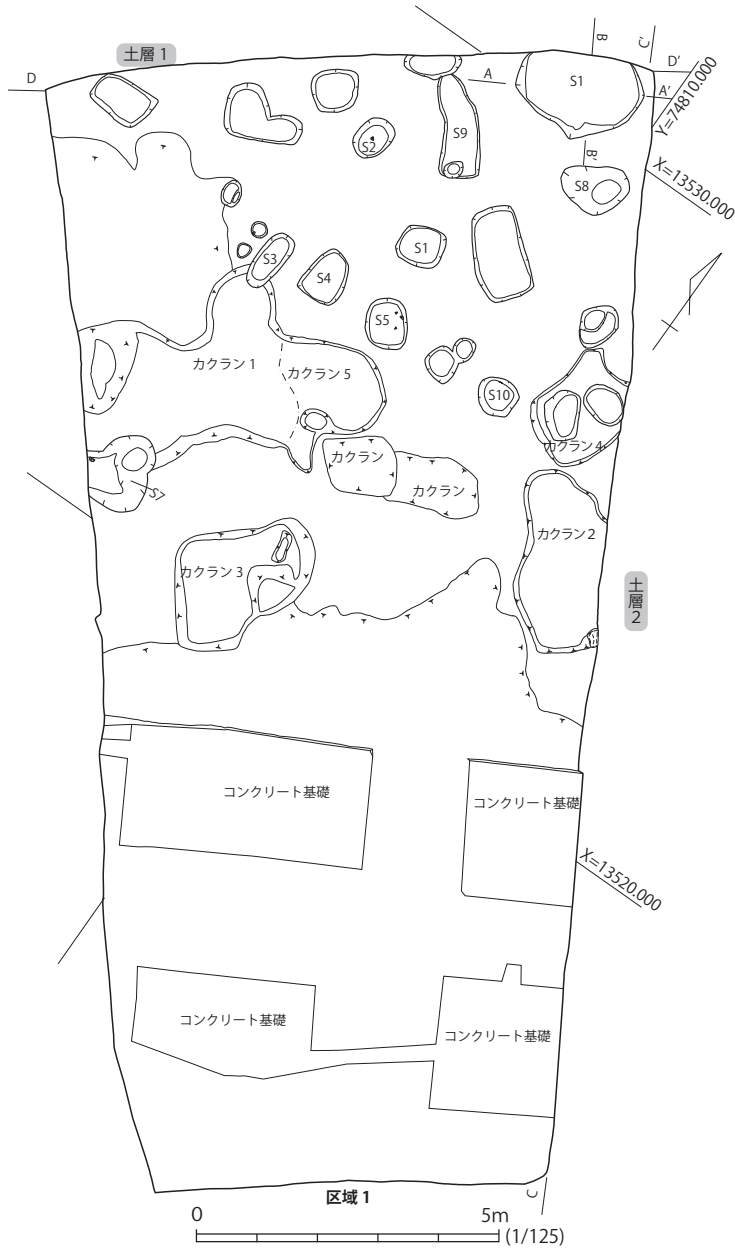
第3章 調査の成果

紀後半～17世紀初頭の時期と考えられた。S7は不整形円形を呈し、長径1.6m、短径1.35m、深さ0.3mであった。S9は不整形円形を呈し、長径1.05m、短径0.75m、深さ0.5mであった。

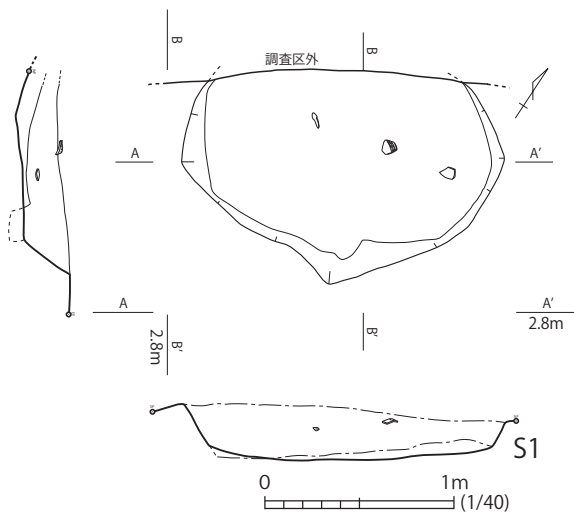
ピット4 (S3～5・8) S3は円形を呈し、長径0.6m、短径0.45m、深さ0.5mであった。覆土から景德鎮青花皿が出土した。S4・5楕円形を呈し、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.15m～0.45mほどであった。S8は円形を呈し、長径0.45m、短径0.35m、深さ0.2mほどであった。



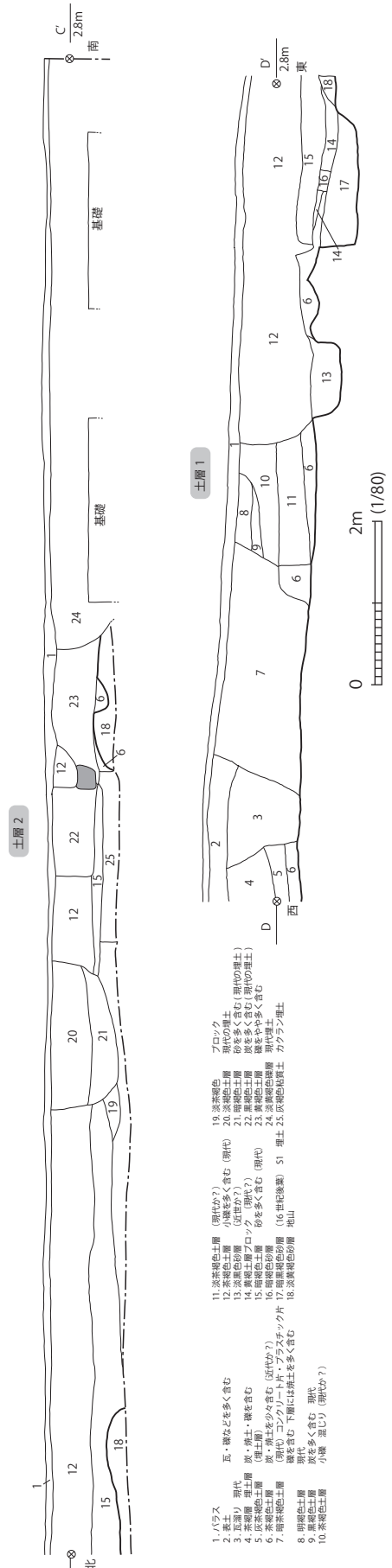
第29図 3次調査区全体図



第30図 3次調査区域1遺構分布図

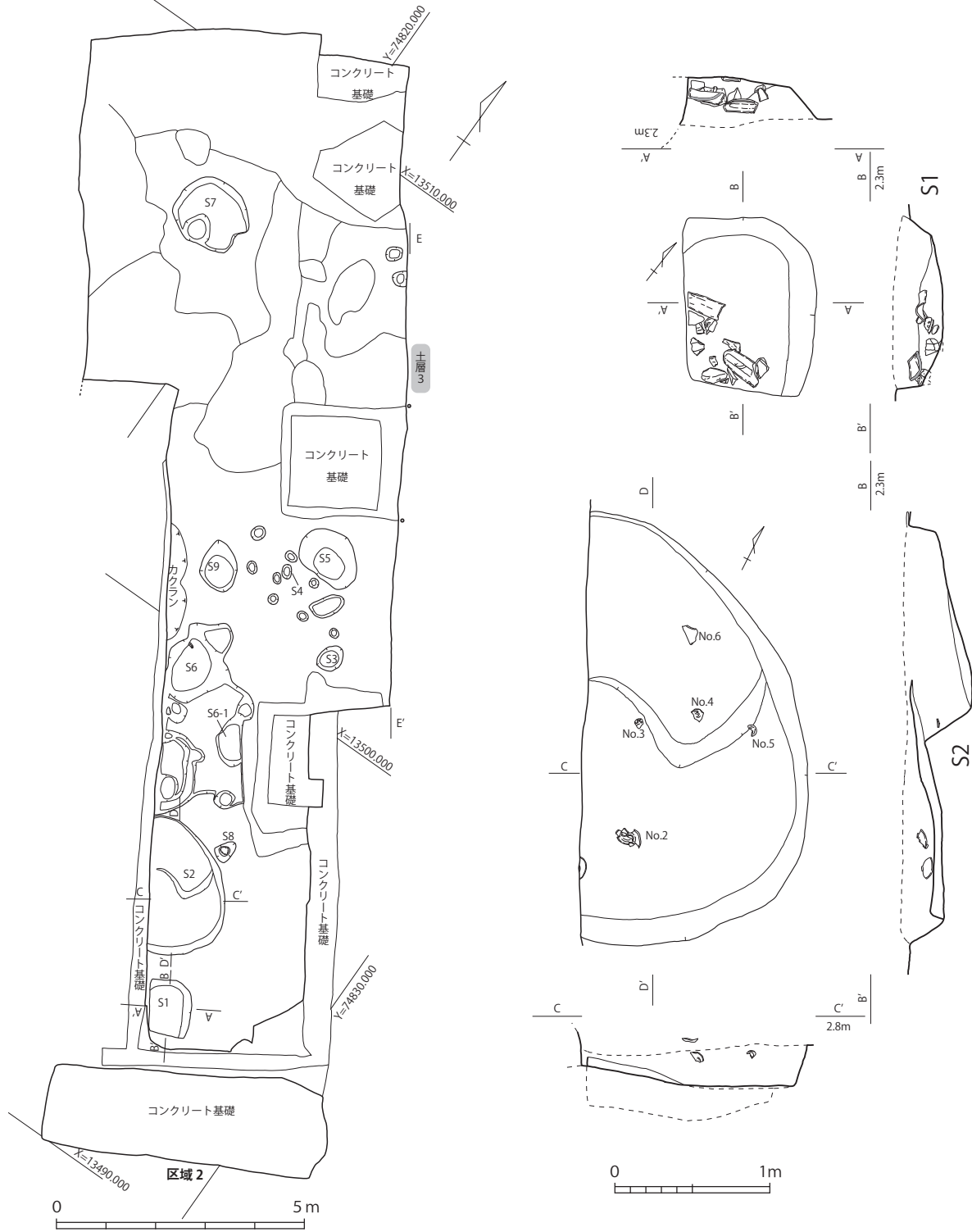


第31図 3次調査区域1土層断面図及び遺構実測図

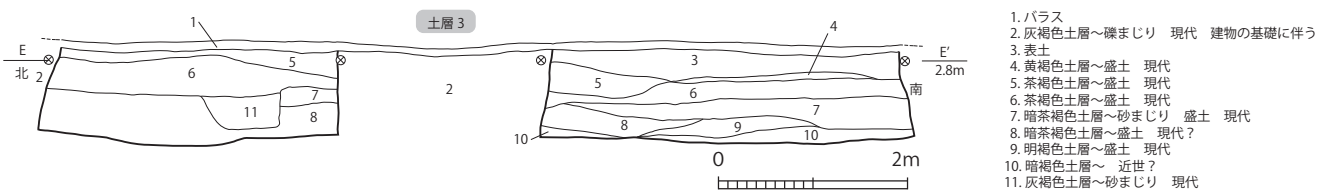


- 1. バニス
- 2. 灰土
- 3. 瓦張り 現代
- 4. 茶褐色土層
- 5. 灰茶褐色土層
- 6. 黒茶褐色土層
- 7. 黒茶褐色土層
- 8. 黒茶褐色土層
- 9. 黒茶褐色土層
- 10. 茶褐色土層
- 11. 茶褐色土層
- 12. 茶褐色土層
- 13. 茶褐色土層
- 14. 黒茶褐色土層
- 15. 黒茶褐色土層
- 16. 黒茶褐色土層
- 17. 黒茶褐色土層
- 18. 黒茶褐色土層
- 19. 黒茶褐色土層
- 20. 黒茶褐色土層
- 21. 黒茶褐色土層
- 22. 黒茶褐色土層
- 23. 黒茶褐色土層
- 24. 黒茶褐色土層
- 25. 黒茶褐色土層
- 26. 黒茶褐色土層
- 27. 黒茶褐色土層
- 28. 黒茶褐色土層
- 29. 黒茶褐色土層
- 30. 黒茶褐色土層
- 31. 黒茶褐色土層
- 32. 黒茶褐色土層
- 33. 黒茶褐色土層
- 34. 黒茶褐色土層
- 35. 黒茶褐色土層
- 36. 黒茶褐色土層
- 37. 黒茶褐色土層
- 38. 黒茶褐色土層
- 39. 黒茶褐色土層
- 40. 黒茶褐色土層
- 41. 黒茶褐色土層
- 42. 黒茶褐色土層
- 43. 黒茶褐色土層
- 44. 黒茶褐色土層
- 45. 黒茶褐色土層
- 46. 黒茶褐色土層
- 47. 黒茶褐色土層
- 48. 黒茶褐色土層
- 49. 黒茶褐色土層
- 50. 黒茶褐色土層
- 51. 黒茶褐色土層
- 52. 黒茶褐色土層
- 53. 黒茶褐色土層
- 54. 黒茶褐色土層
- 55. 黒茶褐色土層
- 56. 黒茶褐色土層
- 57. 黒茶褐色土層
- 58. 黒茶褐色土層
- 59. 黒茶褐色土層
- 60. 黒茶褐色土層
- 61. 黒茶褐色土層
- 62. 黒茶褐色土層
- 63. 黒茶褐色土層
- 64. 黒茶褐色土層
- 65. 黒茶褐色土層
- 66. 黒茶褐色土層
- 67. 黒茶褐色土層
- 68. 黒茶褐色土層
- 69. 黒茶褐色土層
- 70. 黒茶褐色土層
- 71. 黒茶褐色土層
- 72. 黒茶褐色土層
- 73. 黒茶褐色土層
- 74. 黒茶褐色土層
- 75. 黒茶褐色土層
- 76. 黒茶褐色土層
- 77. 黒茶褐色土層
- 78. 黒茶褐色土層
- 79. 黒茶褐色土層
- 80. 黒茶褐色土層
- 81. 黒茶褐色土層
- 82. 黒茶褐色土層
- 83. 黒茶褐色土層
- 84. 黒茶褐色土層
- 85. 黒茶褐色土層
- 86. 黒茶褐色土層
- 87. 黒茶褐色土層
- 88. 黒茶褐色土層
- 89. 黒茶褐色土層
- 90. 黒茶褐色土層
- 91. 黒茶褐色土層
- 92. 黒茶褐色土層
- 93. 黒茶褐色土層
- 94. 黒茶褐色土層
- 95. 黒茶褐色土層
- 96. 黒茶褐色土層
- 97. 黒茶褐色土層
- 98. 黒茶褐色土層
- 99. 黒茶褐色土層
- 100. 黒茶褐色土層

第3章 調査の成果



第32図 第3次調査区域2遺構分布図及び遺構実測図



第33図 3次調査区域2土層断面図

出土遺物

3 図示した遺物は、217～231 が区域1、232～258 は区域2 から出土したものである。

区域1

遺物が出土した遺構は、S 1（第34図217～219）、S 2（第34図220～222）、S 5（第34図223）、S 7（第34図224～227）である。また、第34図228～231は遺構検出などの作業中に表土中から採取した。

S 1（217～219）217は京都系土師器皿の口縁部破片である。16世紀後半。218は備前播鉢の口縁部破片である。内面に摺目が確認できる。中世6期にあたる。16世紀前半。219は瓦質の火鉢の口縁部破片である。外面にスタンプが施されている。

S 2（220～222）220・221は中国産の白磁碗である。口縁部と下半部は接点を確認できないが、同一個体と判断した。221は底部破片である。ともに16世紀。222は京都系土師器皿の口縁部破片である。16世紀末～17世紀初頭。

S 5（223）唐津焼の鉄絵鉢の底部破片である。1590年～1610年。

S 7（224～227）224は京都系土師器皿である。器壁は肥厚する。16世紀後半。225は関西系土師質土器・灯明皿である。底部糸切り。19世紀。226は景德鎮合子（身）である。16世紀。227は景德鎮青花皿（景德鎮E群）の底部～体部下端である。高台に「富貴（長春）」を施す。16世紀後半。

表土中（228～232）228は備前焼の鉢である。16世紀後半～17世紀初頭。

229は土師質土器の焼き塩壺の蓋と考えられる。16世紀後半。230は掛仏の完形品である。長さ3.5cm、幅2.1cm、厚さは1.2cmの大きさをもつ。半肉彫の形状を示し、背面に掛けるための孔をもつ突起がある。231は中央に方形の孔をもつ銅銭である。銘文不明のため銭種を特定できない。232は関西系陶器甕である。19世紀以降。

区域2

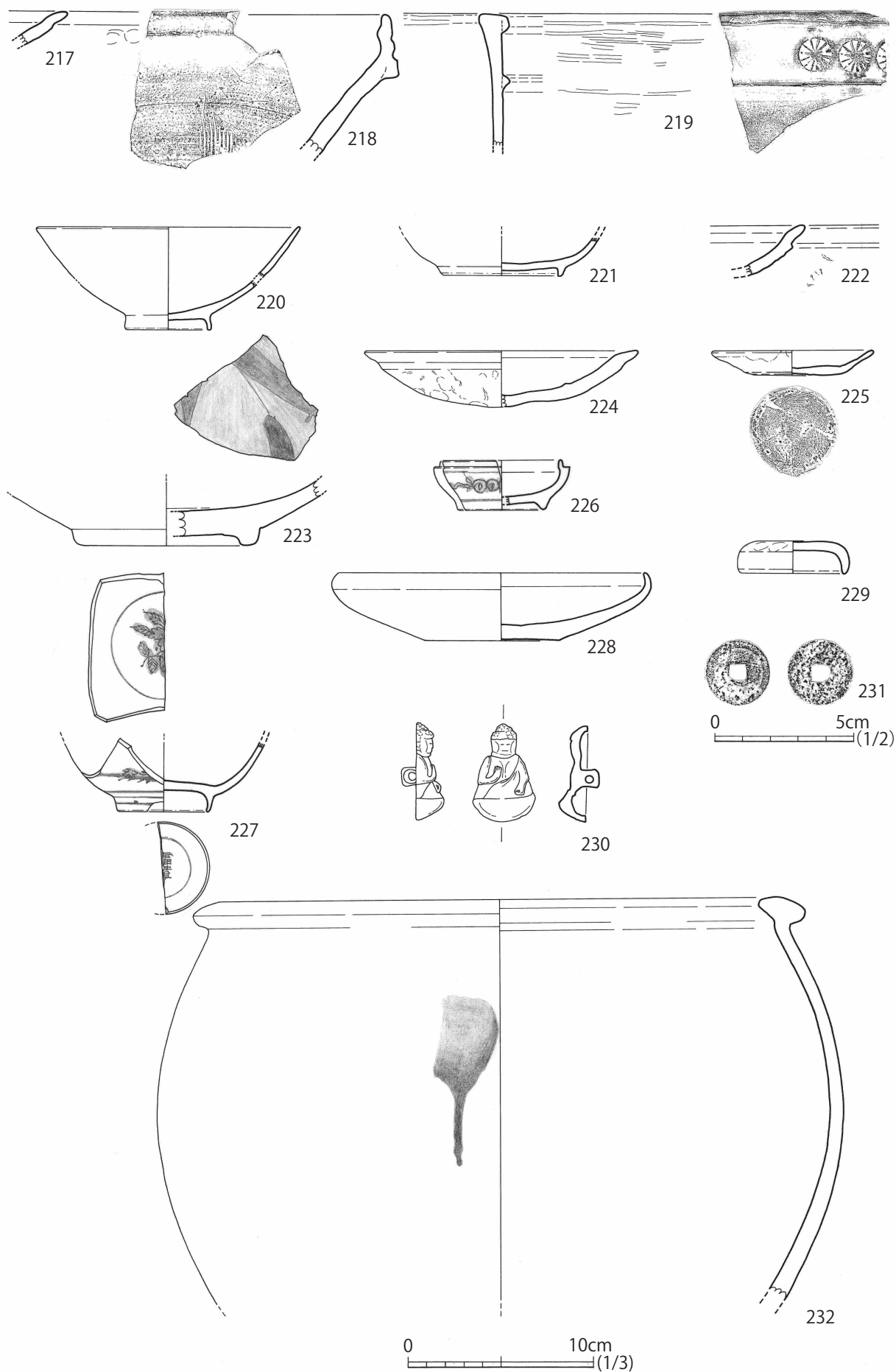
遺物が出土した遺構は、S 2（第35図233～241）、S 3（第35図242）、S 6（第36図243～249）である。また、第36図250～258は遺構検出などの作業中に表土中から採取した。

S 2（233～241）233・234は玉縁をもつ丸瓦である。長さ30cm、幅13cmの大きさである。233は糸切痕を残し、技法はコビキAである。235は景德鎮青花碗（景德鎮E群）の底部破片である。高台に「大明年造」の一部が残る。236は唐津焼の皿の完形品である。口径11.7cm、器高3.5cm、口径4cmの大きさをもつ。灰釉を施す。1590年～1610年。237は糸切り土師器である。16世紀後半～17世紀初頭。238は唐津焼の皿のほぼ完形品である。胎土目があり、灰釉を施す。239は唐津焼の底部破片で器種は不明である。内面に貫入がみられ、土灰釉が施されている。1590年～1610年。240は土師器の把手付鍋の把手である。牛角状に上向きの形状をもつ。16世紀末～17世紀初頭。241は紡錘形の土垂である。一端を欠く。

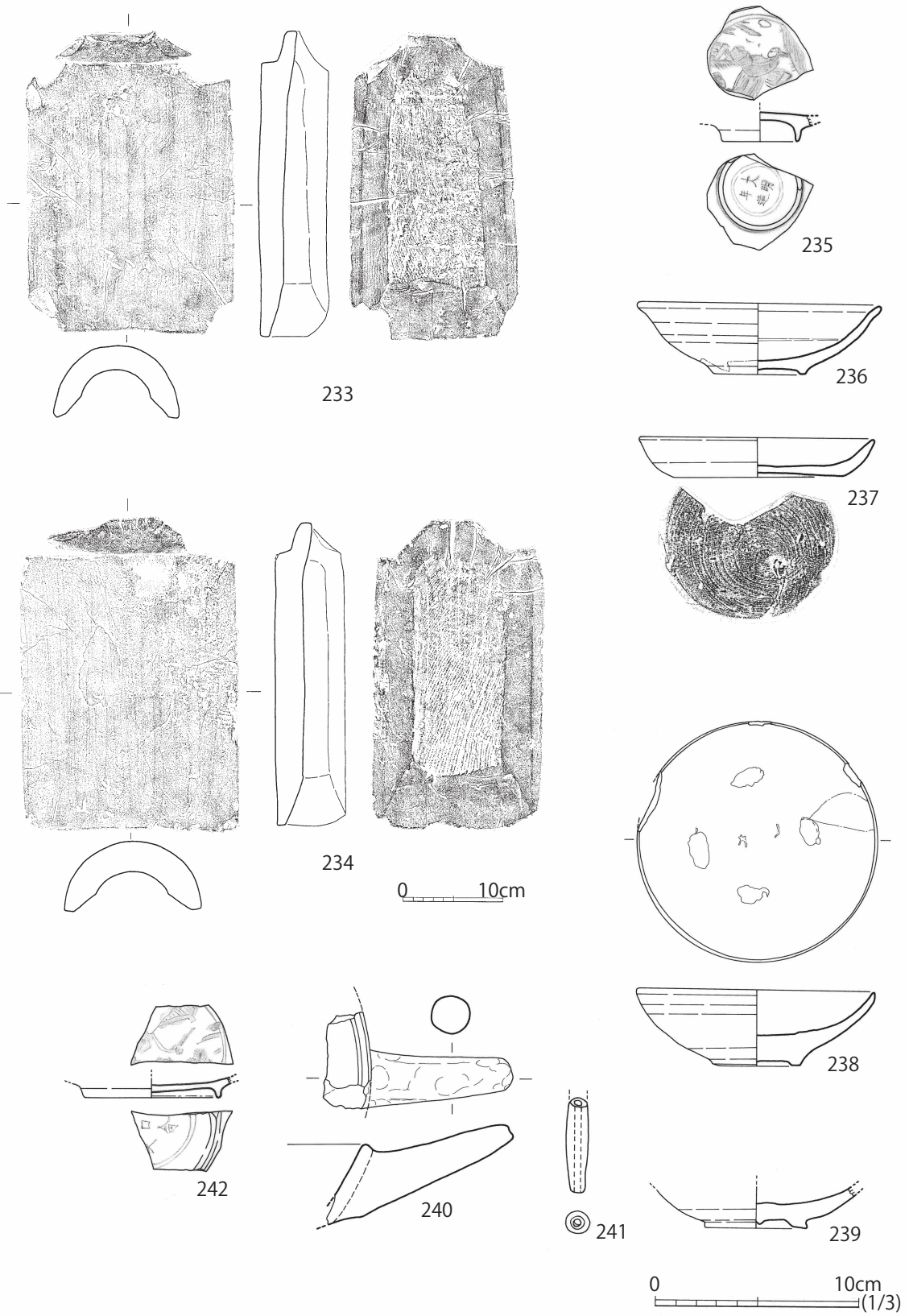
S 3（242）景德鎮青花皿（景德鎮E群）の底部破片である。高台に「長命富貴」の一部が残る。16世紀後半。

S 6（243～249）243～245は京都系土師器皿である。口径は12.8cm、14.6cm、16.5cmと大きさに3種類みられる。243は16世紀末、244・245は16世紀後半。246は土師器の耳皿のほぼ完形品である。16世紀後半。247は土師器の燭台で上部に穿孔がある。16世紀後半。248は瓦質土器の風炉の脚部付近の残欠である。16世紀末～17世紀初頭。249は熙寧元寶である。北宋銭で初鑄年は1018年。

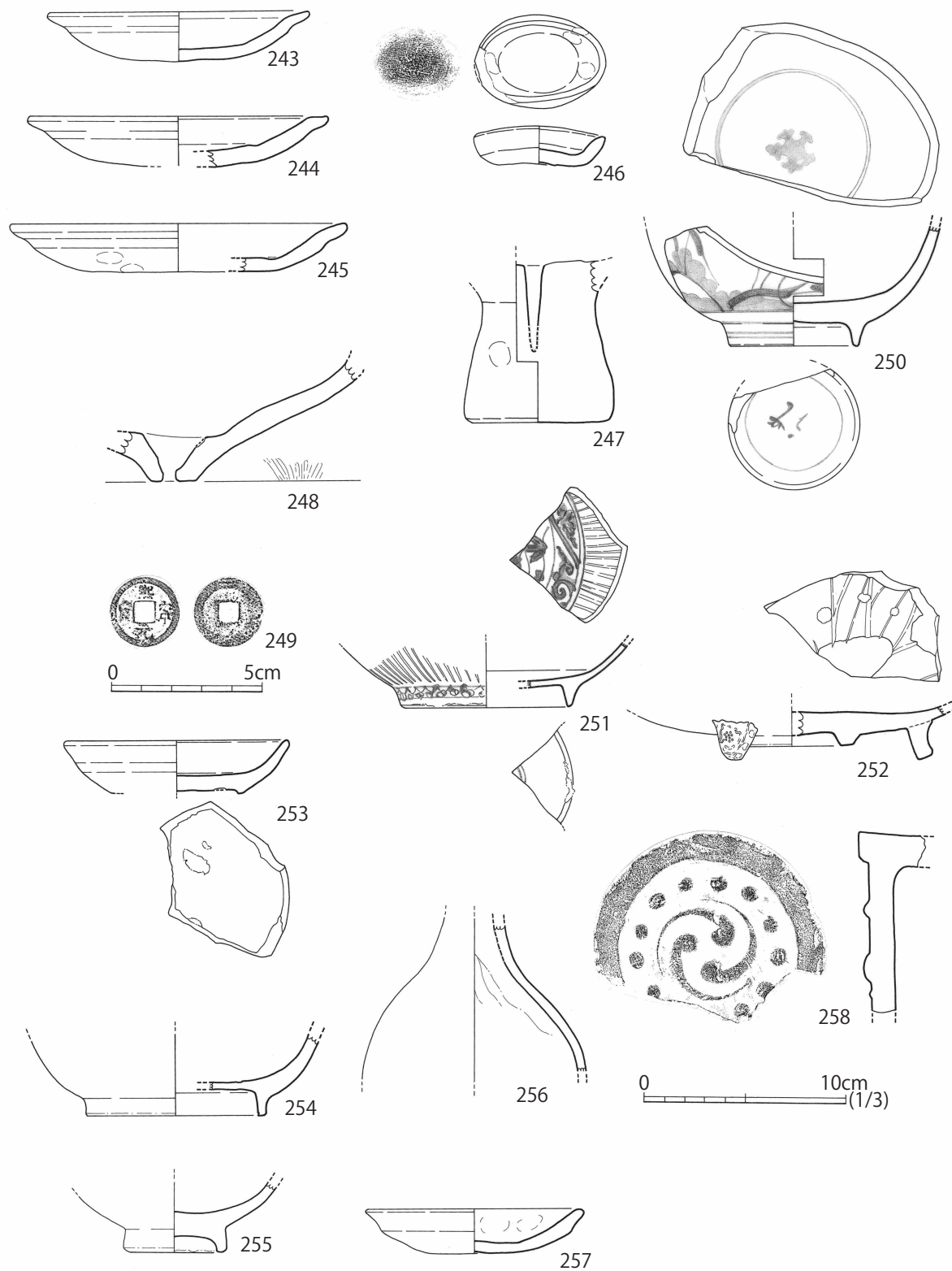
表土中（250～258）250は肥前磁器の染付碗である。内面にコンニャク印版の五弁花文、高台に大明年製くずれ銘をもつ。18世紀後半。251は景德鎮染付の底部付近の破片である。16世紀後半。252は肥前磁器の青磁鉢である。1630年～1650年。253は瀬戸美濃の陶器皿である。16世紀後半。254は関西系陶器皿である。19世紀。255は肥前陶器碗の底部付近の破片である。17世紀後半～18世紀前半。256は産地不明の徳利の頸～体部上半である。257は京都系土師器皿である。16世紀後半～17世紀前半。258は軒丸瓦の瓦当面2/3を残す。瓦当径は15cm程度である。巴文は反時計回りで、尾部は離れている。珠文は13個を復元できる。



第34図 3次調査区出土遺物実測図(1)



第35図 3次調査区出土遺物実測図(2)



第36図 3次調査区出土遺物実測図(3)

第5節 白杵城下町跡月桂寺山門跡調査区及び確認・立会調査

月桂寺山門跡調査区は第2次調査3区の北隣に位置する。月桂寺は慶長13年(1608)に稲葉貞通により、湖南宗嶽を開山として創建された臨済宗寺院である。二王座台地の東縁に高石垣を巡らせ、境内には近世の建造物として本堂、経蔵、中門等が残り、境内は大分県指定史跡に指定されている。山門跡は白杵市大字白杵本丁の現道に面したところにかつては石造の簡素な山門が築かれていて、調査時には凝灰岩の部材が脇に積み重ねられていた。この山門から月桂寺境内へと参道が伸びている。かつてはこの山門跡も県史跡の指定範囲であったが、国土調査によって地番が変更となったことに伴い、史跡指定地からは除外となっている。

山門跡の調査は、まず平成29年度に電線地中化工事の実施に伴い1区の調査を実施した。参道下には水道等多数の埋設管があり掘削が困難であることからこの部分は除外し、参道を挟んで南北に2箇所トレンチ状に設定した。調査地の標高は3.3m前後である。調査では黄褐色土混じりの盛土(約40cm)と、焼土や炭を含む灰褐色砂質土(約60cm)を除去すると淡褐色砂の地山に達する。調査地の近くで旧山門の礎石が地表面でわずかに見えていたが、近現代の什器を含む盛土の上に置かれており、近世以前にさかのぼるものではない。遺構は淡褐色砂層の上面でピット3基を検出した。

平成30年度には2区及び3区の調査を実施した。両調査区とも層序は1区と同じで、約1m掘り下げた淡褐色砂層上面で遺構を検出した。2区で検出した遺構は溝状遺構SD2001である。南北方向に走るもので、数点の礫を並べている。北端部から獣骨が出土したが、状態が悪く取り上げることができなかった。

3区では土坑4基、柱穴状遺構6基を検出した。土坑は長辺が0.6～1.05mといずれも小規模である。遺物はSK3003から土器の細片が、SK3005から鉄釘が、SK3007から中世の白磁碗の細片がそれぞれ1点ずつ出土した。いずれの遺構も時期を明確に特定できるものはない。検出した各遺構の規模や埋土等詳細は遺構一覧表を参照されたい。

以上が月桂寺山門跡調査区の遺構の概要である。いずれの遺構も構築時期を明らかにできるものはなく、また月桂寺山門と直接関連付けられるものは認められなかった。そのため、調査記録による保存とし、調査を終了した。

白杵城下町跡月桂寺山門跡調査区遺構一覧表

遺構番号	調査地点	遺構種別	遺構検出標高	遺構規模(m)			遺構埋土	備考
				長辺	短辺	深度		
SP1001	1-1区	柱穴	2.774	0.36	0.34	0.15	淡灰褐色砂質土 焼土・炭含む	
SP1002	1-2区	柱穴	2.944	0.36	0.36	0.37		
SP1003	1-2区	柱穴	2.914	(0.45)	(0.26)	0.37	淡褐色土 炭微量含む	
SD2001	2区	溝	2.373	(1.41)	0.48	0.17	暗褐色砂質土	北端部から骨出土
SP3001	3区	柱穴	2.233	0.27	0.24	0.14	暗褐色砂質土 焼土・炭少量含む	
SP3002	3区	柱穴	2.278	0.30	0.26	0.18	暗褐色土 やや軟質で焼土・炭少量含む	
SK3003	3区	土坑	2.278	1.05	0.34	0.22	暗褐色砂質土 炭多量含む	土器細片出土
SP3004	3区	柱穴	2.273	0.34	0.32	0.19	暗褐色土 炭少量含む	
SK3005	3区	土坑	2.268	0.72	0.54	0.18	暗褐色砂質土 炭少量含む	鉄釘出土
SP3006	3区	柱穴	2.308	0.47	0.40	0.14	淡黄褐色砂質土 炭少量含む	
SK3007	3区	土坑	2.288	0.70	0.43	0.13	暗褐色砂質土 炭少量含む	白磁片出土
SP3008	3区	柱穴	2.298	0.33	0.31	0.11	暗褐色砂質土 焼土・炭含む	
SK3009	3区	土坑	2.308	0.60	0.50	0.31	暗褐色砂質土 焼土・炭含む	
SP3010	3区	柱穴	2.296	0.21	0.20	0.40	黒褐色砂質土 軟質で炭多量含む	

第3章 調査の成果

出土遺物（第38図）

月桂寺山門跡調査区の出土遺物を第38図に示す。遺物のほとんどは遺構検出面より上の盛土や包含層から出土したもので、遺構から出土したものは極わずかである。259は陶器碗で、黄白色の釉薬を施す萩焼である。高台内には渦巻き状の深いケズリを施す。260は唐津の鉢である。261・262は肥前系陶器の摺鉢で、261は外面に1条の低い凸帯を巡らせる。内面の摺目は上端部をナデ消している。262は底部の周縁が高台状となる。263は土瓶か。264は肥前産染付磁器碗で、見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。265は肥前系の広東碗蓋である。266は肥前産染付磁器段重の蓋で、口縁部に返しを持つ。267は肥前産染付磁器の紅皿である。268は肥前産磁器の瓶子で、内面は露胎となる。269は瀬戸美濃系染付磁器の小坏で、口縁部が軽く外反する。270は鉄釘で、3区のSK3005から出土した。遺構出土遺物で図示できるものはこの1点だけである。271は軒丸瓦で、瓦当中心に左巻きの三巴文と、その周囲に16点の連珠文を施す。瓦当面裏の接合部には細かい刻みを入れる。

臼杵城下町跡確認調査・立会調査出土遺物

都市計画道路祇園洲柳原線本丁工区の確認調査は第1章に記すように平成27年～29年度に実施した。また、平成30年度には主に現道箇所における埋設管の付け替え等に伴う立会調査を実施した。ここではその際に出土した主要な遺物について報告する。

平成27年度確認調査出土遺物（第39図）

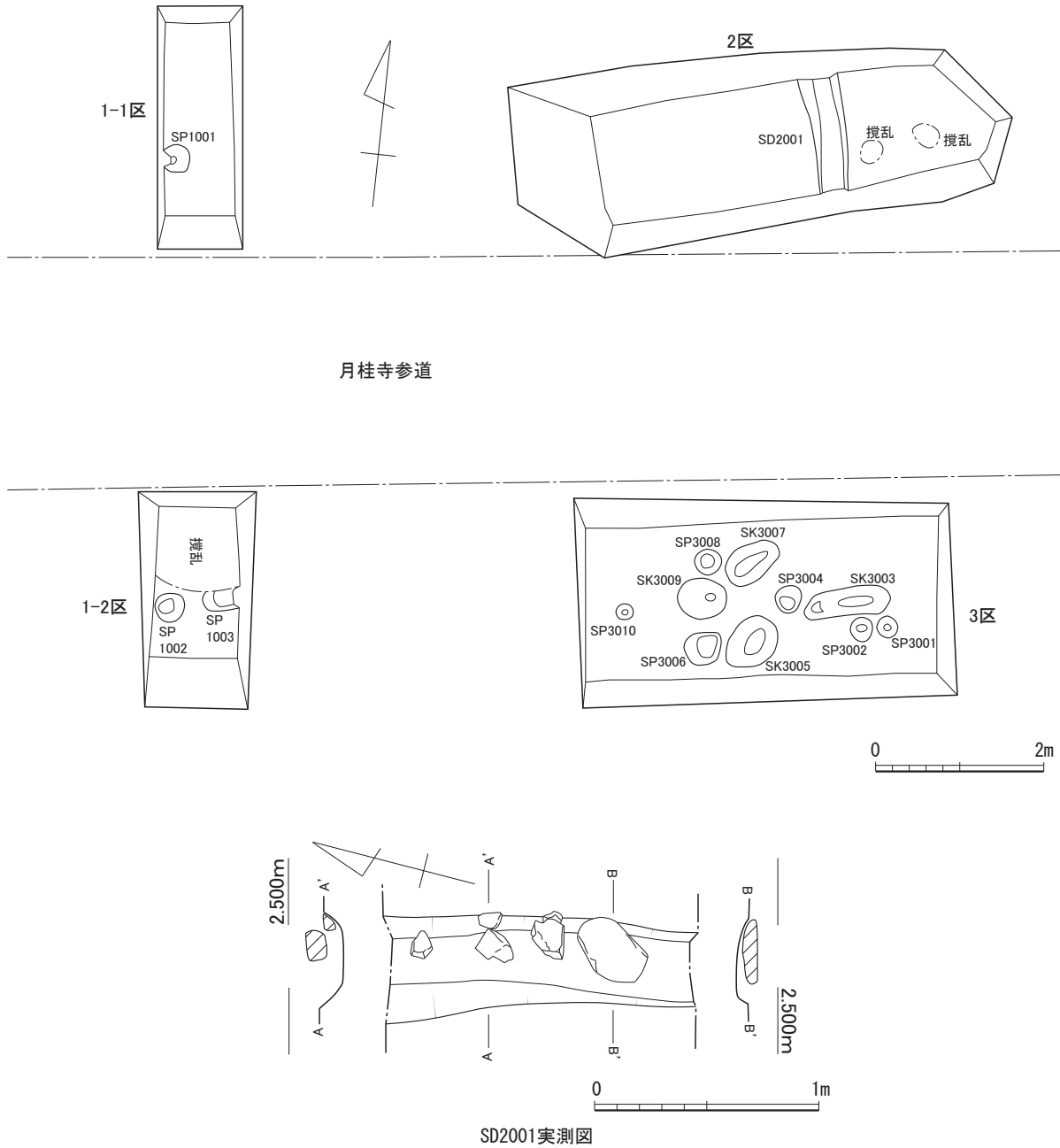
第39図は平成27年度に実施した確認調査で出土した遺物である。平成27年度の確認調査は本調査の第1次調査区と第3次調査区に該当する。272は16世紀後半の中国景徳鎮窯製の青花皿で、底部を欠くが碁笥底となるものである。273は唐津の折縁皿で、見込には4箇所の目痕が残る。274は肥前系陶器の鉢。275は染付磁器の小坏で、口縁部はわずかに外反する。276は平瓦で、二次焼成により色調が全体的に赤変している。以上の内、272・273は第1次調査区、274～276は第3次調査区に本来は帰属するものである。

平成28年度確認調査出土遺物（第40・41図）

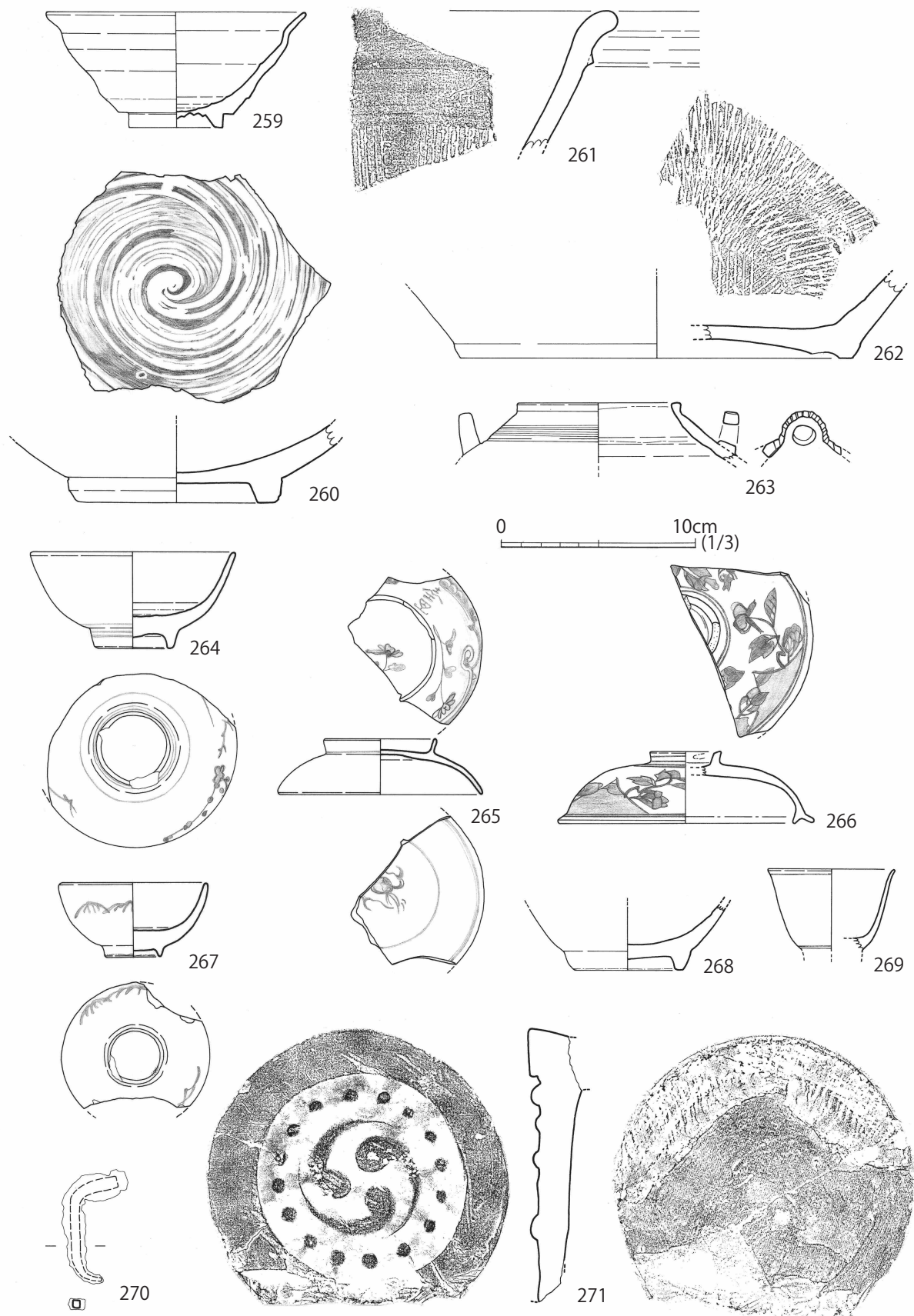
第40・41図は平成28年度に実施した確認調査で出土した遺物で、本調査の第2次調査区に帰属する。277は京都系土師器皿で、16世紀末～17世紀初頭に比定される。278は中国景徳鎮窯製の青花皿である。279は肥前陶器（唐津）の碗で、見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。280は肥前産の京焼風陶器碗である。281は九州産陶器の土瓶であろう。肩部にはスリット状の沈線文、胴部には区画沈線内に多条の波状沈線を充填する。282は肥前産の陶胎染付碗である。283～290は国産の染付磁器である。283は初期伊万里の皿で、体部の中位で屈曲する。284は蛇の目凹型高台の皿で、見込に竜文を施す。285～287は肥前産の染付青磁碗で、285・286は見込みに手描きの五弁花、287はコンニャク印判の五弁花を施す。288は上絵付を施す肥前産染付碗、289は肥前産染付の紅皿である。290は染付磁器小坏で、内面に淡褐色の付着物が残る。291～293は瓦である。291・292は軒丸瓦で、瓦当の中央に右巻き巴文を配し、その周囲に16点の珠文を施す。巴文の尾部はそれぞれ接合し、圏線状となる。293は軒平瓦で、三つ葉文の中心飾りと、その両側に3回反転する唐草文を施す。

平成29年度確認調査・平成30年度立会調査出土遺物（第42図）

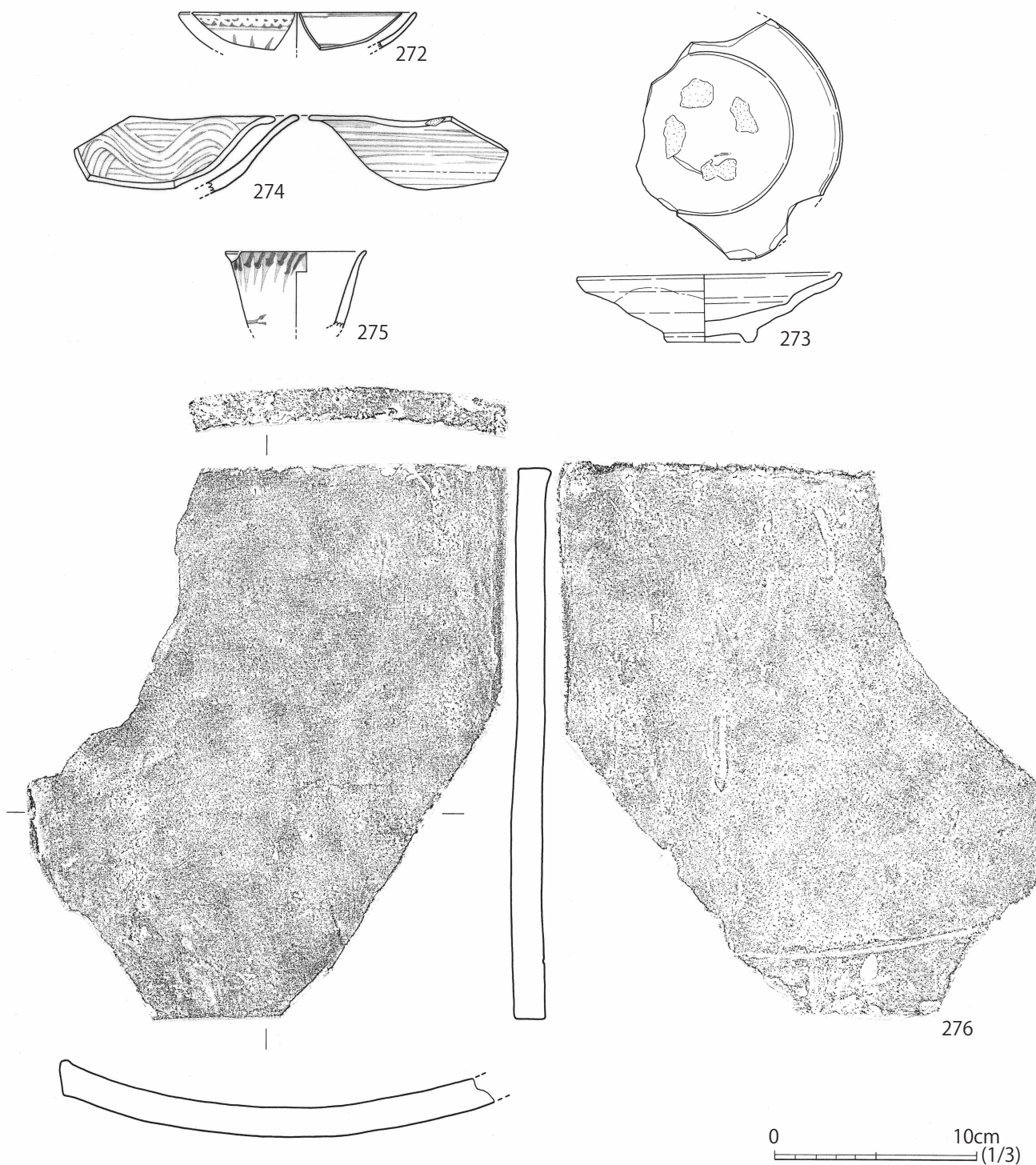
第42図は平成29年度の確認調査及び平成30年度の立会調査で出土した遺物で、確認調査は本調査の第3次調査区に該当する。294・295は確認調査時の出土で、294は丹波焼の摺鉢、295は土師質焼成の管状土錘である。296は染付磁器土瓶、297は隸字体文を施す瀬戸美濃産染付磁器の小坏である。これらは立会調査時に出土した。298は陶器で赤絵の香炉、299は近代のガラスビンである。以上は月桂寺山門跡調査区周辺の工事掘削時に出土した。



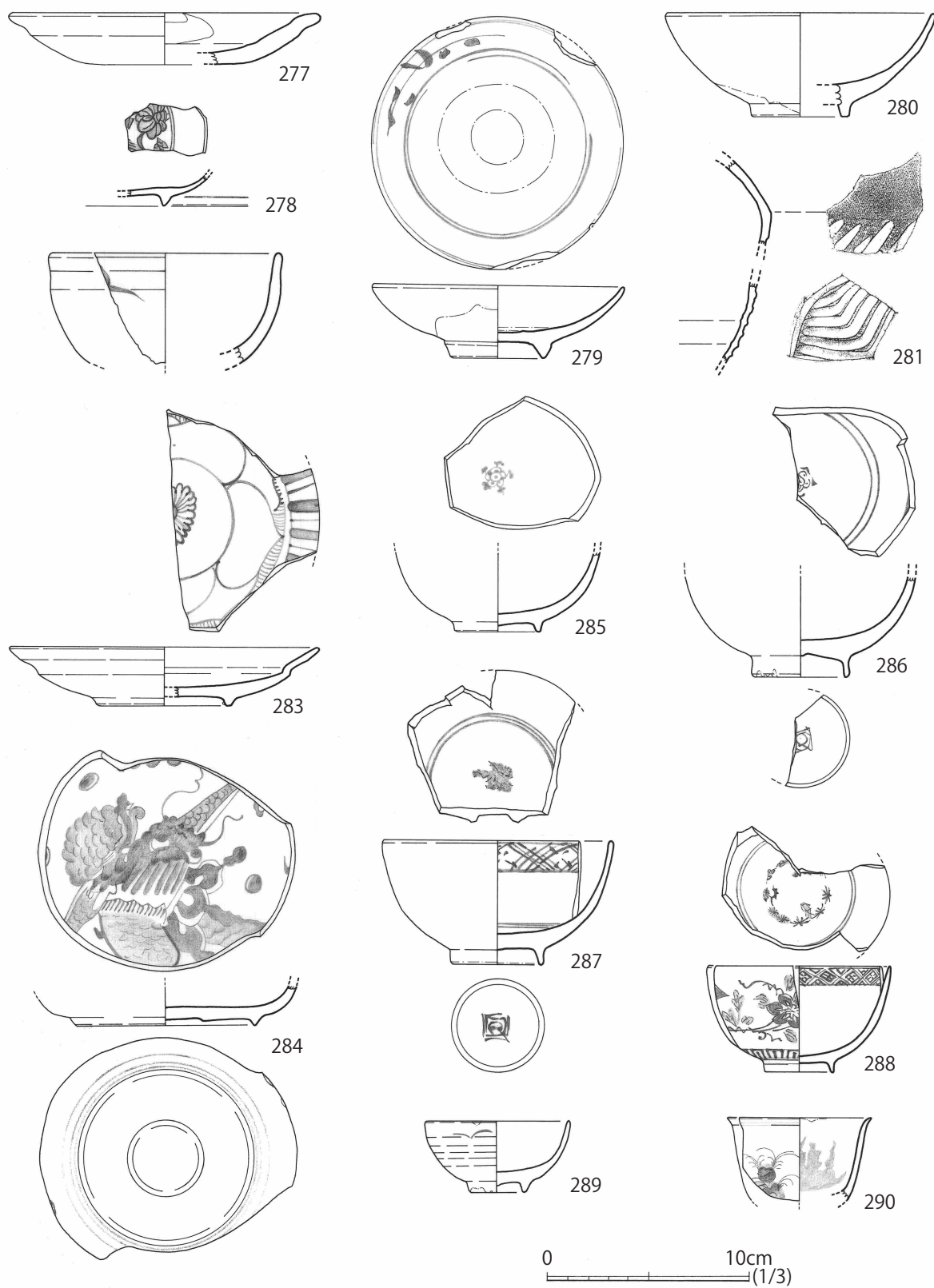
第37図 月桂寺山門跡調査区平面図・遺構実測図（方位は磁北）



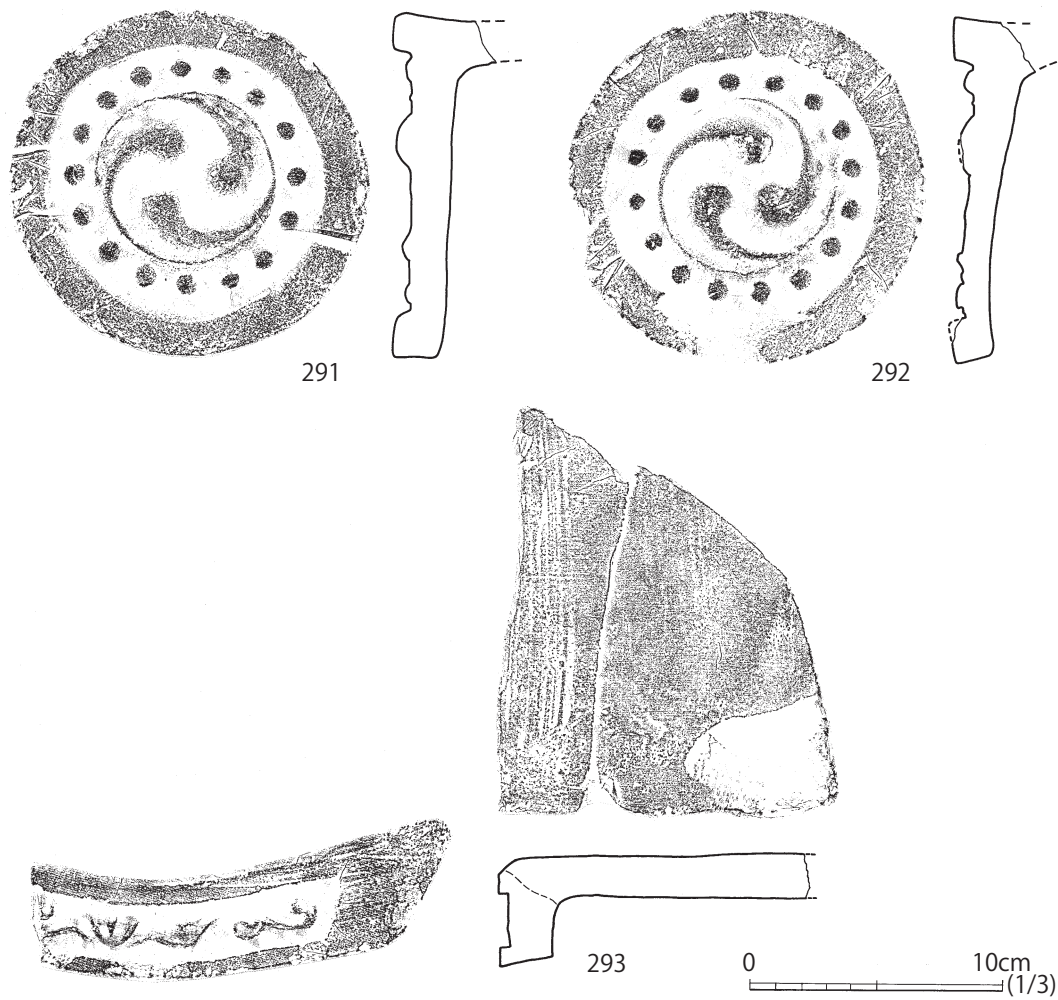
第38図 月桂寺山門跡調査区出土遺物実測図



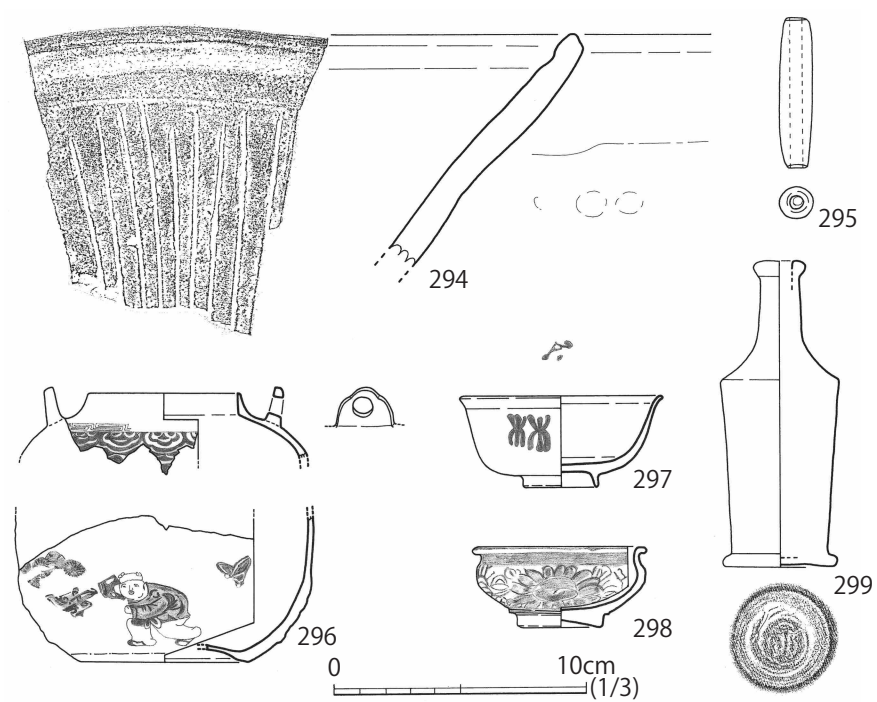
第39図 平成27年度確認調査出土遺物実測図



第40図 平成28年度確認調査出土遺物実測図①



第41図 平成28年度確認調査出土遺物実測図②



第42図 平成29年度確認・立会調査出土遺物実測図

表1 陶磁器・土器類観察表

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	区域名	遺構名	器種		生産地	法量(cm) ()は復元径			備考
								口径	器高	底径	
12	1	1	区域1	S4	磁器	染付碗	肥前				
12	2	1	区域1	S4	京都系土師器	皿					16世紀後半
12	3	1	区域1	S7	京都系土師器	皿	在地系	10.5	2.2		
12	4	1	区域1	S7	京都系土師器	皿	在地系	(10.6)	2.3		
12	5	1	区域1	S7	京都系土師器	皿	在地系	(10.8)	2.05		
12	6	1	区域1	S7	京都系土師器	皿	在地系	10.6	2.2		
12	7	1	区域1	S7	京都系土師器	皿	在地系	(12.2)	2.4		
12	8	1	区域1	S7	京都系土師器	皿	在地系	(12.6)	2.2		
12	9	1	区域1	S7	京都系土師器	皿	在地系	(12.0)	1.6		
12	10	1	区域1	S10	京都系土師器	皿	在地系	(12.8)	2.3		
12	11	1	区域1	S7	京都系土師器	皿	在地系	(13.0)	1.8		
12	12	1	区域1	S7	京都系土師器	皿	在地系	(15.6)	2.4		
12	13	1	区域1	表土中	陶器	植木鉢	瀬戸美濃系		7.0+a		19世紀
13	22	1	区域2	表土中	磁器	青花皿	景德鎮窯	(11.3)	2.3+a		E群
13	23	1	区域2	表土中	磁器	青花皿	景德鎮窯	(11.3)	2.4	6.0	E群
13	24	1	区域2	表土中	磁器	碗	肥前	(10.4)	4.1+a		1780~1810年代
13	25	1	区域2	表土中	磁器	小坏		8.0	4.5	3.8	大正時代
13	26	1	区域2	表土中	青磁	大皿	龍泉窯		2.5+a	(21.0)	15世紀
13	27	1	区域2	S26	陶器	碗			3.4+a	5.2	18世紀~19世紀?
13	28	1	区域2	表土中	陶器	瓶	肥前		1.5+a	5.2	17世紀?
13	29	1	区域2	表土中	陶器	皿	肥前	(12.0)	3.5	3.9	1590年~1600年代
13	30	1	区域2	表土中	京都系土師器	灯明皿	在地系	(9.8)	2.1		一部双付着
13	31	1	区域2	S25	京都系土師器	灯明皿	在地系	10.6	2.2		一部双付着
13	32	1	区域2		京都系土師器	皿	在地系	(11.8)	2.5		
13	33	1	区域2	S21	京都系土師器	皿	在地系	12.1	2.5		楕円になっている為口径12.1~12.5
13	34	1	区域2	S11	京都系土師器	皿	在地系	12.1	2.7		
13	35	1	区域2		京都系土師器	皿	在地系	(15.6)	2.3		
13	36	1	区域2	表土中	糸切り土師器	坏	在地系	10.5	1.9	7.9	内面双付着
13	37	1	区域2	表土中	陶器	浅鉢	備前	(20.4)	3.2+a		16世紀
13	38	1	区域2	表土中	陶器	すり鉢	備前	(30.0)	10.9+a		
14	43	1	区域4	S34	磁器	碗	景德鎮窯		2.4+a		16世紀
14	44	1	区域4	表土中	磁器	青花皿	景德鎮窯		1.3+a	(8.4)	16世紀
14	45	1	区域4	S30	磁器	染付碗	肥前		5.7+a	(4.0)	1820年~1860年代
14	46	1	区域4	S41	磁器	染付碗	肥前	7.5	3.5	2.7	18世紀後半
14	47	1	区域4	S41	磁器	染付碗	肥前	(10.0)	4.6	4.4	18世紀後半~19世紀
14	48	1	区域4	S41	磁器	染付猪口	肥前	(7.4)	5.3	5.0	18世紀
14	49	1	区域4	S41	磁器	染付皿	肥前	(13.8)	4.2	7.2	

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	区域名	遺構名	器種		生産地	法量(cm) ()は復元径			備考
								口径	器高	底径	
14	50	1	区域4	S41	青磁	染付蓋	肥前	10.3	3.7	4.2	18世紀末
14	51	1	区域4	S41	磁器	白磁皿	肥前	12.9	3.7	6.8	18世紀末～19世紀
14	52	1	区域4	S41	磁器	白磁鉢	肥前	(16.8)	7.0	(8.8)	17世紀末～18世紀前半
14	53	1	区域4	S41	磁器	白磁小皿	肥前	(6.4)	2.1	3.0	
14	54	1	区域4	S41	陶器	皿	肥前		2.4+a	4.8	1590年～1610年代
14	55	1	区域4	S34	陶器	碗	肥前	(9.8)	8.0	5.2	16世紀末～17世紀前半
14	56	1	区域4	表土中	陶器	皿	肥前	(13.0)	3.5	4.0	1600年代～1630年代
14	57	1	区域4	S30	磁器	緑釉鉢	珉平焼	(13.6)	4.8	(7.6)	
15	58	1	区域4	S41	陶器	すり鉢	堺産	(35.5)	12.8	16.0	
15	59	1	区域4	S34	陶器	すり鉢	備前		5.8+a		16世紀 近世1期B?
15	60	1	区域4	S39	陶器	すり鉢	備前		5.5+a		
15	61	1	区域4	S40	京都系土師器	皿	在地系	(11.4)	2.5		内面:ス付着
15	62	1	区域4	S34	京都系土師器	皿	在地系	(12.5)	2.5		16世紀
15	63	1	区域4	S35	糸切)土師器	坏	在地系	(11.0)	2.2	7.5	
20	68	2	区域1-1	S1	陶器	鉢	唐津系陶器		9.0+a	12.4	18世紀前半
20	69	2	区域1-1	S2a	磁器	染付皿	伊万里	13.6	2.2		17世紀後半
20	70	2	区域1-1	S2	陶器	鉢	唐津系陶器		12.4+a		17世紀後半～18世紀前半
20	71	2	区域1-1	S2a	陶器	鉢	唐津系陶器		12.7+a		17世紀後半～18世紀前半
20	72	2	区域1-1	S2	京都系土師器	皿	在地	12.0	2.3		16世紀後半～17世紀初
20	73	2	区域1-1	S3	陶器	播鉢	備前		5.2+a		16世紀末
20	74	2	区域1-1	S4	陶器	鉢	唐津	(18.0)	7.2+a		
20	75	2	区域1-1	S4	陶器	?	中国		3.5+a	(14.0)	
20	76	2	区域1-1	S4	京都系土師器	皿		(13.0)	2.2+a		16世紀後半～17世紀初
20	77	2	区域1-1	S4	京都系土師器	皿			2.0		16世紀後半～17世紀初
20	78	2	区域1-1	S4	京都系土師器	皿			2.2		16世紀後半～17世紀初
20	79	2	区域1-1	S4	土師質土器	皿		(15.8)	2.0		16世紀後半～17世紀初
20	82	2	区域1-1	S7	磁器	青花碗	景德鎮窯		3.2+a		16世紀後半 饅頭心E群
20	83	2	区域1-1	S7	陶器	皿	唐津系陶器	(11.0)	2.3+a		1590年～1610年
20	84	2	区域1-1	S7	陶器	舟徳利	朝鮮王朝産		3.8+a		16世紀後半
21	85	2	区域1-1	S7	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	2.7		16世紀後半～17世紀初
21	86	2	区域1-1	S7	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	2.0		16世紀後半～17世紀初
21	87	2	区域1-1	S7	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	1.6+a		16世紀後半～17世紀初
21	88	2	区域1-1	S7	糸切)土師器	皿	在地	(9.0)	2.1	5.3	16世紀後半～17世紀初
21	89	2	区域1-1	S7	瓦質土器	風炉			4.1+a		16世紀後半～17世紀初
21	91	2	区域1-1	S9	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	2.1		16世紀後半～17世紀初
21	92	2	区域1-1	S9	糸切)土師器	皿	在地	(10.8)	2.4	(8.0)	時期不明
21	93	2	区域1-1	S10	磁器	青花皿	景德鎮窯		1.3+a	(7.6)	16世紀後半 景德鎮青花皿

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	区域名	遺構名	器種		生産地	法量(cm) ()は復元径			備考
								口径	器高	底径	
21	94	2	区域1-1	S10	磁器	染付碗(饅頭心)	景德鎮窯		1.3+a	3.7	16世紀後半
21	95	2	区域1-1	S12	磁器	青磁碗	中国		3.0+a		15世紀
21	96	2	区域1-1	S15	土師質土器	鉢		(10.0)	7.0+a		時期不明
21	97	2	区域1-1	S15	糸切り土師質土器	皿		(10.9)	2.1	(7.1)	
21	98	2	区域1-1	S15	土師質土器	皿(灯明皿)		9.2	1.9	5.9	時期不明 口縁部内外面双付着
21	99	2	区域1-1	S15	土師質土器	焼き塩壺蓋		(5.8)	2.0	(3.5)	
21	104	2	区域1-1	S16	瓦質土器	壺?		(14.0)	4.5+a		
21	105	2	区域1-1	S16	瓦質土器	風炉					
21	106	2	区域1-1	S17	磁器	染付碗	景德鎮窯		5.0+a		時期不明
21	107	2	区域1-1	S17	磁器	白磁碗	中国?		3.0+a		時期不明
21	108	2	区域1-1	S17	京都系土師器	皿	在地	(14.0)	2.1		16世紀後半～17世紀初
21	109	2	区域1-1	S17	土師質土器	皿		(9.8)	1.9	(5.8)	
21	110	2	区域1-1	S17	陶器	播鉢	備前		6.2+a	(12.2)	16世紀～17世紀
22	111	2	区域1-1	S17	陶器	播鉢	不明		3.7+a		時期不明
22	113	2	区域1-1	検出時	磁器	青花碗	景德鎮窯	(10.4)	4.6+a		16世紀後半
22	114	2	区域1-1	検出時	磁器	青花皿	漳州窯	9.0	2.5	3.7	16世紀後半～末
22	115	2	区域1-1	検出時	陶器	皿	唐津系陶器		1.7+a	4.4	1610年～1630年代砂目
22	116	2	区域1-1	検出時	磁器	白磁皿	華南	(15.0)	2.1+a		16世紀後半輪花皿
22	117	2	区域1-1	検出時	磁器	白磁皿	伊万里	(13.6)	3.7+a		17世紀後半～18世紀前半菊花皿
22	118	2	区域1-1	検出時	磁器	染付碗	肥前	(9.2)	4.8+a		17世紀後半
22	119	2	区域1-1	検出時	磁器	染付小坏	肥前	(5.8)	3.1+a		17世紀～18世紀
22	120	2	区域1-1	検出時	陶器	黒染茶碗	軟質施釉陶器	(11.3)	6.2+a		17世紀代
22	121	2	区域1-1	検出時	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃		2.5+a		
22	122	2	区域1-1	検出時	京都系土師器	皿	在地	(10.6)	2.5		16世紀後半～17世紀初
22	123	2	区域1-1	検出時	京都系土師器	皿	在地	(12.1)	2.2		16世紀後半～17世紀初
22	124	2	区域1-1	検出時	京都系土師器	皿	在地	(11.4)	2.1		16世紀後半～17世紀初
22	125	2	区域1-1	検出時	京都系土師器	皿	在地	12.0	1.7		16世紀後半～17世紀初
22	126	2	区域1-1	検出時	京都系土師器	皿	在地		2.0+a		16世紀後半～17世紀初
22	127	2	区域1-1	検出時	京都系土師器	皿	在地		2.5+a		16世紀後半～17世紀初
22	128	2	区域1-1	検出時	京都系土師器	皿	在地		2.0+a		16世紀後半～17世紀初
22	129	2	区域1-1	検出時	京都系土師器	皿	在地		2.0+a		16世紀後半～17世紀初
22	130	2	区域1-1	検出時	糸切り土師器	皿	在地	(12.0)	2.1	(8.1)	
22	131	2	区域1-1	検出時	糸切り土師器	皿	在地	(13.3)	2.7	(8.6)	
22	132	2	区域1-2	検出時	土師器	小皿		6.8	2.0	4.6	16世紀後半 2次被熱
22	133	2	区域1-1	検出時	陶器	播鉢	備前	(29.1)	5.7+a		17世紀～18世紀
23	135	2	区域1-1	検出時	陶器	播鉢	肥前系陶器		5.0+a		17世紀
23	136	2	区域1-1	検出時	陶器	播鉢	備前		9.0+a		17世紀

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	区域名	遺構名	器種		生産地	法量(cm) ()は復元径			備考
								口径	器高	底径	
23	137	2	区域1-1	検出時	土師質土器	焙烙	不明	(25.0)	4.7+a		17世紀後半～18世紀前半
23	138	2	区域1-1	検出時	陶器	播鉢	肥前陶器		5.0+a	9.0	18世紀～19世紀
23	139	2	区域1-1	検出時	瓦質土器	コン口					19世紀
23	140	2	区域1-1	検出時	瓦質土器	コン口					19世紀
23	141	2	区域1-2	S2	陶器	碗	志野	(11.4)	3.4+a		1590年～1600年
23	142	2	区域1-2	S2	陶器	碗	志野		1.1+a	(6.2)	1590年～1600年
23	143	2	区域1-2	S4	糸切)土師器	皿(灯明皿)		10.0	2.1	5.6	16世紀後半～17世紀初
23	144	2	区域1-2	検出時	陶器	舟徳利	朝鮮王朝産 陶器	(6.0)	2.2+a		16世紀後半
23	145	2	区域1-1	検出時	土師質土器	焼き塩壺蓋	産地不明	(10.4)	2.2		17世紀代 手づくね 内外面煤付着
23	146	2	区域1-1	検出時	陶器	播鉢	備前	(28.8)	7.6+a		16世紀末(近世I期)
23	147	2	区域1-2	検出時	陶器	播鉢	備前		5.4+a		16世紀末
23	148	2	区域1-2	検出時	陶器	皿	唐津	10.4	3.1	3.6	1590～1610年
24	151	2	区域2-1	検出時	陶器	碗		(11.2)	7.9	5.0	17世紀末～18世紀
24	152	2	区域2-1	検出時	陶器	小杯	唐津系陶器		4.3+a	(4.0)	1590年～1610年
24	153	2	区域2-1	検出時	糸切)土師器	皿	在地	(11.8)	1.9	(8.6)	時期不明
24	154	2	区域2-1	検出時	陶器	播鉢	備前	(19.4)	5.6+a		16世紀末(近世I期) 交又すり目
24	155	2	区域2-2	S3	磁器	白磁皿	肥前?	(16.6)	3.2	(5.8)	1600年～1630年代
24	156	2	区域2-2	S4	磁器	白磁皿	中国白磁	(11.2)	2.8	(7.2)	16世紀
24	159	2	区域2-2	検出時	磁器	青磁鉢	不明	(11.8)	4.4	(5.6)	
24	160	2	区域2-2	検出時	陶胎染付	碗	肥前陶胎染付	(11.8)	6.1+a		18世紀前半
24	161	2	区域2-2	検出時	陶器	香合	織部焼		1.7		1610年～1620年 希少な例
24	162	2	区域2-2	検出時	磁器	水滴	肥前		1.3+a		18世紀～19世紀
24	163	2	区域2-2	検出時	陶器	瓶	備前		8.1+a	6.2	17世紀～18世紀
24	164	2	区域2-2	検出時	陶器	鉢	肥前陶器		5.6+a	(11.0)	17世紀末～18世紀前半
24	165	2	区域2-2	検出時	陶器	鉢	肥前陶器		10.3+a		17世紀後半～18世紀
24	166	2	区域2-2	検出時	陶器	播鉢	肥前陶器	(37.2)	9.4+a		18世紀～19世紀
25	167	2	区域2-2	検出時	陶器	鉢	肥前陶器	(33.6)	8.4+a		17世紀末～18世紀前半
25	168	2	区域2-2	検出時	瓦質土器	火鉢	豊後		8.3+a		16世紀後半
25	169	2	区域2-2	検出時	京都系土師器	灯明皿	在地	10.9	2.2		16世紀後半～17世紀初
26	171	2	区域3-1	S1-2付近	陶器	皿	唐津系陶器		2.4+a		1590年～1610年代
26	172	2	区域3-1	S1	糸切)土師器	皿	在地	9.3	2.0	5.2	
26	173	2	区域3-1	S2	磁器	青磁皿			1.8+a		15世紀
26	174	2	区域3-1	S2	京都系土師器	皿	在地	(13.0)	2.1		16世紀後半～17世紀初
26	175	2	区域3-1	S3	京都系土師器	皿	在地	(14.2)	2.4		16世紀末～17世紀初
26	176	2	区域3-1	S5	陶器	沓茶碗	唐津		5.6+a	(5.2)	1590年～1610年代 鉄絵
26	177	2	区域3-1	S5	陶器	鉢	志野焼		7.4+a		1590年～1600年代

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	区域名	遺構名	器種		生産地	法量(cm) ()は復元径			備考
								口径	器高	底径	
26	178	2	区域3-1	S6	陶器	鉢	織部焼	(13.4)	6.2	(10.0)	1610年代
26	179	2	区域3-1	S6	陶器	皿	唐津系	(11.6)	2.2+a		1590年～1610年代
26	180	2	区域3-1	S7	磁器	青花皿	景德鎮窯	(14.0)	3.0	(8.0)	15世紀後半～16世紀前半 青花皿B
26	181	2	区域3-1	S7	陶器	碗	朝鮮王朝産	(13.0)	3.1+a		16世紀後半～17世紀初
26	182	2	区域3-1	S7	陶器	碗(底部)	朝鮮王朝産				16世紀後半～17世紀初
26	184	2	区域3-1	S8	陶器	沓茶碗	志野焼	(12.6)	8.7	(3.4)	1590年～1610年 優品
26	185	2	区域3-1	S8	陶器	碗	唐津	(10.9)	7.4	4.2	17世紀 鉄絵
26	186	2	区域3-1	S8	陶器	碗	唐津	(13.2)	6.8	(5.0)	17世紀 天目形
27	187	2	区域3-1	S8	陶器	碗	唐津		4.6+a	(5.2)	1590年～1610年代
27	188	2	区域3-1	S8	陶器	碗	唐津	(11.8)	7.0	5.2	17世紀 天目形
27	189	2	区域3-1	S8	陶器	碗	唐津		2.3+a	3.0	1590年～1610年代
27	190	2	区域3-1	S8	陶器	壺	中国産	(5.4)	1.5+a		17世紀
27	191	2	区域3-1	S8	糸切り土師器	皿	在地	(9.8)	2.1	(7.0)	
27	196	2	区域3-1	S10	瓦質土器	火鉢			3.7+a		
27	198	2	区域3-1	S12	土師器	坏		(12.2)	2.4	(7.8)	
27	199	2	区域3-1		磁器	青磁皿	龍泉窯	(9.4)	1.8+a		13世紀
27	201	2	区域3-1	検出時	磁器	染付筒形碗	肥前系	(8.0)	5.1+a		18世紀末～19世紀前半
27	202	2	区域3-1	検出時	磁器	碗	肥前系		2.3+a		
27	203	2	区域3-2	S1	糸切り土師器	小皿	在地	(7.2)	1.1	6.5	
27	204	2	区域3-2	S3	磁器	青花碗	中国		3.2+a		
27	205	2	区域3-2	S4	磁器	青花碗	中国	(12.0)	3.3+a		
27	206	2	区域3-2	検出時	磁器	青花碗	中国	(10.4)	4.7	(4.8)	18世紀～19世紀
27	207	2	区域3-2	検出時	磁器	青磁香炉	肥前磁器	(8.0)	5.3+a		18世紀
27	208	2	区域3-2	検出時	京都系土師器	皿		(10.0)	2.5	(3.2)	16世紀後半～17世紀初
27	209	2	区域3-2	検出時	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	2.5		16世紀後半～17世紀初
27	210	2	区域3-2	検出時	磁器	白磁皿		(13.8)	2.8	(8.7)	
28	211	2	区域3-2	検出時	陶器	土瓶蓋	関西系陶器	外側: 10.2	2.6	4.8	18世紀後半～19世紀
28	212	2	区域3-2	検出時	陶器	土鍋蓋	関西系陶器	(16.0)	3.2+a		18世紀～19世紀
28	213	2	区域3-2	検出時	陶器	土鍋	関西系陶器	(16.4)	6.2+a		18世紀後半～19世紀
28	214	2	区域3-2	検出時		コンロ		(22.4)	5.5+a		
28	215	2	区域3-2	検出時	瓦質土器	コンロ	丸山焼		15.0+a		19世紀 白杵産
28	217	3	区域1	S1	京都系土師器	皿	在地		2.1+a		16世紀後半
34	218	3	区域1	S1	陶器	播鉢	備前		7.4+a		16世紀前半中世6期
34	219	3	区域1	S1	瓦質	火鉢			7.1+a		16世紀後半外側にスタンプあり
34	220	3	区域1	S2	白磁	碗	中国	(13.8)	5.3+a	(4.5)	16世紀
34	221	3	区域1	S2	白磁	碗	中国		2.1+a	(6.3)	16世紀

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	区域名	遺構名	器種		生産地	法量(cm) ()は復元径			備考
								口径	器高	底径	
34	222	3	区域1	S2	京都系土師器	皿			2.7+a		16世紀末～17世紀初
34	223	3	区域1	S5	陶器	鉄絵鉢	唐津		3.4+a	(9.6)	1590～1610年代
34	224	3	区域1	S7	京都系土師器	皿	在地	(14.4)	3.0		16世紀後半
34	225	3	区域1	S7	土師質土器	灯明皿	関西系	(8.5)	1.3	4.6	19世紀
34	226	3	区域1	S7	磁器	合子(身)	景德鎮	(6.3)	2.6	(4.4)	16世紀
34	227	3	区域1	S7	磁器	青花皿	景德鎮E群		3.7+a	(4.7)	16世紀後半
34	228	3	区域1	検出時	陶器	鉢	備前	(16.2)	3.6	(7.1)	16世紀後半～17世紀初
34	229	3	区域1	検出時	土師質土器	焼塩壺の蓋 か		5.6	1.8		16世紀後半
34	232	3	区域1	検出時	陶器	甕	関西系	(29.8)	21.4+a		19世紀以降
35	235	3	区域2	S2	磁器	青花碗	景德鎮E群		1.4+a	3.6	饅頭心 高台に「大明年造」銘
35	236	3	区域2	S2	陶器	皿	唐津	11.7	3.5	4.0	1590～1610灰釉
35	237	3	区域2	S2	糸切り土師器	皿	在地	11.4	1.9	8.3	16世紀後半～17世紀初
35	238	3	区域2	S2	陶器	皿	唐津	11.4	3.7	3.5	1590～1610胎土目あり 灰釉
35	239	3	区域2	S2	陶器		唐津		2.1+a	5.0	1590～1610
35	240	3	区域2	S2	土師器	把手付鍋		(9.3+a)	4.7+a	1.9	16世紀末～17世紀初
35	242	3	区域2	S3	磁器	青花皿	景德鎮E群		1.0+a	6.6	16世紀後半
36	243	3	区域2	S6	京都系土師器	皿		(12.8)	2.4		16世紀末
36	244	3	区域2	S6	京都系土師器	皿		(14.6)	2.4		16世紀後半
36	245	3	区域2	S6	京都系土師器	皿		(16.4)	2.4		
36	246	3	区域2	S6	土師器	耳皿		6.5,3.5	1.3～2.2	3.7,3.3	16世紀後半
36	247	3	区域2	S6	土師器	燭台			8.0+a	7.0	16世紀後半
36	248	3	区域2	S6	瓦質土器	風炉 脚部・下半部			5.9+a		16世紀末～17世紀初
36	250	3	区域2	検出時	磁器	染付碗	肥前		5.9+a	(6.2)	内:コンニャク印版 五弁花文 高台内:大明年製ぐれ銘 18世紀後半
36	251	3	区域2	東壁精査時	磁器	染付	景德鎮		3.1+a		16世紀後半高台部:胎土目あり
36	252	3	区域2	表採	青磁	鉢	肥前		2.6+a	(5.0)	1630～1650波佐見青磁
36	253	3	区域2	検出時	陶器	皿	瀬戸美濃	(10.9)	2.6		16世紀後半
36	254	3	区域2	検出時	陶器	碗	関西系		4.0+a	(8.7)	19世紀 内面に破片が焼きついている
36	255	3	区域2	機械掘削時	陶器	塀	肥前		3.5+a	4.5	17世紀後半～18世紀前半
36	256	3	区域2	機械掘削時	陶器	德利			8.0+a		
36	257	3	区域2	埋戻時	京都系土師器	皿	在地	10.4	2.2		16世紀後半～17世紀前半

白杵城下町跡（月桂寺山門跡・確認調査・立会調査） 遺物観察表

挿図番号	種類	器形	生産地	法量(cm) ()は復元径			遺構名	備考
				口径	器高	底径		
第38図259	施釉陶器	碗	萩	(13.2)	6.9	4.8	月桂寺山門跡 2区	19世紀
第38図260	施釉陶器	鉢	肥前		4.0+ a	10.1	月桂寺山門跡 2区	17世紀末～18世紀前半
第38図261	陶器	摺鉢	唐津		7.0+ a		月桂寺山門跡 2区	19世紀代
第38図262	陶器	摺鉢	肥前系		4.2+ a	20.0	月桂寺山門跡 2区	19世紀
第38図263	施釉陶器	土瓶	九州	(8.2)	3.0+ a		月桂寺山門跡 2区	19世紀
第38図264	磁器	染付碗	肥前	(10.4)	5.0	3.7	月桂寺山門跡 2区	外：折梅か 三重圏線 18世紀後半
第38図265	磁器	染付広東碗蓋	肥前	(5.6)	2.8	(10.3)	月桂寺山門跡 2区	内：花木・一重圏線 外：雲・花木 一重圏線 高台内：花木 1780～1810
第38図266	磁器	染付段重蓋	肥前	(13.0)	3.7		月桂寺山門跡 2区	蓋摘み径：(3.6cm) 18～19世紀
第38図267	磁器	染付紅皿	肥前	7.4	3.8	2.8	月桂寺山門跡 2区	18～19世紀前半
第38図268	磁器	染付瓶	肥前		(3.2+ a)	5.5	月桂寺山門跡 2区	18～19世紀
第38図269	磁器	染付小坏	瀬戸美濃	(6.4)	4.2+ a		月桂寺山門跡 3区	1880頃
第38図270	鉄製品	釘					月桂寺山門跡3区 SK3005	
第39図272	青花	皿	景德鎮	(11.6)	1.8+ a		H27トレンチ	16世紀
第39図273	陶器	皿	唐津	(12.8)	3.3	4.3	H27トレンチ	見込み内に胎土目(砂目) 1600～1630
第39図274	陶器	鉢	唐津		3.6+ a		H27トレンチ	17世紀末～18世紀前半
第39図275	磁器	青磁小坏	肥前	(6.8)	3.8+ a		H27トレンチ	内面にベンガラ付着 雨フリ柳文 1690～1740
第40図277	京都系土師器	皿	在地	(14.9)	2.6		H28トレンチ	
第40図278	青花	皿	景德鎮		1.4+ a		H28トレンチ	
第40図279	陶器	染付皿	唐津	12.2	3.6	4.5	H28トレンチ	18世紀
第40図280	施釉陶器	碗	肥前	(13.0)	5.1	(4.8)	H28トレンチ	17世紀末～18世紀前半
第40図281	施釉陶器	土瓶	九州系		8.0+ a		H28トレンチ	19世紀以降
第40図282	陶胎染付	碗	肥前	(11.1)	5.4+ a		H28トレンチ	18世紀前半
第40図283	磁器	染付皿	肥前	(15.0)	2.9	(6.5)	H28トレンチ	初期伊万里 1610～1630
第40図284	磁器	染付皿	肥前		1.9+ a	8.7	H28トレンチ	18世紀末～19世紀前半 蛇ノ目凹形高台
第40図285	青磁	染付碗	肥前		3.9+ a	(4.0)	H28トレンチ	内面に鉄分付着か 見込手描五弁花
第40図286	青磁	染付碗	肥前		4.9+ a	(4.6)	H28トレンチ	18世紀後半 高台内渦福、見込手描五弁花
第40図287	青磁	染付碗	肥前	(11.0)	6.1	4.4	H28トレンチ	高台内に渦福 見込コンニャク印判 18世紀後半
第40図288	磁器	染付碗	肥前	(8.8)	5.2	3.4	H28トレンチ	18世紀後半 肥前色絵磁器碗 松竹梅環状文
第40図289	磁器	染付紅皿	肥前	7.0	3.5	2.6	H28トレンチ	18世紀末～19世紀
第40図290	磁器	染付小坏		(6.9)	4.1+ a		H28トレンチ	
第42図294	陶器	摺鉢	丹波		9.1+ a		H29トレンチ	17世紀前半
第42図296	磁器	染付土瓶		(5.8)	8.3	(6.6)	H30立会調査	近代ゴミ穴 19世紀代 産地不明
第42図297	磁器	端反小碗	瀬戸美濃	(7.7)	3.6	2.8	H30立会調査	近代ゴミ穴 外：隸字体文 内：付着物あり 19世紀中頃
第42図298	陶器	小型香炉	肥前	6.4	3.2	3.0	2次調査区周辺	工事掘削時出土 19世紀
第42図299	ガラス	瓶		1.0	12.0	4.4	2次調査区周辺	月桂寺山門跡周辺工事掘削時出土 気泡を含む

表2 瓦類観察表

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	地区名	遺構名	種類	寸法(cm)			備考
						長さ	幅	厚さ	
12	15	1	区域1	攪乱	軒平瓦	8.0+ a	3.5	1.4	唐草文
12	16	1	区域1	攪乱	軒平瓦	8.0+ a	4.1	1.9	唐草文
12	17	1	区域1	S4	塼瓦	17.4+ a	11.0+ a	2.6	円孔
12	18	1	区域1	S9	棧瓦	21.5+ a	14.5+ a	1.7	
12	19	1	区域1	S9	丸瓦	21.7+ a	14.8	1.9	表採 狭端面
13	64	1	区域4	S41	軒丸瓦	15.0			珠文14個 巴反時計回り
13	65	1	区域4	表土中	軒丸瓦	13.3			珠文16個 巴反時計回り
13	66	1	区域4	S41	軒丸瓦				珠文2個+ a
13	67	1	区域4	S30	平瓦	26.5	16.0+ a	1.5	
21	90	2	区域1	s7	丸瓦	10.7+	12.2+	1.9	
35	233	3	区域2	S1 No.3	丸瓦	30.2 ~ 30.0	12.4 ~ 13.5	2.4 ~ 3.0	
35	234	3	区域3	S1 No.1.2	丸瓦	30.0 ~ 30.2	13.5 ~ 12.4	3.0 ~ 2.4	コビキA 糸切痕 佐賀関周辺 16世紀後半
36	258	3	区域4	機械掘削時	軒丸瓦	15.0		2.0	左巻三巴文・珠文11個残
38	271	月桂寺山門跡 2区			軒丸瓦	15.5		2.6	珠文16個 表面に金粉あり いぶし焼
39	276	H27トレンチ			平瓦	27.0	19.6	1.5	二次焼成により赤変 (表の方がより赤く変色)
41	291	H28トレンチ			軒丸瓦	13.5	1.7		
41	292	H28トレンチ			軒丸瓦	13.6	13.8		
41	293	H28トレンチ周辺			軒丸瓦	16.4+ a	12.2+ a	1.8	第2次調査3区周辺採取 古手

表3 土製品観察表

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	地区名	遺構名	種類	法量(cm)				備考
						長さ(口径)	幅(器高)	口径(孔径)	重量	
12	14	1	区域1	攪乱	土錘	4.4	1.9	0.8	14.0	
12	20	1	区域1	攪乱	鞆の羽口	5.8+ a	3.9+ a			スス付着
13	39	1	区域2	S15	土錘	4.5	1.5	0.5	8.2	
20	80	2	区域1-1	S5	有溝土錘	2.4	2.2	0.4	10.7	
21	100	2	区域1-1	S15	土錘	2.1+ a	1.0	0.3	2.1	
24	158	2	区域2-2	S6	土錘	2.8+ a	0.9	0.3	2.0	
27	195	2	区域3-1	S9	取瓶	5.0	1.7			
27	200	2	区域3-1	検出時	土錘	4.0+ a	1.1	0.3	4.8	
35	241	3	区2	S2	土錘	4.7+ a	1.1	0.35	5.6	
42	295	H29トレンチ			土錘	5.9	1.3		10.3	孔径: 0.5cm

表4 石製品観察表

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	地区名	遺構名	種類	材質	法量(cm)				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
13	42	1	区域2	表土中	砥石	角閃石安山岩	2.7+ a	2.0	1.7	12.3	
27	192	2	区域3-1	S8	砥石	赤間石	5.0	3.7	0.7	19.5	

表5 銅銭・金属製品観察表

銅銭

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	区域名	遺構名	銭貨名	国・王朝名	初鑄年	重さ (g)	直径 (cm)	書体	備考
13	40	1	区域2	検出時	寛永通寶	日本	1636 ~ 1659	3.0	2.4		古寛永1期
13	41	1	区域2	検出時	天禧通寶	北宋	1017	3.3	2.5		
22	134	2	区域1-1	検出時	洪武通寶	明	1368	2.1	2.1		
24	157	2	区域2-2	S4	咸平元寶	北宋	998	2.4	2.4	真書	
25	170	2	区域2-2	検出時	寛永通寶	日本		2.9	2.5		
36	249	3	区2	S6	熙寧元寶	北宋	1068	2.9	2.4	真書	
34	231	3	区1	E-3グリッド	不明	不明	不明	2.3	2.3	不明	

金属製品

挿図 番号	遺物 番号	調査 回数	地区名	遺構名	種類	長さ	幅	高さ (厚さ)	重さ (g)	備考
13	21	1	区域1	S4	銅製水滴	6.5	3.3	1.8	51.8	
20	81	2	区域1-1	S5	釘	6.9	0.5		4.8	鉄
21	101	2	区域1-1	S15	釘	1.6	0.6		0.1	銅
21	102	2	区域1-1	S15	釘	4.0	1.7		11.3	鉄
21	103	2	区域1-1	S15	釘	6.6	1.0		7.1	鉄
22	112	2	区域1-1	S17	釘	5.1	1.3		13.7	鉄
23	149	2	区域1-2	検出時	釘	8.0	2.1	1.5	23.7	鉄
23	150	2	区域1-2	S3	釘	6.1	2.1	1.0	16.4	鉄
26	183	2	区域3-1	S7	釘	7.7+ a	0.8		26.7	鉄
27	193	2	区域3-1	S8	釘	11.8	0.6		25.9	鉄
27	194	2	区域3-1	S13	釘	6.5	0.5		12.7	鉄
34	230	3	区1	遺構検出時	掛仏	3.5	2.2	1.2	15.7	鉄

第4章 自然科学分析

白杵城下町遺跡出土水滴の蛍光X線分析

大分県立歴史博物館 学芸員 石川 優生

1 はじめに

白杵城下町跡1次調査区域1S4（土坑）から出土した水滴1点について、蛍光X線分析を行った。16世紀代に比定される水滴は、上面中央に注ぎ口があり、欠損しているものの隅に細い棒状の筒が施されていたと推測される。水滴の各面、注ぎ口を測定した結果、特徴的な結果が得られた。本項では、蛍光X線分析結果をもとに材質、構造について考察する。

2 蛍光X線分析

蛍光X線分析には別府大学所有のSII ナノテクノロジー（株）製SEA5230Aを用いた。分析条件は測定時間：300秒、管電圧：50kV、管電流：52～116 μ A、照射面積：1mm ϕ 、雰囲気：大気である。分析資料は表面および内部が錆びており、錆びの除去は困難と判断され、錆びの除去はせず測定を行った。そのため、分析結果には錆びの影響が含まれていることを考慮する必要がある。

3 分析結果

水滴の上面、注ぎ口、側面、底部、欠損している筒部分の10箇所を測定した。分析結果はTab.1に示す。ほとんどの測定箇所から、90%以上の銅が検出された。また、ほとんどの箇所に鉛が1%含まれているが、不純物として含まれていると考えられる。測定箇所のうち、上面のusk01、usk02、usk10とでは、含有元素に違いが見られた。usk02から約5%の金が検出、また注ぎ口のusk03からも約10%の金、不純物と考えられる銀が微量に検出された。金が検出されるということは、例えば赤銅、鍍金の可能性が推測される。赤銅は銅に金を3～5%加えた合金である¹⁾。鍍金は金アマルガム法によって、水銀を用いて鍍金する技法が古くから知られている。金が検出された箇所からは水銀は検出されなかったことから、鍍金が施された可能性は低い。赤銅の場合、銅と金の合金であり铸造した際のばらつきが発生する可能性はあっても、一部分だけ金が検出されることは考えにくい。上面の隅を測定したusk10からは金は検出されなかった。上面の中央、注ぎ口に、金が意図的に用いられ

Tab. 1 蛍光X線分析結果

(単位：mass%)

測定箇所	分析番号	銅	スズ	鉛	鉄	水銀	金	銀
		Cu-K α	Sn-K α	Pb-L α (※：Pb-L β)	Fe-K α	Hg-L α	Au-L α	Ag-K α
上面	usk01	99	0	0.6	0.2	0	1	0
上面	usk02	94	0	0	0.4	0	5.6	0
上面(注ぎ口)	usk03	85	0.1	0.2	5.1	0	9.4	0.5
上面(筒欠損部)	usk04	99	0.7	0.4	0.3	0	0	0
側面	usk05	100	0	0.4	0	0	0	0
底部	usk06	98	0	1.2	0.3	0	0.2	0
側面	usk07	98	0	1.2	0.7	0	0.2	0
側面	usk08	98	0	1.1	0.9	0	0	0
側面	usk09	99	0	0.7	0	0	0	0
上面	usk10	99	0	0.5	0.2	0	0	0

ていた可能性が推測されるが、鍍金されていたのか、赤銅のような合金なのかは判断が困難である。

内部構造をみると（Photo. 1・大分県立歴史博物館撮影）、底部および写真1の右下の筒欠損部は別材であることがわかる。しかし、化学組成は側面とはほぼ一致することから、同じ金属で製作されたと考えられる。また、そのほか上面および側面部分は、金が検出された箇所はあるものの、地金は同一の純銅素材といえる。

4 まとめ

蛍光X線分析によって、水滴の材質が明らかになった。材質は鉛や銀の不純物をごく微量に含む純銅であるとわかったが、上面の一部、注ぎ口に金が検出された。金が施されていることは鍍金や赤銅の可能性はあるが、蛍光X線分析では判断が困難であった。目視では金が認められず、どの範囲まで金が施されているのか不明である。しかし、水滴に金があしらわれていたことは、金で細かな細工なども施されていた可能性も考えられ、当時の水滴の事例としては貴重であり、臼杵城下町遺跡の工芸や流通などに関連すると示唆される。

参考・引用文献

- 1) 村上隆『金・銀・銅の日本史』, 2008, 岩波新書

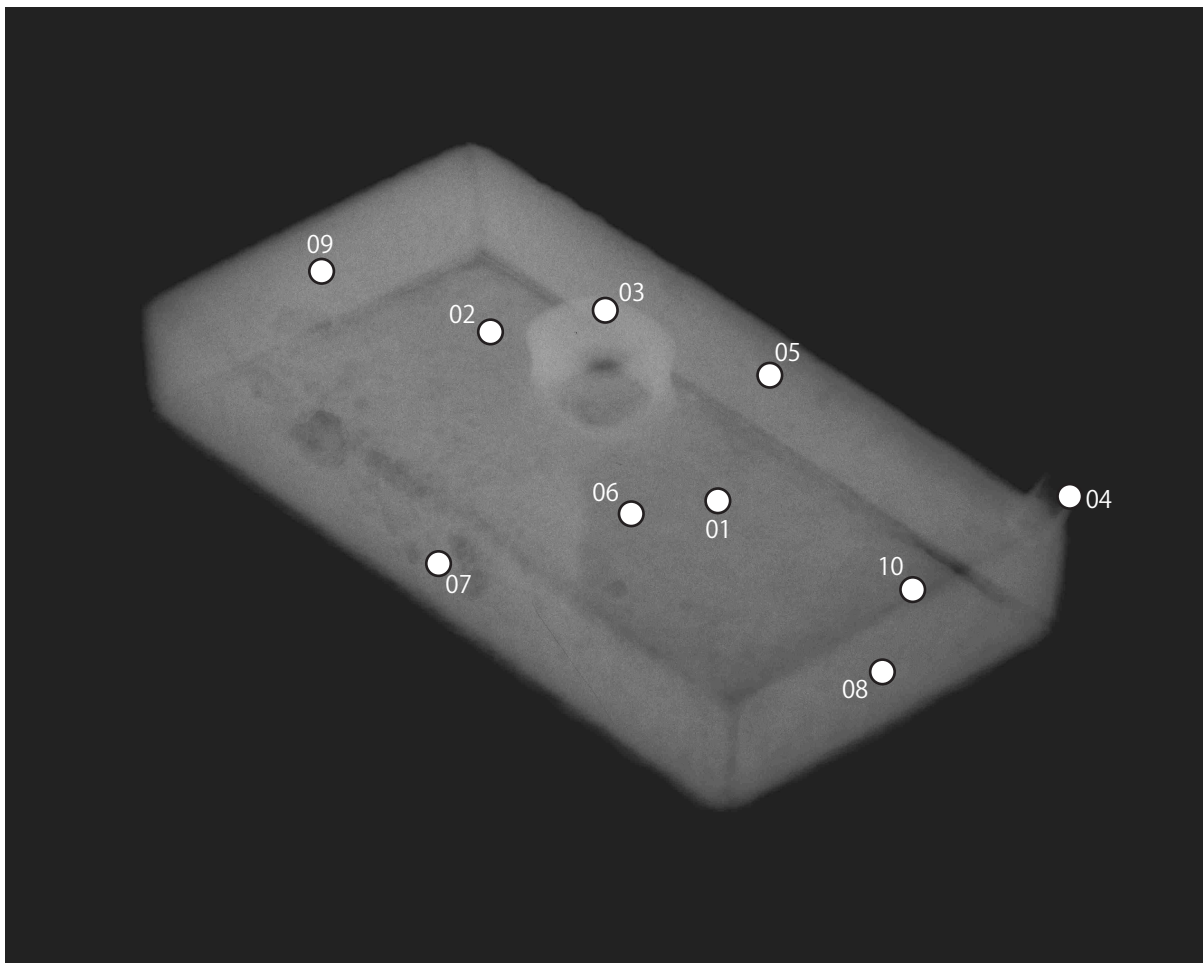


Photo.1 水滴のX線透過写真（数字は蛍光X線分析の測定箇所）

第5章 総括

第1節 遺構について

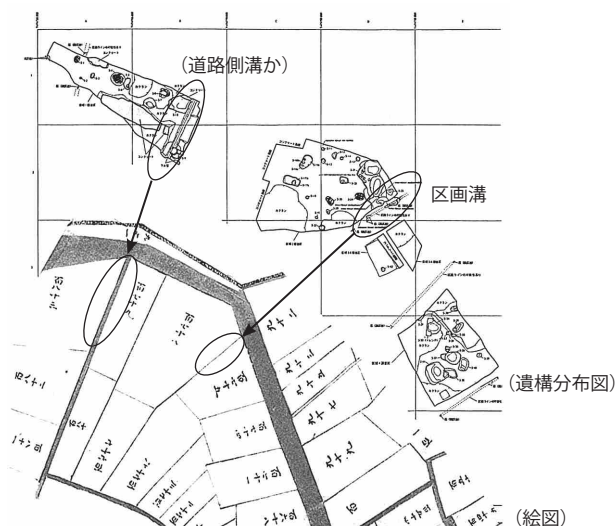
白杵城下町の形成過程を概観すると、弘治2年（1556）に大友氏義鎮が白杵城を築き、永禄8年（1565）頃に城の周辺に都市が形成される。当時の状況はイエズス会の記録にあらわれる。大友氏改易後、白杵城には福原直高が文禄3年（1594）、太田一吉は慶長2年（1597）に相次いで入封しており短期間の領主の変遷がみられる。次の稲葉貞道が慶長5年（1600）入封後、近世城下町の本格的な整備に着手し、寛永4年（1627）頃にはほぼ完成したとされている。具体的には、前代の屋敷の再整備、空堀の開削など防衛強化、城下町の範囲拡大などが進められたとされる（註1）。出土した遺物の年代から遺構をみると、戦国期の16世紀代と近世の17世紀～19世紀の大きく2つに区分できる。

戦国期の遺構としては、1次調査区域1のS7が出土した京都系土師器皿から16世紀後半～17世紀初頭に比定できる。3次調査区域2のS6は16世紀末～17世紀初頭に比定できる京都系土師器皿を出土しており、福原直高の時期（文禄3年～慶長3年）の可能性もある。太田氏による城下整備以前を含む短期間の躍動的な城下町の変遷を示す資料のひとつと考えたい。

近世の遺構については、後世の開発等で大きく掘削されており、当時の屋敷や構造物を復元できるものではなかった。ただ、屋敷を区画すると考えられる石組溝を1次調査区域2の南端、区域3と区域4の間、区域4の南で確認した。このうち区域2南端の溝は区画の土層断面の観察から近現代に設けられたものであるが、近世の溝位置が踏襲され造り替えを伴いながら継続されたと思われる（註2）。図示した概念図は区画溝が屋敷区画の一部とほぼ一致すると考えられる（第43図）。

註1 神田高士2001年「6. 戦国期都市白杵について—もうひとつの大友戦国都市—」『南蛮都市・豊後府内』大分市教育委員会・中世都市研究会

註2 近世城下町の街並みが残っている地域では散見される。（1998年『杵築城下町遺跡2』都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育庁埋蔵文化財センター）



※絵図は「第四大区十二小区白杵村絵図」（明治五年 『白杵市史（中）付図Ⅱ』白杵市 平成3年）を使用

第43図 区画溝等位置図

第2節 出土遺物について

陶磁器・土器類

今回報告した出土遺物について、製作年代別に概観したい。

13世紀：出土した磁器の中では景德鎮窯の青磁皿（199）が最も古い。

15世紀：中国製の青磁碗（95）、龍泉窯の青磁大皿（26）がある。景德鎮窯の青花皿（180）は15世紀後半～16世紀前半にあてられる。

16世紀：磁器類では景德鎮窯の碗（43）・青花皿（44）・合子身（226）、中国産の白磁碗（156・220）、陶器では備前の浅鉢（37）がある。

16世紀後半：磁器類では、景德鎮窯の製品が青花皿（227）－景德鎮E類－、青花皿の底部（93）、青花碗（113）、染付底部（251）や漳州窯の青花皿（114）、華南の白磁皿（116）がある。陶器では、朝鮮王朝産陶器の舟徳利（144）、瀬戸美濃産の皿（253）、備前の陶器鉢（228）、唐津焼の陶器皿（83・148・236）や志野焼の沓茶碗（184）は製作年代が1590年～1610年に特定できる。肥前産の碗（55）は16世紀末～17世紀前半の製作年代である。瓦質土器には火鉢（168・219）がある。168は豊後産である。燭台（246）は土師質である。土師器は糸切り皿（88・143）、小皿（132）は16世紀後半～17世紀前半にあてられる。京都系土師器皿は16世紀後半（224・244）、16世紀後半～17世紀初頭（123）、16世紀末（243）、16世紀末～17世紀初頭（175）の変遷が窺える。

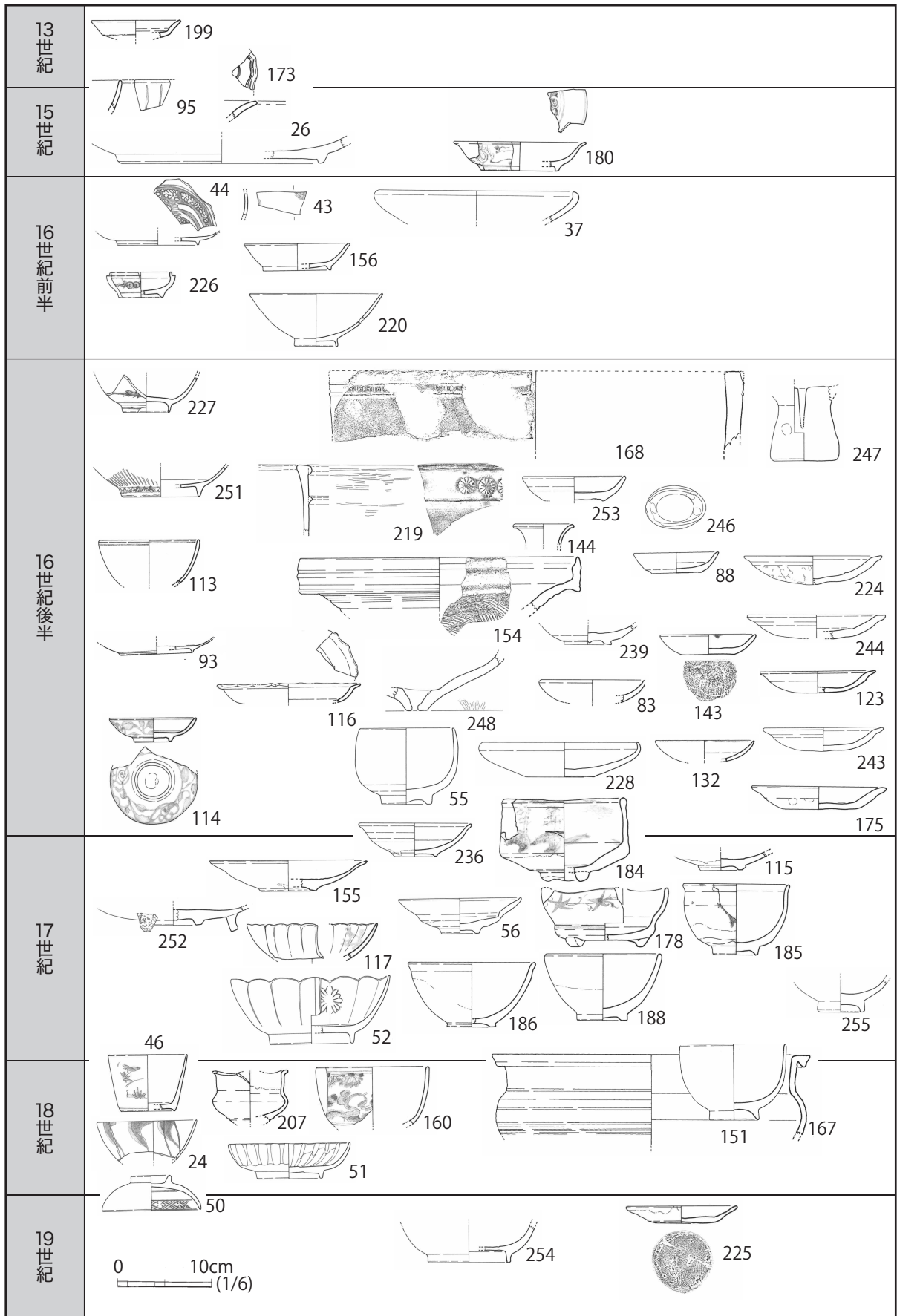
17世紀：磁器では肥前波佐見の青磁鉢（252）が1630年～1650年、肥前産と思われる白磁皿（155）が1600年～1630年の製作年代を特定できる。伊万里の白磁皿（117）は17世紀後半～18世紀前半、肥前産の白磁鉢（52）は17世紀末～18世紀前半である。陶器では肥前産の皿（56）が1600年～1630年代に特定できる。織部焼の鉢（178）は1610年代、唐津焼の碗（186・188・185）は17世紀代である。陶器碗（151）は17世紀末～18世紀である。

18世紀：磁器では肥前産の青磁香炉（207）が18世紀代、染付碗（46）は18世紀後半である。碗（24）は1780年～1810年代の製作年代である。染付蓋（50）は18世紀末、白磁皿（51）は18世紀末～19世紀である。陶器では肥前産の陶胎染付碗（160）は18世紀前半、碗（255）・鉢（167）は17世紀末～18世紀前半である。

19世紀：関西系の陶器碗（254）、土師質土器（225）一灯明皿—などがある。

水滴（第図21）

1次調査区域1のS4（土坑）から出土した長方形の銅製水滴は長さ6.5cm、幅3.3cm、高さ1.3cmの大きさで、注口部が上面の一角に付く。細く短い筒状の突起である。水入口は上部中央部に付く。類例として、愛媛県松山市の湯築城の水滴があげられる（註1）。この水滴は銅製で、大きさは5.9cm×3.8cm、高さ1.2cmの直方体。中央に水入口が開けられており、注口は上面角の一角に設けられた小さな円孔である。出土地は湯築城跡の内部中央付近（aE-51地区）である。湯築城の存続期間は16世紀代であると考えられることから、この水滴は城の存続時期にあたることが想定される。大きさや形態的な特徴から同時期と考えられる。



第44図 陶磁器・土器類編年略図

写 真 图 版

※遺物写真の番号は遺物実測図の
番号と共通



1次調査区全景



2次調査区全景（東方向から）—右から区域1・2・3—



3次調査区全景（北方向から）



1次区域1土層断面(西壁～北壁)



1次区域1全景(東方向から)



S1(東方向から)



S3(東方向から)



S7(東方向から)



S4水滴出土状態

S4(東方向から)



S8(北東方向から)



S9(東方向から)



S10(北方向から)



1次区域2全景(南方向から)



北壁土層(南方向から)



東壁土層(南西方向から)



S11(南方向から)



S17(南方向から)



S24(西方向から)



S21(北向から)



区画溝(西方向から)



区画溝(西方向から)



1次区域3全景（北方向から）



西壁土層断面



1次区域4全景（北方向から）



区域4東壁土層断面（西方向から）



S30・41（西方向から）

S34（西方向から）

S40（東方向から）



2次区域1-1土層1 (東方向から)



2次区域1-1S 1唐津焼鉢出土 (東方向から)



2次区域1-2全景 (東方向から)



2次区域2-1全景 (東方向から)



2次区域2-2全景(東方向から)



2次区域3-1全景(西方向から)



2次区域3-1土層12(東方向から)



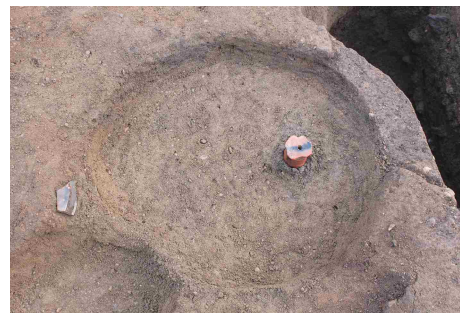
区域3-1 S6・7土層(北西方向から)



区域3-1 S7・8土層(南東方向から)



区域3-2全景(南方向から)



区域3-1 S10(北西方向から)



3次区域1全景（西方向から）



3次区域1土層1（西方向から）－東壁中央部－



3次区域1 S1全景（南方向から）



3次区域1 S7全景（東方向から）



3次区域2全景（西方向から）



3次区域2東壁南半部一土層3一（西方向から）



3次区域2 S1全景（東方向から）



3次区域2 S1全景（東方向から）



月桂寺山門跡 (調査前)



月桂寺山門跡1-1区SP1001 (検出)



月桂寺山門跡1-1区SP1001 (完掘)



月桂寺山門跡1-2区



月桂寺山門跡1-2区完掘



月桂寺山門跡2区



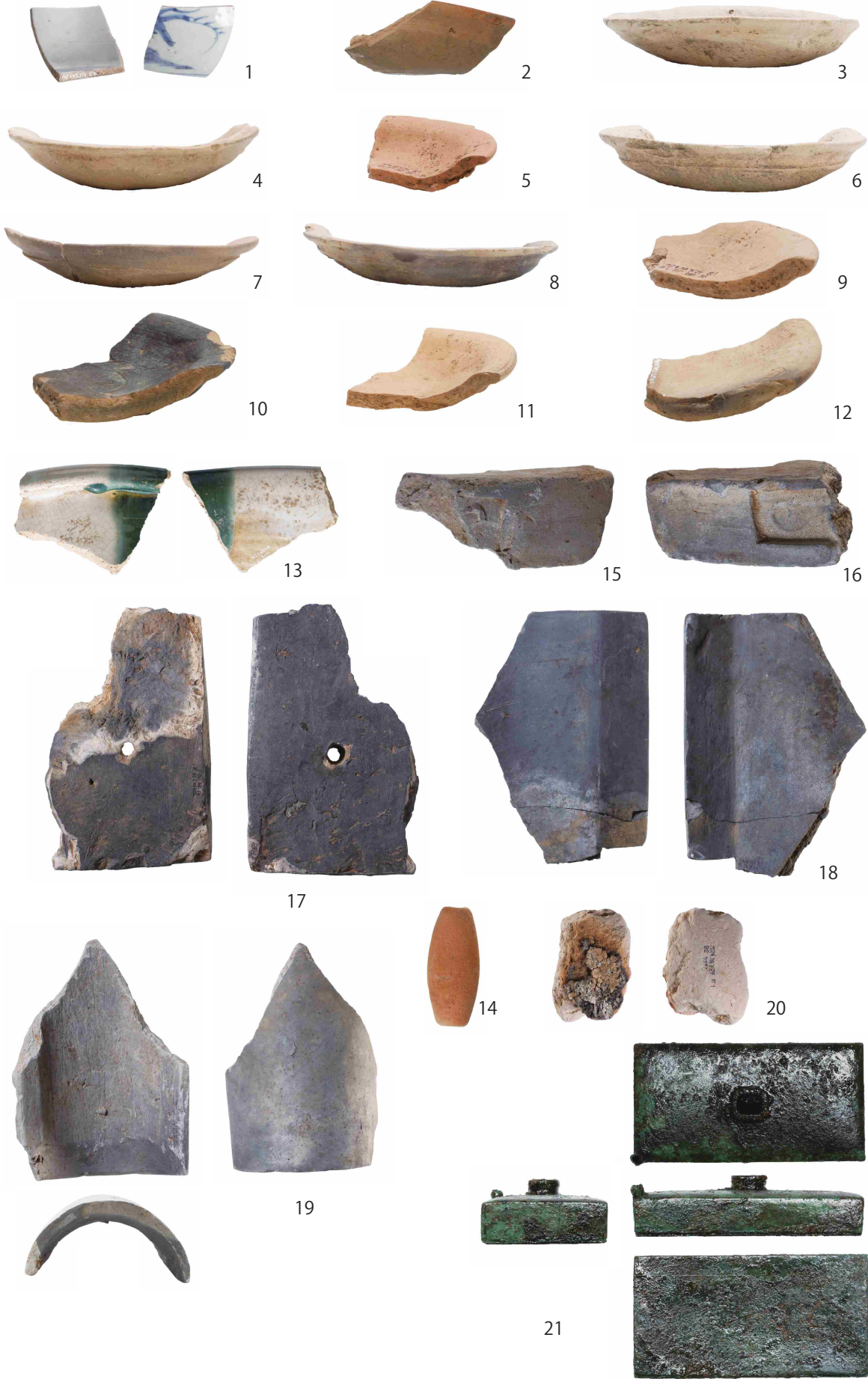
月桂寺山門跡2区SD2001



月桂寺山門跡3区遺構検出状況



月桂寺山門跡3区完掘







48



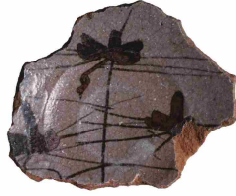
52



53



49



54



55



58



50



56



59



51



57



60



61



64



62



65



51



63



66



67





70



71



72



68



73



74



75



76



69



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



92



93



90



95



96



91



94



97





98



99



100



101



102



103



104



106



105



107



109



108



112



110



111



113



115



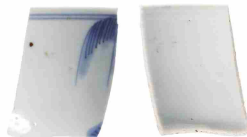
116



117



114



118



119



120



121





147



151



152



148



153



154



155



156



157



160



158



161



159



162



149



150



162



163



164



165



166



167



168



169



170



171



172



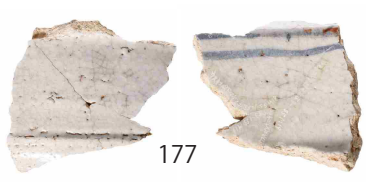
174



175



173



177



181



182



178



183



179



187

176



180



188



184



189



190



191



186



185



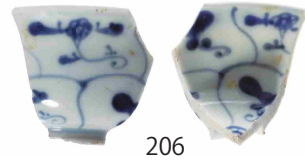
192



193



194





217



218



219



220



221



222



224



225



229



228



223



230



231



233



226



232



234



227



236



237



239



238



235



240





241



243



244



245



242



246



252



253



247



250



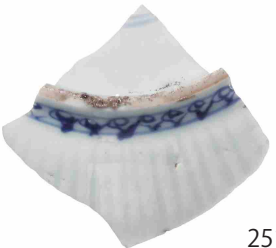
254



255



248



251



257



256



249



258



259



264



265



266



271



272



273



278



279



283



284



291



292



293



294

報 告 書 抄 録

ふりがな	うすきじょうかまちあと
書名	臼杵城下町跡
副書名	都市計画道路祇園洲柳原線街路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	横澤 慈、小林昭彦、石川優生
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152 大分市牧緑町1-61
発行年月日	令和2年(2020) 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		調査 回数	北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号						
うすきじょうかまちあと 臼杵城下町跡	うすきしおおあざうすき 臼杵市大字臼杵	44206	206066	1次～ 3次	33°07'09"	131°36'09"	(1次調査) 2015年12月8日～ 2016年1月5日 (2次調査) 2016年11月9日～ 2017年1月12日 (3次調査) 2018年4月16日～ 2018年5月8日	967.1	都市計画道路 祇園洲柳原線 街路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
臼杵城下町跡	集落	中世～ 近世	土坑、ピット、溝 など	土器、陶磁器類、銅製水滴等	16世紀後半～17世紀初頭の生活痕跡を 示す土坑や近世の武家屋敷を区画すると 考えられる溝

要 約	<p>今回の調査を実施した臼杵城下町跡の南部地域は武家屋敷が形成されたことが絵図などから知られていた。調査の結果、近世以前の遺構面は近現代の造成や建物基礎等で削平され、当時の建物を示す遺構などは残っていない。しかし、地山の砂層に達する土坑などを確認することができた。また、近世の屋敷境を示すと思われる区画溝を確認した。このように当該調査地区では戦国期から近世の移行期の生活痕跡や近世武家屋敷の区画溝など城下町形成の一端を示す重要な所見が得られたと考える。</p>
-----	---

大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第11集

臼杵城下町跡

都市計画道路祇園洲柳原線街路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

令和2(2020)年3月31日

発行 大分県立埋蔵文化財センター

印刷 極東印刷紙工株式会社

